

黒田大明神原 B 遺跡

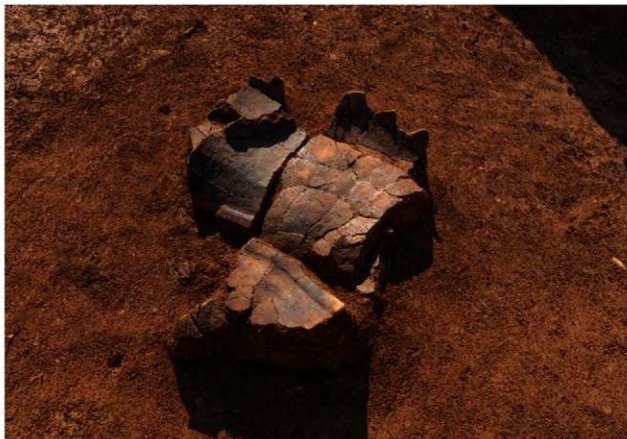
—一座光寺上郷道路及び中部公衆医学研究所社屋等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2024 年 3 月

長野県飯田市教育委員会



調査区全景



縄文中期初頭土器 (SK226)



弥生時代の炭化穀類 (SP357)

例 言

- 1 本書は長野県飯田建設事務所が計画する座光寺上郷道路及び一般財団法人中部公衆医学研究所が計画する社屋等の建設に先駆けて実施した埋蔵文化財包蔵地「黒田大明神原B遺跡」における記録保存のための緊急発掘調査報告である。
- 2 本書で報告する内容は、令和3年度(2021年度)から令和4年度(2022年度)にかけて発掘調査を実施し、令和5年度(2023年度)に整理・報告書作成のための作業を実施した。
- 3 調査は、飯田市教育委員会が直営で実施した。対象年度における調査体制は以下のとおりである。

(1) 調査組織

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 代田 昭久(令和3年度)
熊谷 邦千加(令和4年度～)

調査担当者 春日 宇光

作業員 伊東 裕子 上沼 実由 翁 詩織 木下 由紀子 熊崎 一夫
小林 洋夫 坂下 比佐夫 塩澤 朋和 関島 修 関島 真由美 中田 恵
中村 地香子 中村 千枝子 中村 安伸 久田 誠 樋本 宣子 福澤 育子
三木 美保 宮内 真理子 松本 正彦 森山 律子 吉川 悦子

(2) 事務局体制

飯田市教育委員会

教育次長 秦野 高彦(令和5年度)

参与 松下 徹(～令和4年度)

文化財保護活用課長 馬場 保之(令和3年度) 宮下 利彦(令和4年度～)

文化財課長補佐兼文化財用地担当専門幹 関島 隆夫(令和3年度)

文化財保護活用課長補佐兼文化財担当主幹 宮澤 貴子(～令和4年度)

文化財保護活用課長補佐兼文化財保護係長 下平 博行

文化財保護担当専門主査 吉川 金利(令和3年度)

文化財施設整備担当専門技査 市瀬 正勝(令和4年度～)

文化財保護活用課文化財保護係 木下 正史 春日 宇光 伊藤 蔵之介(令和5年度)

鎌倉 愛梨(令和5年度) 澁谷 恵美子(令和3年度)

文化財保護活用課文化財活用係長 坂井 勇雄

文化財保護活用課文化財活用係 羽生 俊郎 西脇 充 加藤 大智(令和5年度)

(3) 指導・協力

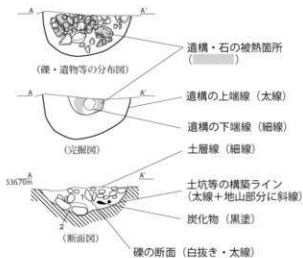
長野県教育委員会 文化財・生涯学習課

- 5 本調査に係る調査略号をDIMB2542-19とし、調査における各種記録や出土遺物の注記等に使用した。
- 6 発掘調査は春日宇光が担当した。
- 7 本報告書のうち第3章 第4節4(石器)及び第4章総括における石器に関する記載は加藤大智が担当し、他を春日宇光が執筆・編集した。付章は自然科学分析を担当したパリオ・サーヴェイ株式会社が執筆した。

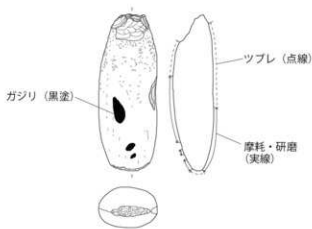
- 8 発掘作業及び整理・報告書作成にあたり、下記の諸氏よりご指導・ご助言いただいた。(五十音順)
- 会田 進 市澤 英利 井村 舜也 川崎 保 小林 正春 桜井 秀雄
 鈴木 時夫 谷 和隆 富田 航生 賛田 明 平林 彰 藤森 英二
 守屋 豊人 山下 誠一 綿田 弘実
- 9 本件に伴う業務委託は、以下のとおりである。
- 基準点測量・標高析出・航空写真撮影等：株式会社コバコン
 出土遺物自然科学分析：バリノ・サーヴェイ株式会社
 石器実測（支援）：株式会社シン技術コンサル
- 10 本書掲載地図等の作成にあたっては、1/25,000 飯田市全図及び 1/2,500 都市計画基本図を使用した。(承認番号 5 飯地計第 268 号)
- 11 調査の記録類および出土遺物は飯田市教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 本書で用いる座標値は、世界測地系による。
- 2 遺構には文化庁文化財部記念物課監修 2010 『発掘調査のてびき - 集落遺跡発掘編 -』 p242「表9 遺構記号」に基づき以下の略号を用いた。
- 竪穴建物・竪穴状遺構：SI 集石：SS 土坑：SK 溝：SD ビット（小穴）：SP
- 3 遺構・遺物図で共通して使用する記号・表現は、以下のとおりである。



【遺構】



【石器】

- 4 実測図の断面については土器・石器ともに白抜きで示した。ただし、胎土に繊維を含む土器については断面を網掛けで表現した。
- 5 土層観察については小山正忠・竹原秀雄 2015 『新版 標準土色帖』の表示に基づいて記録した。本報告図版上の記載も上記文献に準拠したうえで、土層番号、土色の略号表記（色相・明度/彩度）、土性の略号表記の順に示した。

目 次

第1章 調査の経過と方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
1 発掘作業	1
2 整理・報告書作成作業	2
第3節 調査の方法	3
1 調査略号	3
2 調査グリッド等の設定	4
3 遺構番号と種別	4
4 発掘作業及び整理作業の方法	6
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3節 遺跡の範囲と地形	8
第4節 調査履歴と調査地点	9
1 既往の調査	9
2 今次調査対象地	10
第3章 調査の成果	11
第1節 基本層序	11
第2節 遺構・遺物の概観	13
第3節 遺構	21
1 縄文時代の竪穴建物・竪穴状遺構	21
2 弥生時代の竪穴建物	36
3 集石・被熱土坑	47
4 土坑	56
5 袋状土坑	84
6 落とし穴	85
7 立石	85
8 溝	85
9 ビット	87
第4節 遺物	105
1 縄文時代の土器	105
2 縄文時代の土製品・焼成粘土塊	108
3 弥生時代の土器	108
4 弥生時代の土製品	109

4 石器	109
第4章 総括	147
1 縄文時代の遺構と遺物	147
2 弥生時代の炭化穀類等について	149
3 石器について	149
4 黒田大明神原 B 遺跡における集落と変遷	150
引用・参考文献	152
付章 黒田大明神原 B 遺跡出土炭化物の自然科学分析	155

写真図版

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経緯

長野県飯田建設事務所は、座光寺スマートインターチェンジから土曾川沿いの河川敷を下って上郷地区北条に予定されるリニア中央新幹線長野県駅（仮称）へ至る新設道路「座光寺上郷道路」を計画した。この道路の計画区間には上位段丘面の座光寺原遺跡や宮崎下遺跡、下流側の座光寺石原遺跡やナギジリ古墳群など多くの遺跡が分布しており、長野県教育委員会（以下「県教委」）の指導のもとで諸条件が整った箇所から長野県埋蔵文化財センターが発掘調査に着手することとなった。

その一方で、計画の一部には座光寺上郷道路と交差する伊那南部広域農道へ接続する新設道路と、既存市道の付け替えのための新設道路がそれぞれ付帯することとなり、この箇所が周辺の埋蔵文化財包蔵地「黒田大明神原B遺跡」に該当した。また、この計画と並行して、新設予定の付け替え道路と座光寺上郷道路が広域農道へ接続する地点に、一般財団法人中部公衆医学研究所による社屋等新築の開発事業が計画されていることが判明した。飯田市教育委員会（以下「市教委」）は各事業者との事前協議により、道路工事と民間開発が施工の都合上、ほぼ同時に実施される予定であることを把握した。そのため、当該区域に分布する埋蔵文化財の保護について、各事業者と市教委が開発内容の確定に備えて相互に情報を共有し、保護措置の円滑化に努めた。

長野県飯田建設事務所による座光寺上郷道路の工事については、当遺跡を含む区間は令和3年2月17日付で文化財保護法第94条の規定に基づく土木工事のための埋蔵文化財発掘の通知が提出された。同年3日11日付で県教委から保護措置として発掘調査を指示する文書が発出された。

一般財団法人中部公衆医学研究所による開発工事については、令和3年4月9日付で文化財保護法第93条の規定に基づく土木工事のための埋蔵文化財発掘の届出が提出された。同年4日16日付で県教委から保護措置として発掘調査を指示する文書が発出された。

以上の開発計画と当遺跡における調査履歴を照合した結果、過去に発掘調査実施済みの箇所を除く事業地のほぼ全域が埋蔵文化財に影響が及ぶ恐れがあると考えられ、本調査の対象となった。その後、県教委の指導・助言のもとで各事業者と市教委が協議を行い、当遺跡のうち座光寺上郷道路本線部分の発掘調査は長野県埋蔵文化財センターが担当することとなり、付け替え道路と民間開発箇所の発掘調査は市教委が実施することで合意に至った。

調査対象となった道路敷地及び社屋等新築工事の事業地は一連の土地であることから、事業地を区別することなく、同時かつ一体的に発掘作業を実施することとした。また、成果品としての発掘調査報告書の刊行を令和5年度中とし、その内容については双方の成果を合同して1冊に収めることとした。各事業者と市教委は以上の事項を定めた協議書を締結した。

第2節 調査の経過

1 発掘作業

現地における発掘作業は令和3年度と令和4年度に実施した。令和3年度は森林となっていた上郷黒田2542番19付近から調査を行うこととし、各事業者と委委託契約を締結の上、樹木が伐採された後の9月3日から現場の設営及び環境整備等を行った。同7日よりバックホウを搬入して表土

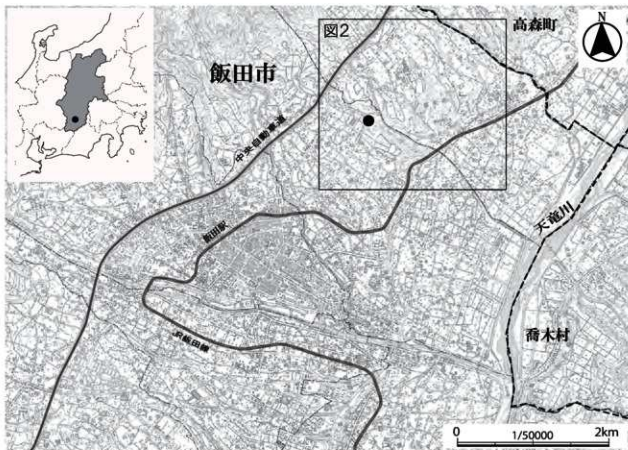


図1 調査位置(1)

の掘削を実施の上、順次人力による遺構精査・掘削・記録作業に移行した。なお、本調査と並行して隣接地で長野県埋蔵文化財センターによる試掘・本調査が行われ、同11月末に作業が終了している。市教委は年末年始を挟んで作業を続け、令和4年1月31日をもって令和3年度作業を終了した。

令和4年度調査は各事業者と委委託契約を締結し、4月22日より作業を開始した。前年度に表土を剥いだ旧森林地点の記録が終了したため、同17日より重機を搬入し、果樹園として利用されていた地点の表土掘削を行った。懸案事項であった廃土置き場については前年度の長野県埋蔵文化財センターが担当したトレンチ調査によって遺構が存在しないことが確認された調査区南西側の用地内に確保することができたため、バックホウで掘削した表土はクローラードンプで置き場まで運搬し、土山を形成した。いったん重機は撤収して遺構精査・掘削・記録を進めた。7月7日から再度重機を搬入し、残る箇所の表土掘削を終え、作業を進めた。委託者の許可を得たうえで9月23日に市民に向けた現地見学会を開催し、調査成果の一部を公開した。10月25日にすべての作業を終了し、現場を撤収した。

2 整理・報告書作成作業

基礎的な整理作業を令和3・4年度の発掘作業期間外に進めたうえで、報告書刊行に向けた本格的な整理作業を令和5年度に実施した。年度当初に発掘調査報告書を最終的な成果品とする委委託契約を締結した。作業は各市職員が担当し、飯田市考古資料館（飯田市上川路）と飯田市考古博物館（飯田市上郷別府）の双方を作業所として使用した。飯田市考古博物館では主に図面台帳の作成

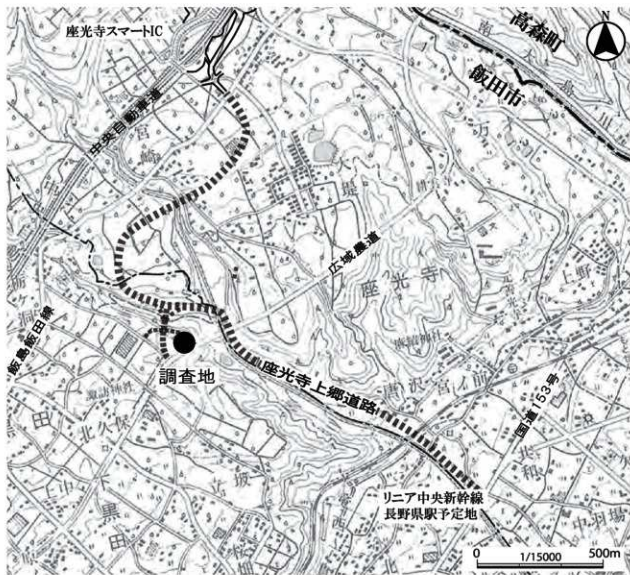


図2 調査位置(2)

や第二原図の作成などを行い、これと並行して土器・石器等遺物の洗浄・接合・復元・実測・拓本採り等を飯田市考古資料館で実施した。多量に出土した石器の実測については業務の効率化のため、一部を株式会社シン技術コンサルへ委託した。また、本調査において重要な成果である縄文早期の遺構・遺物や弥生時代の炭化穀類等については、その帰属年代や種別等を明らかにするためバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、放射性炭素年代測定及び樹種等同定のため科学分析を行った。

遺構・遺物の評価のため、長野県教育委員会の費田明氏並びに長野県埋蔵文化財センターの綿田弘実氏を招聘し、指導・助言を得た。両名のほか、発掘作業・整理期間中に個別に指導を頂いた方は例言に列記している。令和6年3月に本報告書を刊行し、委受託事業を終了した。

第3節 調査の方法

1 調査略号

当市教委が実施する発掘調査においては、記録の便宜を図るため調査略号を記録に用いる。その表

記方法は、基本的に遺跡の名称をアルファベット3ないし4文字で表現し、その後に続けて調査地点の代表地番を付すものである。これまでに旧「大明神原遺跡」内における調査では、以下の調査略号が使用されている。

昭和61～63年度調査(旧上郷町): DIM

平成7年度調査: DIM

平成8年度調査: KDIM

平成10年度調査: KDIM2542-19

以上のように、かつて当遺跡が「(黒田)大明神原遺跡」に一括されていたため、遺跡名の略として「DIM」及び「KDIM」が用いられたが、現在は「黒田大明神原A遺跡」と「黒田大明神原B遺跡」に分割され別個の遺跡として登録されている。

今次調査においては黒田大明神原B遺跡を「DIMB」で表し、調査地の代表地番である上郷黒田2542-19から「2542-19」を付け、本調査略号を「DIMB2542-19」と表記した。なお、発掘作業は令和3年度と令和4年度に分かれたが、一貫して上記の調査略号を用いた。

2 調査グリッド等の設定

今次調査では『切石遺跡』(飯田市教育委員会 2009) で定めた区画法に基づき調査区を区画した。その方法の概略は以下のとおりである(図3)。

- (1) 1:50000大縮尺地形図(国土地理院)の区画に準ずる(社団法人日本測量協会 1969『国土基本図式共通適用規定』)。飯田市は第Ⅷ座標系に属するが、表記を省略する。
- (2) 座標系のY軸及びX軸を基準とし、南北300km、東西160kmの区域を30km×40kmの長方形区画に分割し、「LC」のようにアルファベット大文字2字の組み合わせにより表示する。
- (3) 30km×40kmの区画を100等分し、3km×4kmの長方形区画に分割する。アラビア数字で区画番号を定め、「LC75」のように表示する。
- (4) 3km×4kmの区画を25等分し、600m×800mの長方形区画に分割する。アラビア数字で区画名を定め、「LC75 1」のように表示する。
- (5) 600m×800mの区画を48等分し、100m×100mの正方形区画に分割する。アラビア数字で区画番号を定め、「LC75 1-43」のように表示する。
- (6) 100m×100mの正方形区画を2500等分し、2m×2mの正方形小区画(グリッド)に分割する。区画の名称は南から北へCA～CY・DA～DY、西から東へ0～49とし、例えば「CE01」のように表示する。

当該方式に基づく区画方法において、今次調査区は100m×100mの正方形区画「LC75 1-43」・同「44」内に位置する。調査においてはグリッドを用いて各種記録を行った。

3 遺構番号と種別

遺構番号 すべての遺構に対し、001から検出順に通し番号を付与した。通し番号の総数は736番までである。ただし、遺構番号の付与後に遺構でないことが判明したものや、他の遺構と同一であると判断したものは欠番としたため、通し番号の数がそのまま最終的な遺構の個数を示すわけではない。また、SI1006のみ、1000番台の遺構番号を付している。当該遺構は、長野県埋蔵文化財センター

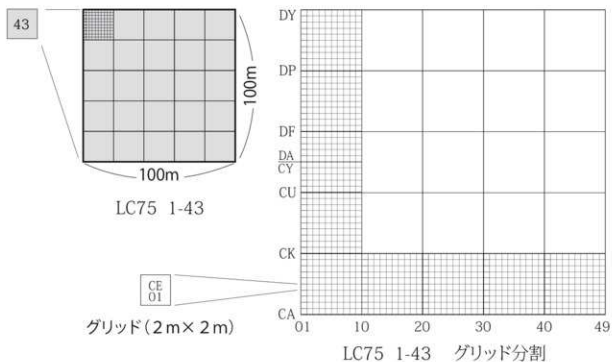
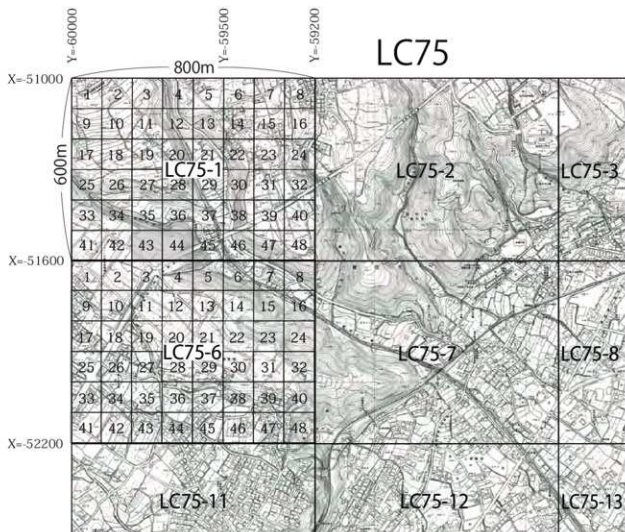


図3 調査区區画概略図

による令和3年度調査区と市教委が担当する本調査区との境界にまたがる遺構であり、同センターが先に検出した。市教委の遺構番号と重複することによる遺構の混同を避けるため、当初から1000番台の遺構番号を付しており、「SI1006」とされた。この遺構に関しては、遺構番号をそのまま用いる。遺構種別『発掘調査のてびき』（文化庁記念物課2010）に準拠し、すべての遺構の通し番号の先頭には種類を表すアルファベット2文字の遺構記号を冠した。基本的には検出時に記録した際の認識のまま報告しているが、例えば集石としていた遺構を土坑と改めたなど、整理事業時に変更した遺構もあり、調査時の記録と異なる場合がある。

本書で用いた遺構記号とその区分における基準は以下のとおりである。

SI：堅穴建物・堅穴状遺構 直径3mを目安とし、それ以上の規模の円形、方形もしくは不整形の掘り込み。柱穴等の建物内施設をともなうものを堅穴建物とし、それ以外を堅穴状遺構とした。

SK：土坑 単独の掘り込み全般。落し穴や袋状土坑など用途が推測される遺構もSKを含む。

SS：集石 礫を人為的に集めた土坑。覆土中に礫が複数含まれる土坑であっても、自然に埋没する過程で段階的に混入したとみられるもの、及び礫が集中する土坑であっても、土器や石器等の遺物とともに一括して埋納されたと考えられる土坑はSKに区分した。

SD：溝 平面形が細く長い掘り込み。

SP：ピット 比較的小型であり、かつ垂直方向に深く掘られた遺構のうち、建物に不随しない単独のもの。また、浅い土坑のうち短径が概ね40cmに満たない小型の土坑はSPとした。

4 発掘作業及び整理事業の方法

発掘作業は重機による表土掘削を最初に行い、遺構検出後は作業員による人力の掘削へ移行した。遺構の掘削は可能な限り分層を行った。土層堆積状況は、半截や土層観察用畔を残して掘り下げを行う等によって観察・記録した。遺物については、可能な場合は層位ごとに取り上げ、必要に応じて出土状況図を作成した。調査中の写真記録は、主としてデジタルカメラ(Nikon D750)を使用した。遺構等の記録写真はAdobe社製ソフトウェア(CameraRaw)を用いてrawデータをtiff形式に現像した。現像においてはホワイトバランスを適正化し、さらにレンズ補正ほか各種調整を実施することで処理した。航空写真撮影については株式会社コパコンに委託し、ドローンを用いて撮影した。

遺物の洗浄・注記・接合・復元・拓本は当市教委の直営で実施した。遺物実測の大部分も市直営で行ったものの、石器実測の一部については作業効率化のため外部委託した。出土遺物のうち科学的な分析が必要と判断した炭化物については、専門的な知識・技能を有する業務であるため外部委託した。対象としたサンプルは土器付着物及び堅穴建物、ピット等から出土した炭化材等を選定した。

遺物への注記は手書きまたは自動注記機(リース品)を使用した。基本的に調査略号、出土遺構名、その他の情報、出土年月日の順に記載した。ただし、注記範囲が狭小なほど微細な遺物については調査略号と遺構名のみ限定した。注記位置は原則として遺物の内面または裏面とした。文字はアルファベット、ローマ数字、平仮名及び漢字を用いた。遺物の接合は市販の接着剤を使用し、欠損部分は必要に応じて石膏を補充して復元のうえ、アクリル絵の具で着色した。遺構・遺物等の図面類は手書きの実測図をもとに第二原図を作成し、スキャナでデジタル画像化を行ったうえでAdobe社製ソフトウェア(Illustrator)を用いてトレースした。遺物写真撮影は担当者が行い、遺構と同様の方式で現像した。執筆・編集作業は同社製編集ソフトウェア(InDesign)を使用した。完成原稿を印刷業者へ入稿し、本報告書の刊行に至った。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

当遺跡が所在する長野県飯田市は県南部の都市であり、標高3000メートル級の高峰が連なる木曾山脈と赤石山脈に挟まれた伊那盆地の南側に位置する。伊那盆地は一般的に「伊那谷」と呼び習わされ、盆地の中央には諏訪湖から発した天竜川が南流する。伊那盆地南部の地質環境は、領家帯といわれる中央構造線北側の変性帯に属する。大部分を占める花崗岩体は、その貫入の時期によって古期と新期に分かれる。花崗岩体の上には土石流などによって運搬された砂礫層が堆積し、さらにその上に火山灰による風成ローム層が乗ることが多いが、最低位の段丘面ではローム層がみられない。これらの地質環境を基軸に、山麓部から天竜川河床の間に比高差約10～20m程度の段丘崖が数段にわたって発達するのが景観上の大きな特色であり、多くは山体の隆起にともない生じた逆断層によって形成されたとされる。これら標高差のある平坦面は、断層を境に大きく「上段」（うわだん）と「下段」（しただん）に分かれる。各段丘は、而ごとに立地や成因などによって分類される。「下伊那の地質解説」（下伊那地質誌編集委員会1976）によると、当遺跡一帯は「低位段丘Ⅰ」に区分され、喬木村伊久間付近を標識とする「伊久間面」にあたる。この面は新規扇状地であり、1～2mの火山灰層の下に水成火山灰層をはさみ、さらにその下位で花崗岩礫層に至る。

第2節 歴史的環境

旧石器時代の代表的な遺跡は、山本地区の竹佐中原遺跡・石子原遺跡がある。縄文時代早期には、各地区で早期の集落が形成される。早期前半の代表的な遺跡は座光寺地区の美女遺跡で、早期前半の立野式段階の集落が良好な状態で確認された例として知られる。前期の集落は確認例が非常に少ないが、黒田大明神原B遺跡では前期の竪穴建物が確認されるなど、小規模ながら人々の営みの痕跡が認められる。中期初頭から中葉には川路地区の川路大明神原遺跡や竜丘地区の城陸遺跡で集落が営まれるが、全体として数は少ない。この時期には中部高地の井戸尻文化の影響を受ける。中期後葉は当地域が最も繁栄した段階であり、集落数の増加と同時に下伊那唐草土器様式が成立する。しかし後・晩期は集落が激減し、遺跡の立地は河川沿いの低地部に移る。

弥生時代には、当地域に稲作が伝来し、生活様式に変化がもたらされる。前期から中期前半の様相はほとんど不明だが、中期中葉には低位段丘上に集落が発達し、湿地を生産域として農業生活が営まれる。これに応じて石器を主体とする道具類の組成が成立し、当地域の大きな特徴となる。後期になると集落が激増し、中位段丘から高所の山麓部にまで広がるものの、多くは短期で廃絶する。

飯田市域で古墳の本格的な築造が開始するのは中期中葉以降である。中期から後期にかけて飯田市域を中心に築造された前方後円墳・帆立貝形古墳を一体的にとらえ、「飯田古墳群」と呼称する。当古墳群を特徴づけるのが、馬の埋葬および馬具の出土例の多さである。ヤマト王権との強い関係のもとで馬の飼育や生産を管理する集団の存在が想定され、13基が国史跡に指定されている。

奈良時代に律令制が導入されると当地域は東山道信濃国伊那郡に編入され、伊那郡を統治する郡衙が設置された。正倉院や祭祀遺構が確認された座光寺地区の恒川遺跡群は伊那郡衙の跡地であることが確実視され、恒川官衙遺跡の名称で国史跡に指定されている。

平安時代末期以降は律令制の崩壊にともない、荘園の開発が進んだ。室町時代から安土桃山時代



図4 黒田大明神原 B 遺跡及び周辺の遺跡

にかけては、段丘端部や独立丘陵を利用した中世城郭が残るが、正確な履歴はほとんど判明していない。戦国期は竜東の知久氏が勢力を伸ばしたが、天文23年(1554)、甲斐の武田氏の侵攻を受けて滅亡した。天正10年(1582)には織田氏が侵攻し、武田氏の勢力は一掃された。その後は徳川氏の勢力下となり、江戸時代には幕藩体制のもとで飯田藩や旗本の支配を受け、明治に至った。

第3節 遺跡の範囲と地形

大明神原は上郷地区黒田の土曾川右岸の広大な扇状地一帯を指す地名で、大正年間の鳥居龍藏の調査報告として刊行された『下伊那の先史及原始時代』(1913年)にも掲載されているように、古くから遺物が採集される大遺跡として知られた。この大明神原として括られる広大な範囲の地形は、決して「原」と名という名の如く単純ではなく、実際は山麓部から尾根状に伸びる微高地と、浅い谷状の低地が織りなす起伏に富んだ地形である。かつて養蚕の最盛期には大桑園地帯であったが、その後は果樹園が主体となり、現在もその多くが農地として利用されている。

当遺跡が「大明神原遺跡」から現在の範囲となったのは平成27年度の包蔵地分布図の改定の際で、地形や調査成果を踏まえて「黒田大明神原A遺跡」と「黒田大明神原B遺跡」に分割された。範囲は南北約400m、東西幅約250m、総面積は8.2ヘクタールとなっている。当遺跡の最も高い地点は山麓に近い西端部付近であり、標高は最高地点で約558mを測る。遺跡の範囲は土曾川が開削した浸食崖直上の細長い微高地を一括しており、南側ではA遺跡と接しているが、東半部は土曾川に注ぐ小河川が形成した谷地形が両者を分断する。この谷を形成した水源はJ A南信州上郷選果場付近にあり、現在も少量ながら湧出している。



図5 調査区位置詳細

第4節 調査履歴と調査地点

1 既往の調査

「大明神原遺跡」における本格的な発掘調査は、昭和59（1984）年度の旧上郷町が町道拡幅に際して実施した調査に始まる。ここでは狭小な範囲にもかかわらず、縄文中期初頭～後半、弥生後期の竪穴建物がそれぞれ確認されている。翌年に行われた第二次調査も狭小な農業用道路の拡幅であったが、西側の山麓に近い箇所に調査が及び、中期初頭とされる住居址1軒、中世の堀が検出された。さらに町道改良を進める上郷町は、飯田市と合併する直前の昭和61（1986）年度から3か年にわたり遺跡東部のほぼ全域に調査の手を入れることとなり、さらに多くの成果が得られた。この際に確認された遺構・遺物は縄文中期後葉が主体ではあったが、新たに弥生時代の方形周溝墓も発見された。平成7年度から8年度にかけて伊那南部広域農道が計画されたことにより、黒田大明神原遺跡を南北に縦断するように調査が実施された。平成7年度調査は当遺跡の段丘突端部付近で行われ、縄文時代の竪穴建物15軒ほか土坑、早期から前期の集石が多数確認された。この際、早期前半の遺構や前期末の竪穴建物群が初めて確認された。続く平成8年度調査は現在の黒田大明神原A遺跡にあたる地点で、東西に延びる尾根状の台地を横断する形で調査が及んだ。30軒もの竪穴建物のうち15軒が縄文中期末～後期初頭に属しており、大明神原における集落の動態が推測されるに至った。平成10年度には広域農道沿いの森林に通信鉄塔及び農道からの進入路の建設計画が持ち上がり、緊急調査がされた。ここで新たに弥生時代の竪穴建物1軒と縄文前期～中期の土坑群が確認された。

以上の調査成果をまとめると、大明神原一帯で最も確認例が多い時期は縄文中期後葉であり、当該期の集落域は黒田大明神原A遺跡の広域農道東側付近とみられている。次いで中期中葉末～後期

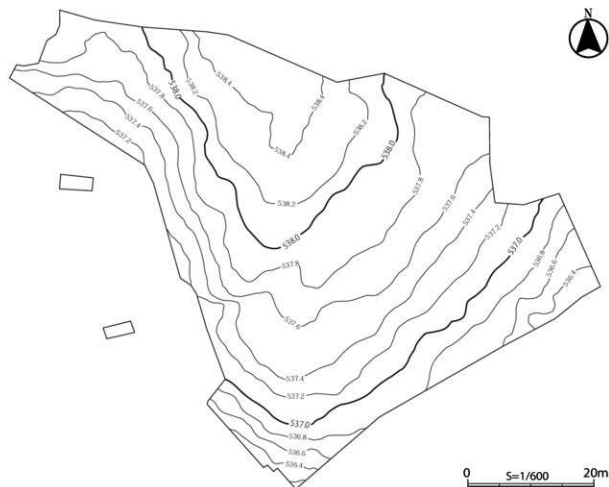


図6 調査区地形測量図

初頭も多く、平成8年度の広域農道調査地点に集中する。前期末葉～中期初頭も住居址は少数だが一定の遺構・遺物が分布しており、中心となる領域をやや変えながらも各段階の集落が営まれていた可能性が高い。一方、弥生後期の集落や方形周溝墓の存在も少数ながら判明している。

2 今次調査対象地

今次発掘調査の対象となった区域は、当遺跡の東端に近い地点に位置し、土曾川の右岸から舌状に突き出た台地上にある。この地点は地形図（図6）にも現れており、周辺地形から独立した小高い丘であることがわかる。調査地点の標高は最も高い地点で538.5mを測り、南・東に向かってそれぞれ緩やかに傾斜する。今次調査対象範囲は、平成7年度に調査された伊那南部広域農道の西側かつ平成10年度の鉄塔に際しての調査区とも接する。また、長野県埋蔵文化財センターが座光寺上郷道路の本体工事に先駆けて令和3年度に調査を実施した箇所と東端部で隣接する。

調査地は果樹園や畑として利用されていた箇所と森林であった箇所に分かれる。農道隣接地の上郷黒田2542番19付近は地目が山林であり、マツやサクラなどが植えられていた。一方、西側の2540番15、同番16、同番17は果樹園であった。そのため、土壌改良のための素掘り溝が縦横に走り、さらに果樹用の設備やごみ捨て穴などによる攪乱を受けた範囲が大きい。また、調査地を東西に分断する未舗装の道路が通り、農作業の作業路や段丘崖下から人が行き来するために使われていた。

第3章 調査の成果

第1節 基本層序(図7)

調査区の北側壁面(図9 A-A')で基本層序を確認したほか、試掘トレンチ1・2においても知見が得られた。

基本層序を確認した地点は調査区内で最も標高が高い地点である。I層からVI層までを把握した。I層は表土、II層はにぶい黄褐色でしまりがやや強いシルト・ローム質土層。III層は黄褐色のシルト・粘質土層、IV層は明黄褐色のしまりの弱いシルト・粘質土層である。なお、調査上の制約から深度が取れずIV層までの把握にとどまったが、調査後の工事立会により、IV層のさらに下位には礫層・砂層が分布することを確認している。遺構検出面は基本的にIII層上面である。なお、基本層序IV層より下の層序については調査時に深掘りができなかったため詳細に記録を行っていないが、調査後の工事立会にてさらに下層には明黄色砂質・粘質土が堆積することを確認した。これらは段丘礫層の上に厚く堆積する水成火山灰層とみられ、当地域における新規扇状地段丘面の一般的な堆積状況といえる。

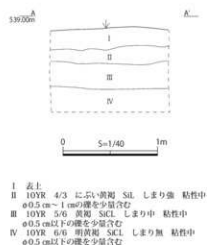
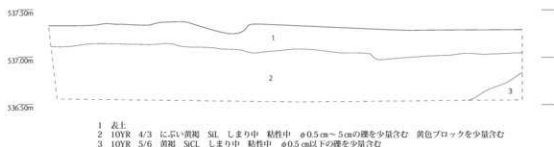
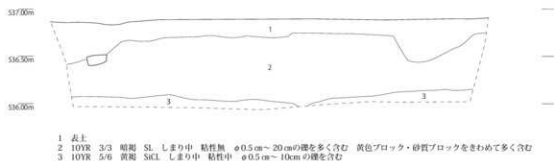


図7 基本層序



試掘トレンチ1(北壁)



試掘トレンチ2(北壁)

図8 試掘トレンチ1・2土層断面

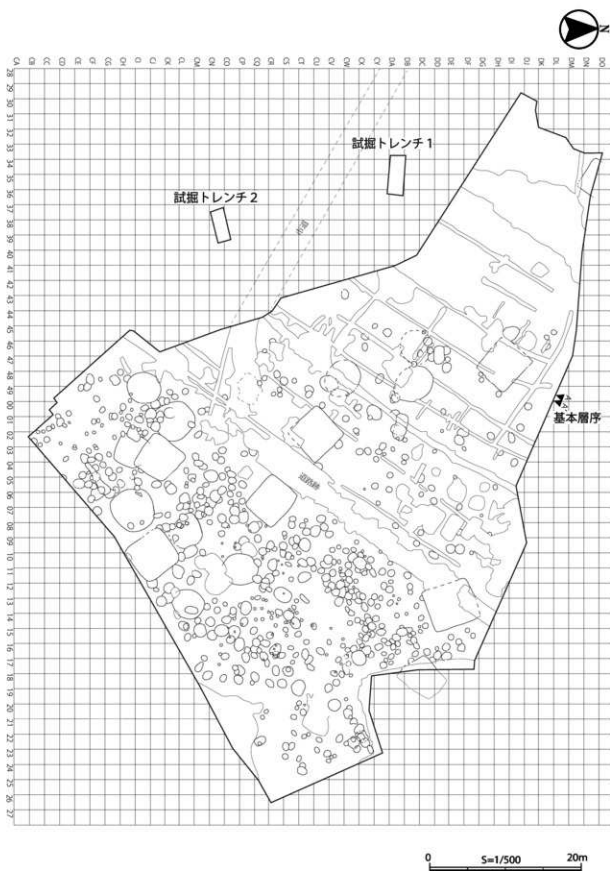


図9 調査区全体図

I層は耕作土または森林の表土層である。地表から遺構検出面までの深さは地点によってばらつきがあるが、遺構が分布する区域では概ね20cm～40cmである。表土を剥ぎ取ると集石などの上面がII層上面においても露出することも多々あり、当地域の遺跡としては、遺構検出面までの深さは極めて浅いといえる。しかしながら、II層上面での遺構プランの検出は困難であったため、場所によってはIII層上面付近まで遺構検出面を下げる必要があった。それでも遺構覆土と地山との判別は難しく、プランが不明瞭な遺構は断ち割り等によって把握する必要が各所で生じた。標高が高い調査区中央～北側の地点ほど表土が薄く、そこから西・南に向けて傾斜をともない湿地化していき、徐々に表土の厚さが増していく傾向にある。これは小高い丘としての地形により、頂部ほど土の流出が激しかったと考えられる。

調査範囲を確定するため、本調査区の南側の標高がやや低い箇所にそれぞれ設定した試掘トレンチ1、トレンチ2において、遺構の有無と土層堆積状況を確認した(図8)。トレンチを設定した箇所は調査区内の標高が最も高い箇所から1.5mほど低い地点である。トレンチ1では地表から約1mの深度まで掘削したところ、耕作土である表土の下は黄褐色ブロックや黒色の粘質のブロックが混じる土層が確認され、土壌改良の影響を広範に受けていることが確認された。果樹耕作がされていた試掘トレンチ2においても1と同様に土壌改良または深耕の影響が地下深くまで及ぶことが判明した。特にトレンチ1の地点は暗褐色土が多く混じり、湿地化の傾向が認められる。隣接地では令和3年度の長野県埋蔵文化財センターによる試掘調査で同様の結果が得られている。この地点の西側では選果場付近から水が湧出していることから、集落域外の生産域としての利用が考えられる。

第2節 遺構・遺物の概観(図9～17)

本調査で把握した遺構は次のとおりである。

縄文時代の竪穴建物	9軒
縄文時代の竪穴状遺構	1基
弥生時代の竪穴建物	8軒
土坑	471基
集石	37基
落し穴	4基
立石	1基
溝	1条
ピット	124基

縄文時代の遺構は調査区全体に分布するが、標高の高い丘陵の頂部付近にまとまる傾向が認められる。竪穴建物は早期前葉3軒、前期後葉～末葉1軒、中期中葉2軒、中期後葉3軒を数え、詳細な時期が不明な竪穴状遺構が1基ある。

多数確認された土坑のうち遺物の出土状況等に基づき時期を特定できたものは少ないが、遺物の出土状況からしてその多くが縄文時代に属するとみられる。土坑には袋状土坑や落し穴等の機能が推定できる遺構も含まれるが、大半が用途・性格不明の単純な掘り込みである。土坑には土器や石器、礫・石材等を埋納した特殊な土坑があり、これらの特筆すべき出土状況を示すものは通常の土坑と

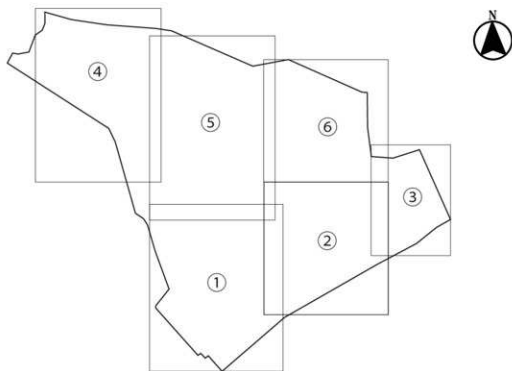


図10 遺構分布図区割り

異なる性格を有する。

縄文時代の土器は早期前葉、早期末、前期前葉、前期末葉、中期初頭～中葉、中期後葉、後期が確認された。土器の総量における割合としては、中期初頭～中葉と中期後葉が共に多い。中期後葉の土器は竪穴建物の覆土中からの出土が多くを占めるのに対し、中期初頭～中葉の土器は土坑に埋納された状態で出土したものが多く、特に頸部に平行沈線を施す土器の割合が高い。また、同時期のハケ岳山麓を中心とする厚手の土器群が混在する。これらに加え、東海地方の土器も含まれる。他に土製品として土製円盤や土製耳飾などがある。石器は打製石斧と横刃型石器が多くを占める。ほかに石鏃、石錐、石匙などの剥片石器や、石錘、敲打器等の礫石器に加え、磨石、凹石、石皿、砥石などがある。特殊な石器として、異形石器や特殊磨石、装身具として石製垂飾、ほかに土製品がある。

弥生時代の遺構は竪穴建物を主体とする。土曾川右岸の崖の崩落によってプランの一部が失われている竪穴建物もあることから、かつての集落域はさらに北側に広がっていたと推察される。各建物は2軒ないし3軒ずつ近接する傾向が看取される。時期は中期末1軒、後期6軒である。これらのうちS1001は平成10年度の調査において把握された「SB19」であり、今次調査では当該遺構の未調査の箇所を把握したため、両結果を併せて提示する。後期の竪穴建物のうちS1555とS1715の2軒は焼土や炭化材を多量にともなうことから、廃絶時に焼亡したとみられる。竪穴建物以外に弥生時代と断定しえた少数の土坑・ピットがある。炭化した穀物を土器片とともに埋納する特殊なピットも含まれ、イネやマメなどの炭化種実を多く出土した。これらは年代測定や樹種等同定のための自然科学的な分析を実施した。

弥生時代の遺物は大半が竪穴建物内から出土した。土器には甕、壺など、土製品としてミニチュア土器、土製勾玉等がある。石器の器種は有肩扇形状石器、横刃型石器、打製石斧、石錘、磨製石鏃及びその未成品、石包丁、紡錘車などがある。

なお、今次調査において旧石器時代及び古墳時代以降の遺構・遺物は確認されていない。

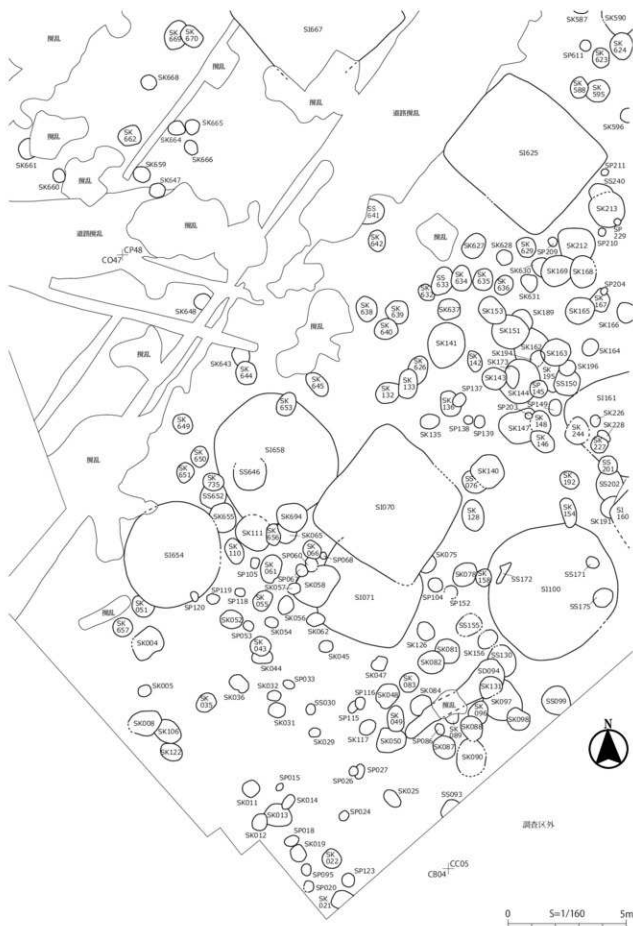


図11 遺構分布図①

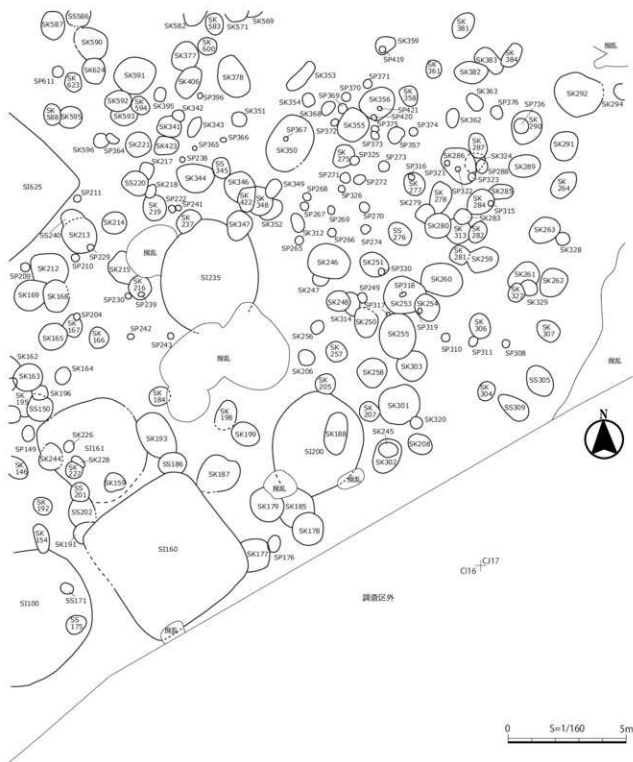


図12 遺構分布図②

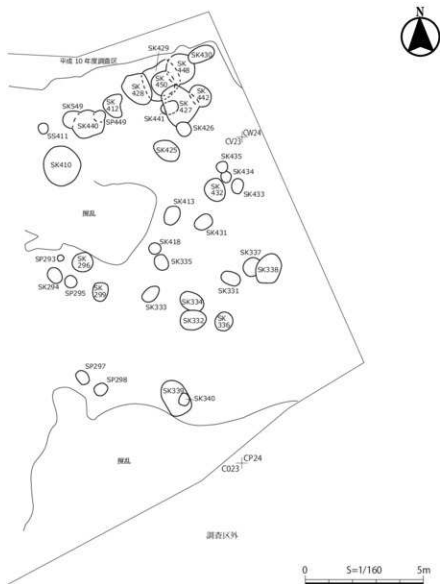


図13 遺構分布図③



図14 遺構分布図④

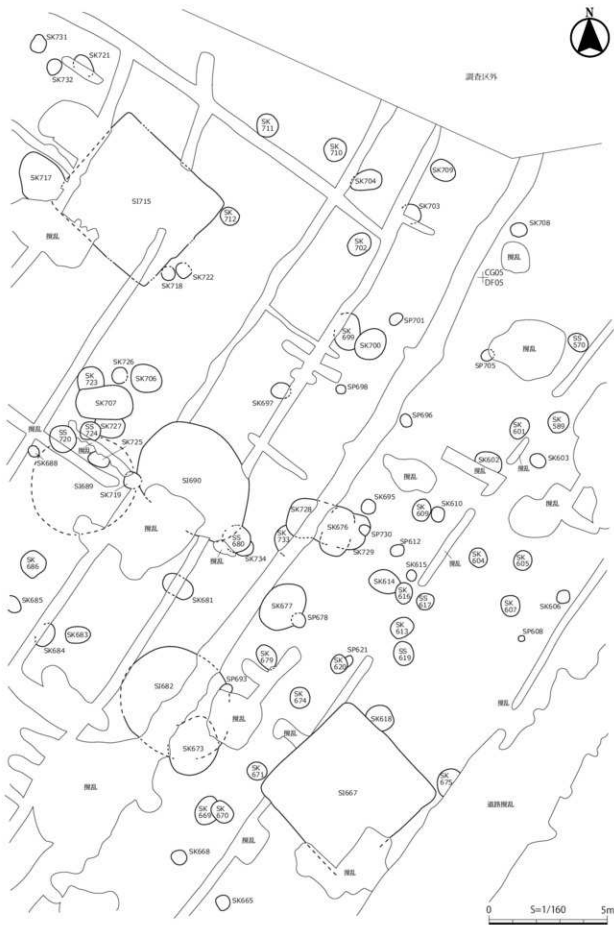


図 15 遺構分布図⑤

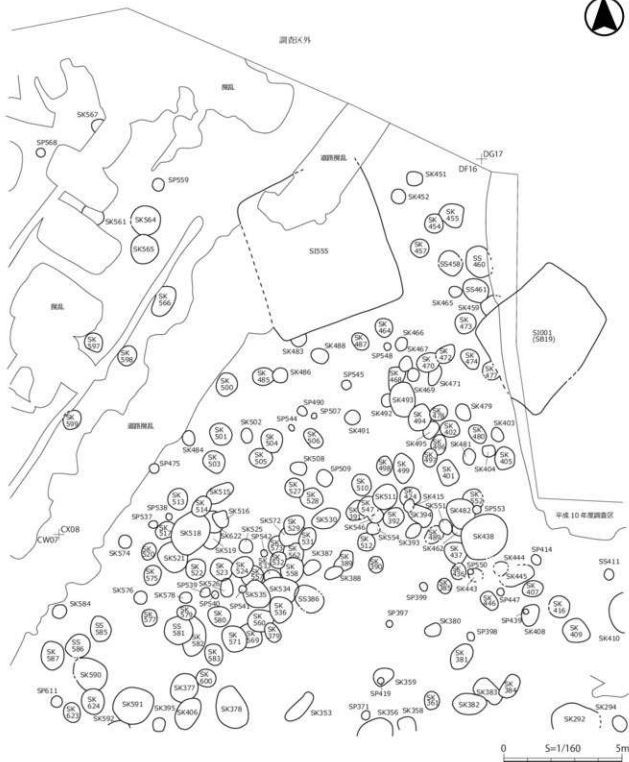


図 16 遺構分布図

第3節 遺構

1 縄文時代の竪穴建物・竪穴状遺構

(1) 早期

SI161 (図17、写真図版4)

概観：平面はやや四隅が張り出す台形に近い不整形を呈する。主軸方向はN26°Wを示す。主軸長4.2m、副軸の残存長4.0mを測る。SK226ほか複数の土坑や集石等と重複する。検出面から床面までの深さは36cmを測る。覆土は3層に分かれ、2・3層にわずかに炭を含む。レンズ状の堆積を示しており、自然に埋没している。

床・壁：床面は平坦に整えられる。全体的に締まりはなく、貼床は認められない。床から壁に向けて比較的緩やかに立ち上がる。

炉：常設の炉はないが、中央から奥壁寄りの床面に、48cm×30cmの円形に被熱した箇所があり、火の使用が認められる。被熱は弱く、灰や炭等の堆積もないことから長期的に使用したとは考えられない。

柱穴：P1～5は建物中央からわずかに東～南寄りに分布する柱穴とみられる。中央から西側寄り

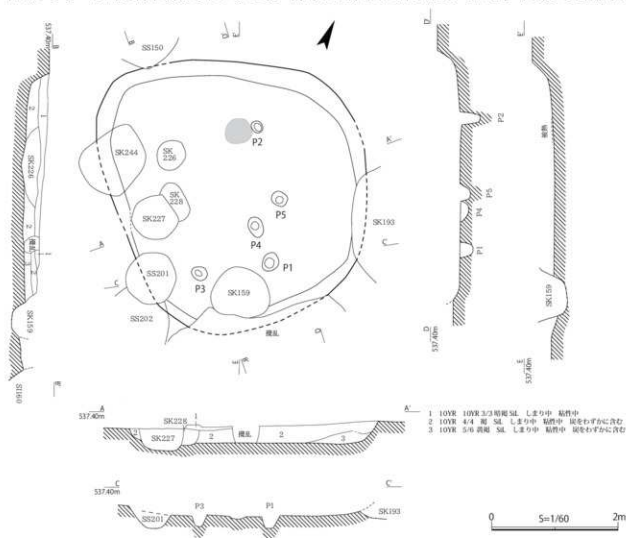


図17 SI161

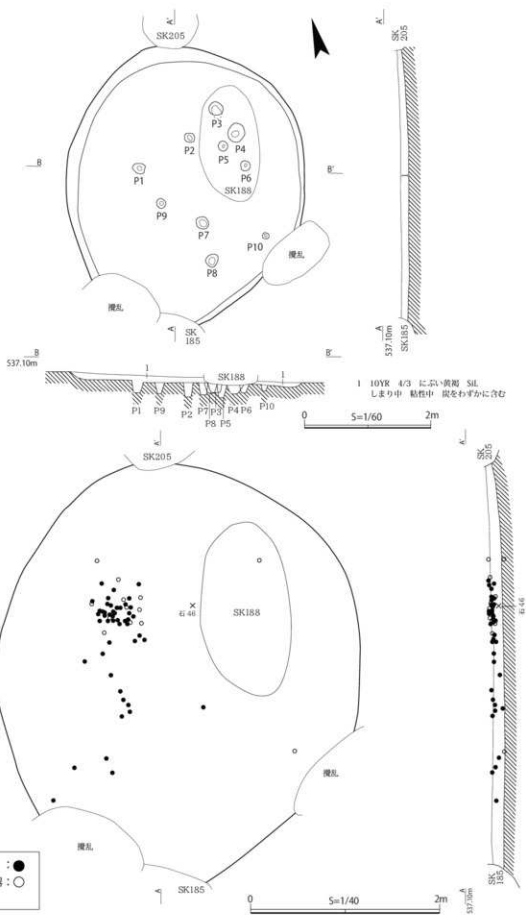


図 18 S1200

では柱穴が確認されず、柱穴の分布に偏りがある。いずれも床面から20～30cm前後の浅いものである。

建物内施設：柱穴以外に建物内ピット等は把握されなかった。なお、SK159は単独の土坑として把握したが、早期の土器片が出土しており、かつ本建物の南側の入口が想定される箇所にあるため、本建物に伴う入口施設の可能性も捨てきれない。

遺物：複数の土坑・集石等と重複しており、本遺構出土として取り上げた土器の年代には早期から中期初頭までの幅がある。ただし、他の遺構と重複がない中央から奥壁～東寄り付近では押型文土器片が出土した(土1～8)。立野式が主体である。石器は磨製石斧(石73)、石錘(石124)、磨石(石149)、横刃型石器(石85～87)を図示した。黒曜岩剥片の総量は67gを測る。

時期：出土土器から早期前葉とみる

SI200 (図18、写真図版4)

概観：平面は長軸方向にわずかに長い楕円形を呈する。主軸方向はN15°Eを示す。主軸残存長4.3m、副軸長3.8mを測る。他遺構の重複は少なく、ほぼ全体が把握された。平面検出当初はプランが明確でなく、検出面の精査時に押型文土器が集中して出土したことにより本遺構を認めた。検出面から床面まで15cmとかなり浅く、覆土は1層のみ把握した。覆土の質や遺物の出土状況から自然に埋没したと推定される。

床・壁：床面はほぼ平坦に整えられる。締まりはなく、貼床もされていない。

柱穴：P1～10は柱穴とみられる。いずれも小型で、床面から10～30cmほどの深さとなる。柱穴は建物中央付近にはなく、中央から1～2mほど外側の床面に分布することから、中央に向けて柱材の頂点を傾けた構造が想定される。柱穴以外に建物内ピットや炉等の施設は把握されなかった。

遺物：立野式の押型文土器(土9～22)が主体を占める。破片は建物中央のやや北西寄り付近にまとまりがあり、床面の直上～20cmほど上位の範囲に分布する。口縁部から胴部半ばにかけての個体(土9～15)は比較的まとまって出土した。これについては内面に付着した炭化物を試料とし、放射性炭素年代測定を実施した結果、暦年較正後で9680～9530 calBPであった。石器はごく少量で、打製石斧(石45・46)を図示したが、押型文土器と共に伴っておらず、重複する土坑もあることから混入の可能性がある。

時期：出土土器から早期前葉とみる

SI658 (図19・20、写真図版5)

概観：平面は不整形を呈する。主軸方向はN10°Eを示す。主軸長5.6m、副軸長5.4mを測る。SS646他遺構に切られるが、ほぼ全体のプランが把握された。検出面から床面まで20cmとやや浅い。覆土は1層のみ把握した。覆土の質や遺物の出土状況からして自然に埋没したとみられる。

床・壁：床はほぼ平坦に整えられ、壁に向かって緩やかに立ち上がる。床面に締まりはなく、貼床も認められない。

柱穴：P1～6は、建物中央から直径約2mの範囲に円形に配置された柱穴で、主柱穴としての用途が考えられる。P7・8は主柱以外の補助的な柱穴か。

炉：P9・P15はそれぞれ底部から側面にかけて被熱が認められる土坑である。これらは炉として使用された可能性があるが、双方が同時に使用されたか否かは不明である。

建物内施設：P10は南側の壁際に位置しており、入口施設等の用途も考えられる。被熱したP9に

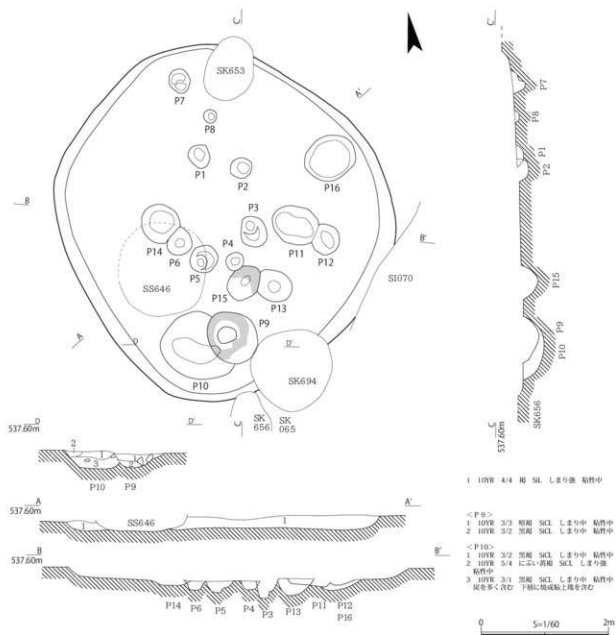


図 19 S1658

切られる。P 11 ~ 14, 16 は比較的浅い掘り込みで、機能は不明である。

遺物：立野式の押型文土器（土 26 ~ 44）が多く出土しているが、すべて小破片で 1 個体に復元しうるものはない。薄手の押型文土器（石 45 ~ 47）も含まれる。その他の土器片は他時期の所産で混入したものである。石器は建物全体から比較的多く出土しており、石鏃（石 4 ~ 9）、搔器（石 25）、横刃型石器（石 88 ~ 93）、磨石（石 150 ~ 152）、石錘（石 125）がある。このほか特筆される遺物として焼成粘土塊が P 15 から 40g、P 5 から 8g 出土している。

時期：出土土器から早期前葉とみる

S1100 (図 21、写真図版 5)

平面長楕円形を呈する大型の掘り込みである。長軸長 5.8 m、短軸長 5.5 m を測る。主軸を長軸の方向にとる場合、N 55° W を示す。検出面から床までの深さは 35cm と浅い。底部は概ね平

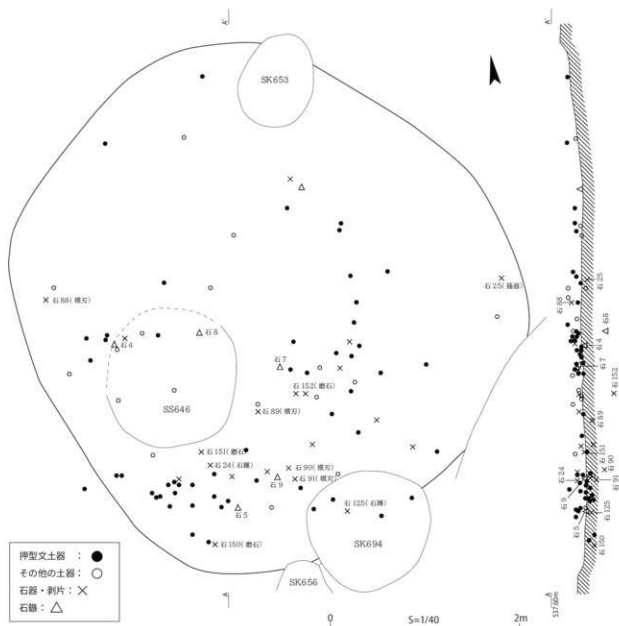


図20 SI658 出土状況

坦となり、縁辺部に向けて緩やかに立ち上がる。底面に締まりはなく、貼床は認められない。以上の規模・外観はSI200やSI658のような他の早期の竪穴建物に類似するが、柱穴や炉などの屋内施設が一切確認されなかったため、竪穴状遺構とした。

遺物は覆土中より出土しており、明確に底部の直上で把握されたものはない。土器の年代幅は早期前葉から中期初頭まで、いずれの時期も明確に主体を占めない。よって構築された年代を断定することが困難だが、押型文土器（土48～52）及び当該期に並行する可能性のある石鏃（石10）が出土している。また、他の早期竪穴建物と平断面が類似すること、放射性炭素年代測定により前期末～中期初頭という年代が得られた集石SS175が本遺構を切ることから、本遺構の時期を早期とみる。出土遺物として、前述のほか打製石斧（石47）、磨製石斧（石74）、横刃型石器（石94）、石鏃（石126）、凹石（石142）を図示した。

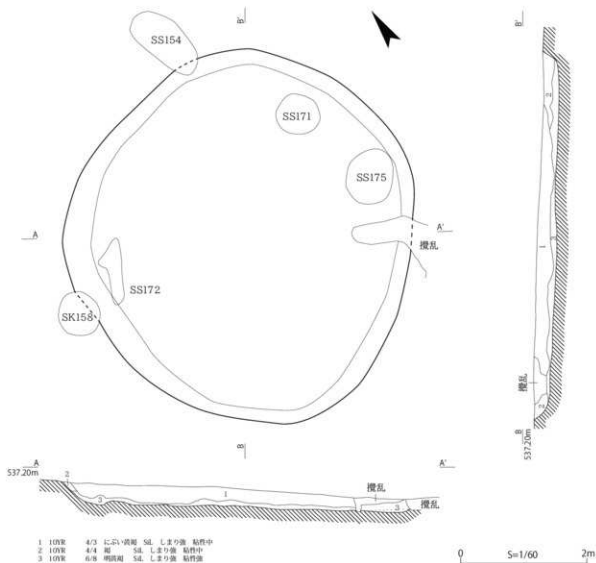


図 21 SI100

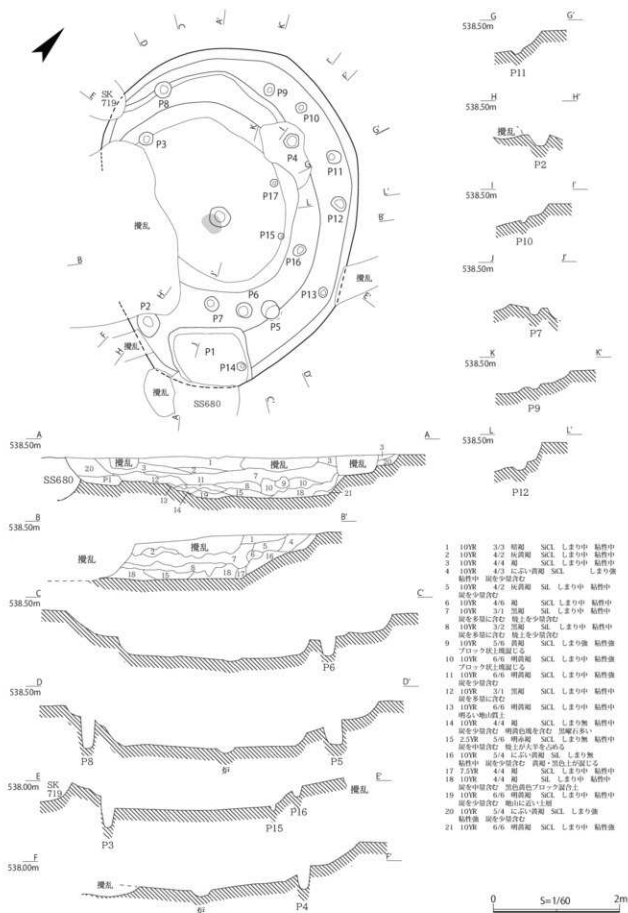
(2) 前期

SI690 (図 22、写真図版 6)

概観：平面長楕円形を呈する。主軸方向はN 42°Wを示す。主軸残存長5.3m、副軸残存長3.0mを測る。南西側を大きく攪乱に切られるがその他は比較的良好に残る。検出面から床面までの深さは最深で82cmと、他の竪穴建物に比べてかなり深く掘り込まれている。断面における土層の堆積は、基本的にはレンズ状の堆積を示しており、自然に埋没したとみられるが、多くの単位に分層され、各層から年代の異なる遺物が出土している。このことから、遺物が投棄されながら徐々に埋没していったと考えられる。

床・壁：床面は建物中央から直径3mほどの平坦部を形成する。床面はやや硬化が認められる。その外側で壁が高さ50cmほど立ち上がり、幅50～80cmのテラス状の平坦面を経て再び壁面が急に立ち上がる。

柱穴：建物内ピットは17と多い。床面、テラス面及び壁の傾斜面にかけて求心的な配置が認められる。そのうちP3～6、P8は直径25cm前後、深さ30～50cmほどの掘り込みであり、主柱穴としての用途が考えられる。その他のピットはいずれも小型かつ浅いため、補助的な柱穴とみられる。



1	10YR	3/3	粘層	SCL	しまり中	粘液中
2	10YR	4/2	粘質粉	SCL	しまり中	粘液中
3	10YR	4/4	粉	SCL	しまり中	粘液中
4	10YR	4/3	にぶい黄粉	SCL	しまり少	粘液中
5	10YR	4/2	灰黄粉	SL	しまり中	粘液中
6	10YR	4/6	粉	SCL	しまり中	粘液中
7	10YR	3/1	泥層	SL	しまり中	粘液中
8	黄赤多量に含む				地上を少量含む	
9	10YR	5/6	黄粉	SCL	しまり少	粘液中
10	10YR	6/6	明黄粉	SCL	しまり中	粘液中
11	10YR	6/6	明黄粉	SCL	しまり中	粘液中
12	10YR	3/1	泥層	SCL	しまり中	粘液中
13	10YR	6/6	明黄粉	SCL	しまり中	粘液中
14	10YR	4/4	粉	SCL	しまり少	粘液中
15	2.5YR	5/6	明黄粉	SCL	しまり少	粘液中
16	10YR	5/4	にぶい黄粉	SL	しまり少	粘液中
17	7.5YR	4/4	粉	SCL	しまり中	粘液中
18	10YR	4/4	粉	SL	しまり中	粘液中
19	10YR	6/6	明黄粉	SCL	しまり中	粘液中
20	10YR	5/4	にぶい黄粉	SCL	しまり少	粘液中
21	10YR	6/6	明黄粉	SCL	しまり中	粘液中

図 22 SI690

炉：床面の中央付近に弱い被熱をともなう幅 38cm × 35cm、深さ 12cm の浅い掘り込みがある。炉と考えられるが、長期にわたる使用がされたとは考えにくい。

建物内施設：南東側の壁際にある P 1 は入口施設か。

遺物：覆土全体からの遺物出土量は多い。上層では頸部に縦方向の集合沈線を施す土器（土 184）や八ヶ岳山麓系の浅鉢（土 187・188）、東海系土器（土 191～195）等が出土した。これらは中期初頭～中葉の所産である。中層付近では前期末の土器（土 176～181）の割合が多くなる。対して床上付近の最下層（15・18・19 層）における出土土器は非常に少ないが、環状の突出する口縁部（土 175）が床面直上から出土している。土製品として土製円盤（土 323・324）がある。

石器は打製石斧（石 48～51）の数が多く、他に横刃型石器（石 96・97）、石錘（石 127・128）、石鏃（石 11～13）など多量に出土している。石器も土器と同様に、そのほとんどが中～上位の層中に含まれており、埋没過程で段階的に投棄された遺物である。

時期：床上出土の土器より前期末とみる

（3）中期

SI682（図 23、写真図版 7）

概観：平面楕円形を呈する。主軸方向は N 25° E を示す。主軸長 4.4 m、副軸長 4.6 m を測る。南北方向に耕作溝によって大きく分断されており、さらに東側の大半は別の掘乱や土坑に切られるため、西から北側を中心に残存する。検出面から床面までの深さは 25cm 程度を測るが、南側付近の遺構の残存状況が特に悪く、プランも不明瞭である。覆土の堆積はレンズ状で、自然に埋没している。

床・壁：床面にしまりはほとんどない。壁は北側を除き、ほとんど失われている。

柱穴：P 1～4 は壁際から 10～30cm ほど内側に配置された柱穴である。北東壁際の掘乱の付近にも 1 か所の柱穴が存在したと想定され、五角形状の規則的な主柱の配置であったとみられる。

炉：建物中央奥寄りに石囲炉が構築されている。炉石には 6 個の平坦な自然石を用い、幅 100cm × 93cm の範囲に円形に石を据える。炉石の材質は 1 点のみ緑色岩で、他はすべて花崗岩である。最も小ぶりの石は、台石を転用している。炉の深さは 13cm と浅い。底部から炉石の側面にかけて被熱する。

遺物：微細な土器片が少量出土したにとどまる。石器は打製石斧（石 56）、敲石（石 145）がある。

時期：当地域における石囲炉の形態の傾向から中期中葉と推定する。

SI689（図 24、写真図版 7）

概観：覆土のほとんどが失われており、平面的なプランの全容は不明である。主軸方向は確証がないが、N 15° W として図示した。主軸長、副軸長ともに不明ながら、炉及び本建物に伴うと判断した P 1～3 の位置を根拠に推定すると、少なくとも直径 4 m 以上の規模とみられる。

床・壁：床面に締まりはほとんどない。壁はすべて消失している。

柱穴：P 1、P 2 は主柱穴とみられる。P 3 はごく浅く、主柱穴ではないと思われる。

炉：石囲炉が構築されている。炉石には 7 個の自然石を用い、幅 100cm × 94cm の範囲に円形に石を据える。炉石の材質はすべて花崗岩である。炉の深さは 7 cm と非常に浅い。

遺物：微細な土器片が少量出土したにとどまる。石器は床上から出土した石錘（石 129・130）のほか横刃型石器（石 101）がある。

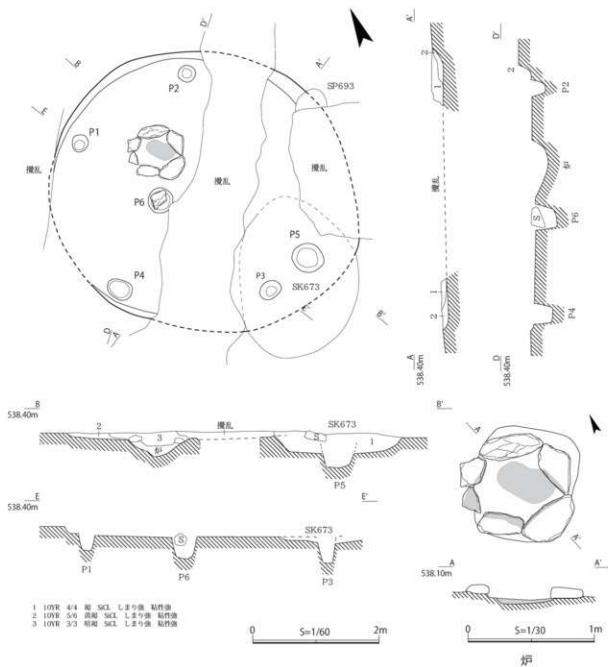


図 23 SI682

時期：当地域における石囲炉の形態の傾向から中期中葉と推定する。

SI071 (図 25、写真図版 6)

概観：平面は台形に近い隅丸方形を呈する。主軸方向はN 57°Wを示す。主軸長4.4m、副軸長4.3mを測る。北側の約1/4程を弥生時代の竪穴建物SI070に切られて失われている。検出面から床面までの深さは38cmを測る。

床・壁：貼床は認められない。壁は壁際からやや急に立ち上がる。

柱穴：P 1～5は主柱とみられ、壁際から20～40cmほど内側に位置する。P 2とP 3の間にも柱穴が存在すると想定してSI070の床下を精査したが、検出されなかった。

炉：中央付近に平面長方形の石囲炉を設置する。長さ95cm、幅92cm、深さ39cmを測る。建物廃

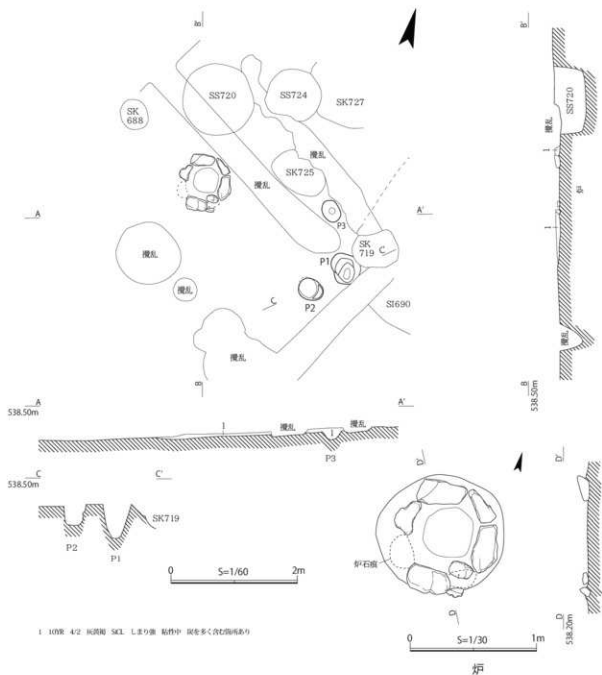


図 24 S1689

絶に際して炉石が取り外された状況は認められない。建物床面を掘り下げ、花崗岩の平石を四方にわずかに傾けて立て並べ、それらの間に小型の石を充填して構築する。炉底と炉石内面にかけて強く被熱赤変しており、長期の使用が考えられる。

遺物：南壁寄りの床上に花崗岩の丸石と太い棒状の自然石が置かれていた。これらを除いて明確に床面直上で把握された遺物はないが、覆土中からは比較的多くの土器片、石器が出土した。廃絶後に投棄されたものが多数を占めると考えられる。唐草文系土器（土 196～199）や在地系の「下伊那タイプ」（土 200～206）、東海地方の中富式系（土 210・211）、器台（土 214）などがある。全体として中期後葉に相当する。石器は打製石斧（石 52～54）、横刃型石器（石 95）を図示した。時期：出土土器から中期後葉とみる

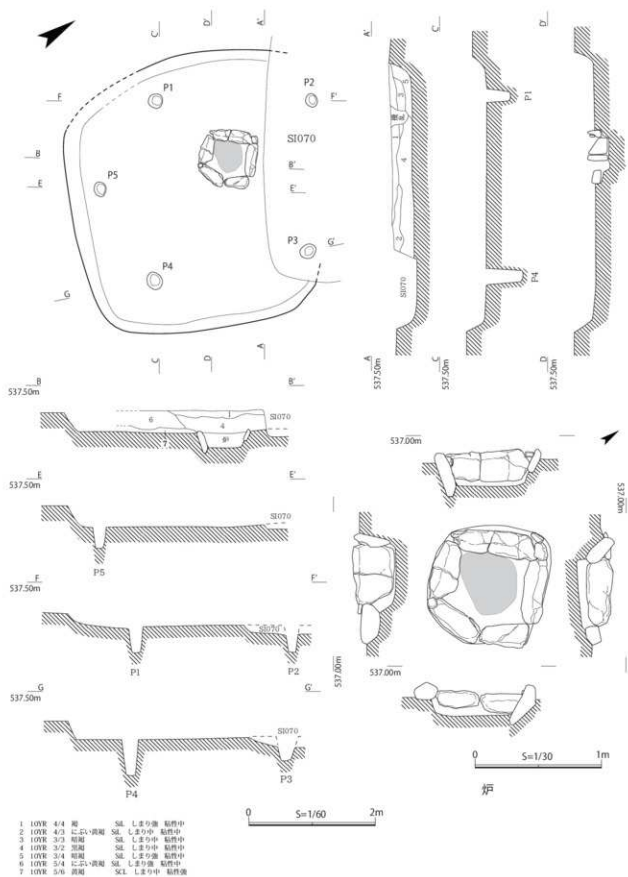


図 25 S1071

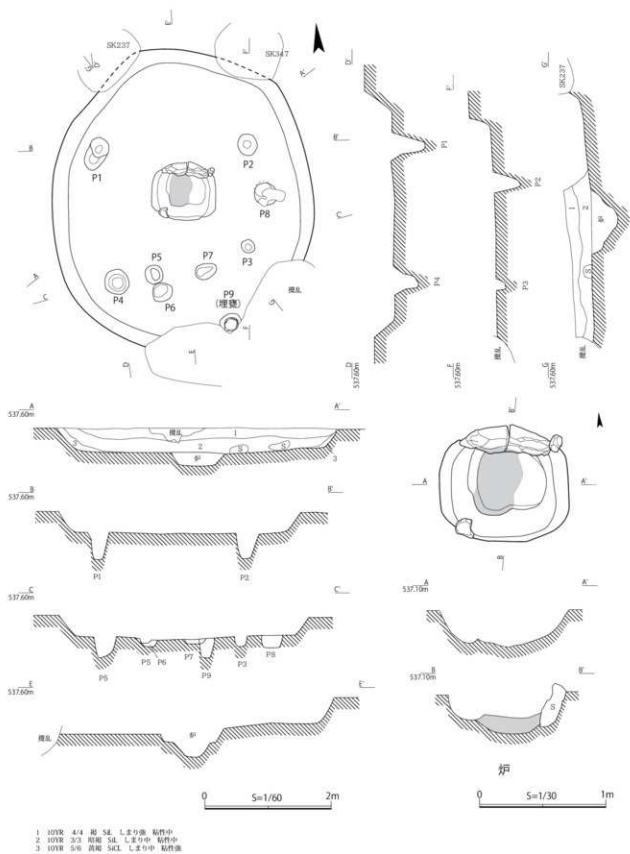


図 26 SI235

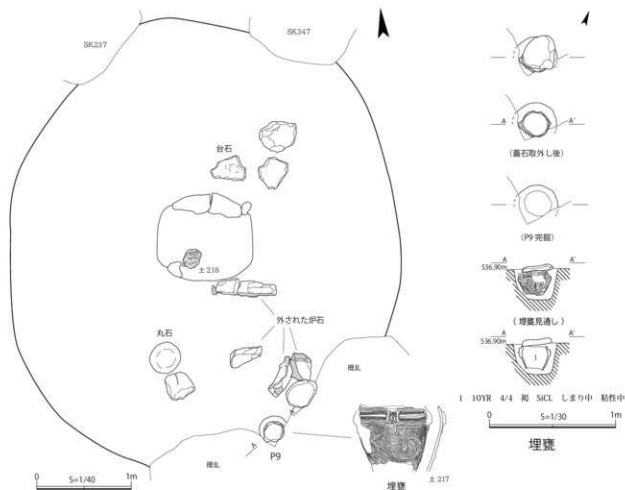


図 27 S1235 床面検出状況

S1235 (図 27、写真図版 7～8)

概観：平面は長軸方向に長い楕円形を呈する。主軸方向は $N 4^{\circ} E$ を示す。主軸残存長 4.4 m、副軸長 4.2 m を測る。縁辺部は土坑と重複する。南壁付近は攪乱に切られる。検出面から床面までの深さは 35cm を測る。覆土は 3 層に分かれ、レンズ状の堆積を示すことから自然に埋没している。床・壁：床面に締まりはなく、貼床は認められない。壁は壁際からやや急に立ち上がる。床上には後述するように炉石とみられる石のほか丸石や台石が炉の周囲に置かれていた。

柱穴：P 1～4 の 4 基は主柱穴とみられ、壁際から 30～50cm ほど内側に芯心が位置する。他は補助的な柱穴とみられる。

炉：中央付近に平面長方形の石囲炉を設置する。床面を長さ 102cm、幅 93cm、深さ 33cm 程度掘り下げ、平石を四方に立て並べて構築されていたとみられるが、炉石は北側の 1 辺を除いて取り外されている。取り外された炉の側壁とみられる被熱した長方形の花崗岩が建物中央南寄りの床上に散在する。炉底と炉石内面にかけて強く被熱赤変しており、底部に焼土が約 20cm 堆積することから比較的長期にわたり使用されたとみられる。

埋甕：南東壁際の P 9 に埋甕を埋設する。P 9 は攪乱によって約 3 分の 1 が削られていたが、土器は残存する。唐草文土器 (土 217) を据え、上部は花崗岩の平石で蓋をする。蓋石の上面は建物床面

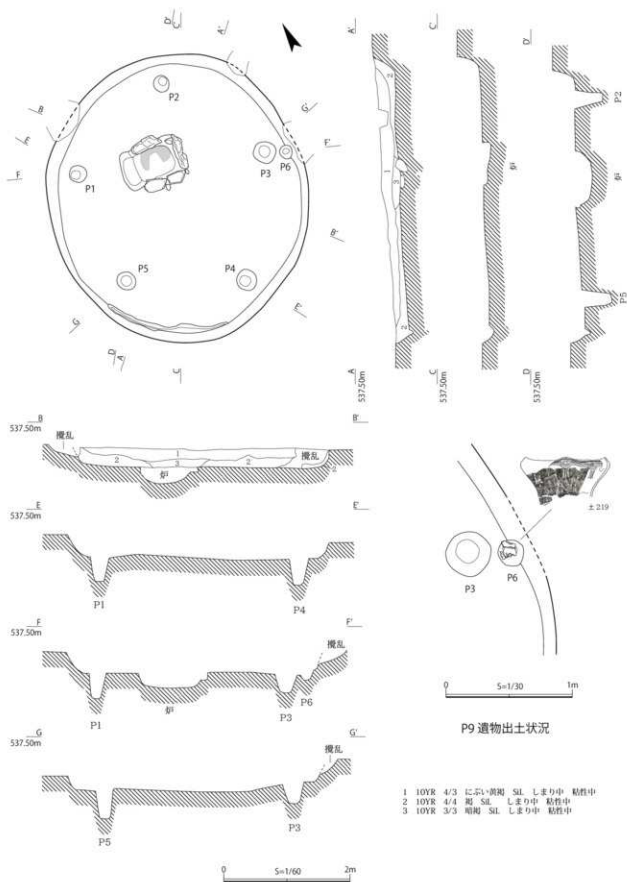


図 28 S1654

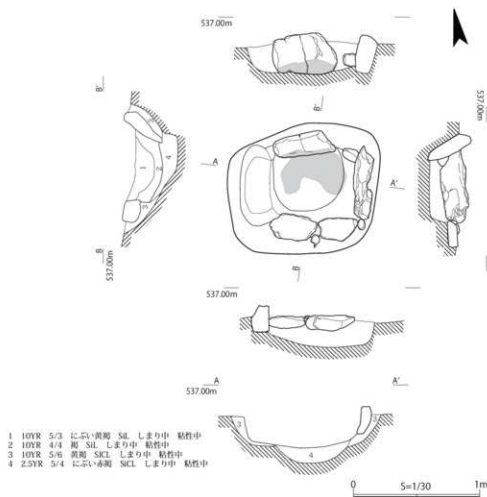


図29 SI654 炉

とほぼ同じ高さである。土器内部からは何ら出土せず、隙間から流入した土で満たされていた。

遺物：床上には取り外された炉石の他に花崗岩の丸石と台石がそれぞれ置かれる。埋甕のほか、炉の上から唐草文土器の胴部の破片(土218)が出土した。ほかに覆土中からも遺物が出土しているが、廃絶後の埋没過程で流入したものである。全体として中期後葉に位置づけられる。石器は打製石斧(石55)、横刃型石器(石98)を図示した。

時期：埋甕から中期後葉とみる

SI654 (図28・29、写真図版8～9)

概観：平面は長軸方向にわずかに長い楕円形を呈する。主軸方向はN 30° Eを示す。主軸長4.6m、副軸長4.2mを測る。周囲の遺構や攪乱の影響は少なく、プラン全体が良好に残る。検出面から床面までの深さは39cmを測る。土層は3層に分かれ、レンズ状の堆積から自然に埋没している。

床・壁：床面に締まりはなく、貼床は認められない。壁はやや緩やかに立ち上がる。

柱穴：P 1～5は五角形状に規則的な配置がされた主柱穴である。それぞれ壁際から30cmほど内側に芯心が位置する。

炉：中央付近に平面長方形の石囲炉を設置する。炉石は北西側の1辺のみ建物の廃絶時に取り外されたとみられ、それ以外の炉石は機能時のまま残存する。長さ117cm、幅104cm、深さ32cmにわたって掘り下げ、花崗岩の平石を四方に立て並べて構築する。炉底と炉石内面は被熱している。

遺物：北東の壁際に設けられたP6内から東海系の中富式に類する土器の上半(土219)が出土した。また、覆土中からも同系統の土器が比較的多く出土した(土220～225)。いずれも中期後葉が主体である。石器は横刃型石器(石99・100)がある。

時期：出土土器から中期後葉とみる

2 弥生時代の竪穴建物

SI160(図30、写真図版9)

概観：平面はほぼ正方形で、長軸方向にわずかに長い。主軸方向はN35°Wを示す。主軸長5.8m、副軸長5.4mを測る。縁辺部は他の土坑と重複する。検出面から床面までの深さは45cmを測る。覆土は6層に分かれ、レンズ状の堆積を示すことから自然に埋没している。

床・壁：床の締まりは弱く、貼床は不明瞭である。壁は壁際からやや急に立ち上がる。

柱穴：P1～4の4基は主柱穴である。

炉：中央奥壁寄りに円形の地床炉を1基設置する。床面を長さ61cm、幅42cm、深さ10cm程度掘り、断面船底状のピットを炉としている。炉内に壺の底部(土297)が設置される。

建物内施設：P6は建物南壁に接する箇所の床を半円形に浅く掘る。入口施設とみられる。

遺物：弥生土器片が主体を占めるが、大型の破片は少ない。器種は甕(土293・295・296)、壺(土294)がある。土製品はミニチュア土器(土331)がある。石器は量・器種ともに豊富で、有肩扇状形石器(石175～176)、横刃型石器(石102・103)、砥石(石164～167)、凹石(石143)、紡錘車(石197)、磨製石鏃未成品(石181・182)などがある。

時期：出土遺物から中期末とみる

SI070(図31、写真図版9)

概観：平面は方形を志向するが、入口側の辺がやや短く、台形を呈する。主軸方向はN53°Wを示す。主軸長5.3m、副軸長5.3mを測る。検出面から床面までの深さは奥壁側で70cm、入口側で49cmを測り、本調査における弥生竪穴建物中で最も深い。表土を剥ぐ前から建物中央部付近の地表面がわずかに凹部となっており、建物の存在が予想されるほどであった。覆土は5層に分かれ、レンズ状の堆積を示すことから自然に埋没している。

床・壁：床の周縁部を除く全面に貼床がされる。締まりは強く、明瞭である。壁は壁際から急に立ち上がる。

柱穴：P1～4の4基は主柱穴である。P6～8、及びH-H'断面付近の小型のピット群は補助的な柱穴とみられる。

炉：中央奥壁寄りに円形の地床炉を1基設置する。床面を長さ65cm、幅61cm、深さ10cm程度掘り、断面船底状の土坑を炉としている。中央に被熱箇所がある。

建物内施設：P5は建物南東壁に接する箇所の床を半円形に浅く掘り、さらに内側の床を土塁状に盛り上げる。周囲の小型ピットを含め、入口施設とみられる。

遺物：弥生土器片が主体となるが土器は少ない。器種は高坏(土299)・甕(土300～304)がある。ほかにミニチュア土器(土332・333)や円形の小型土製品(土337)が出土している。石器は有肩扇状形石器(石177)、磨製石鏃未成品(石183)などがある。

時期：出土土器から後期前半とみる

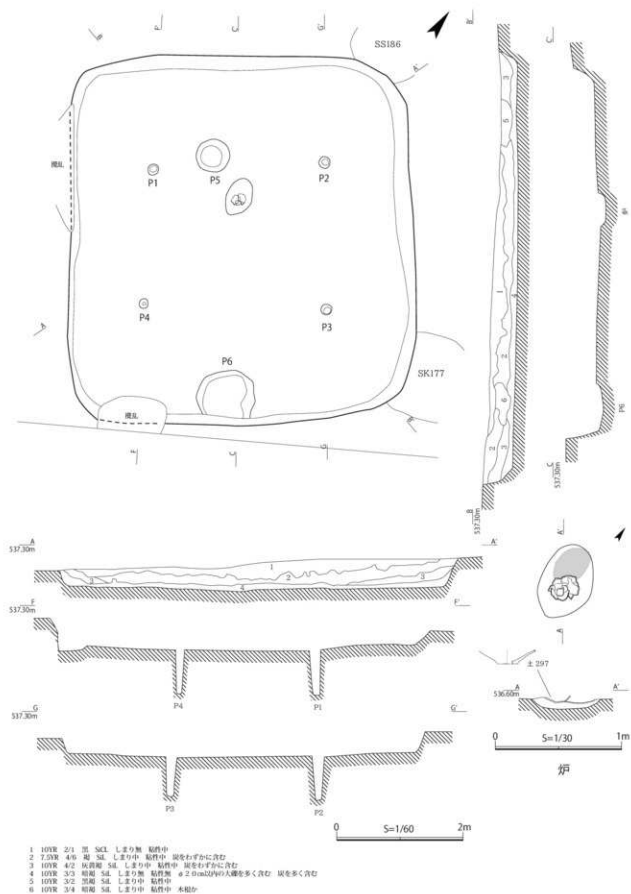


図 30 SI160

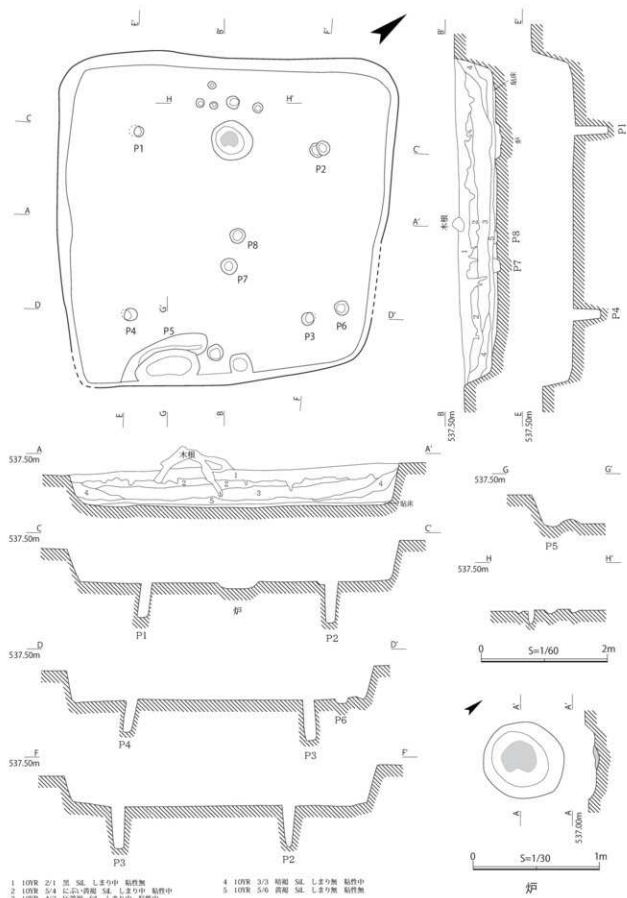


図 31 S1070

SI555 (図 32・33、写真図版 10)

概観：平面は主軸方向に長い長方形を呈する。主軸方向はN 20°Wを示す。主軸長6.5 m、副軸長5.8 mを測る。建物北隅から南西にかけて道路による攪乱の影響を受ける。検出面から床面までの深さは残存状況の良い箇所ので27cmを測る。覆土は4層に分かれ、レンズ状の堆積を示すことから自然に埋没している。床面が被熱し、炭化物が分布するため、本建物は廃絶時に焼亡したとみられる。床：床の周縁部を除く全面に貼床がされる。締まりは強く、明瞭である。被熱して赤変した箇所が随所に認められる。特に南東壁際の入り口付近に強い被熱痕がある。

柱穴：P 1～4の4基は主柱穴である。P 10～16の小型のビット群は補助的な柱穴とみられる。

炭化木材：建物床土と壁面に炭化物が分布する。これらは取り上げ時に確認した限りすべてが樹木であり、建物に使用されていた建材とみられる。このうち、東寄りの床に残る幅約40cm、長さ約100cm、厚さ2cm前後の板状の木材(試料No.R5-K-10)は、壁または屋根材の一部に用いられた可能性がある。また、北東側の壁付近から建物中央を向いて倒れた状態で検出された長さ約60cm、直径約5cmの細い棒状の炭化材(試料No.R5-K-9)は垂木等の可能性が、東隅付近の壁際で検出された木材(試料No.R5-K-11)については主柱以外の補助的な柱、あるいは壁を支えていた材の可能性が。さらに、主柱穴P 2・P 4にはそれぞれ炭化した柱材が残存する。P 2は直径・長さ共に5cm程の、P 4には直径8cm、長さ20cm程の木材が立った状態で床面から突き出していた。これらの炭化材は樹種同定を行った結果、すべてクリであることが判明した。

炉：中央奥壁寄りに円形の石囲炉を1基設置する。奥壁側の半分は道路の攪乱によって失われており、長さ40cm、幅75cm、深さ8cmほどが残る。炉石は大小3個が炉内に残されていたが、2個は攪乱の影響で動いている。

建物内施設：P 5は入口施設で、建物南東壁に接する箇所の床を半円形に浅く掘る。このほか、南東隅に直径5～10cmの礫の集積が認められたが、建物焼失後に投入されたものとみられる。

遺物：弥生土器片が主体を占める。器種は甕・壺があるが詳細な特徴を把握しうるのは少ない。甕(土305)とミニチュア土器(土334)を図示した。石器は磨製石鏃(石194～195)及びその未成品(土184)、磨石(石153)、打製石斧(石57)、磨製石斧(石75)、横刃型石器(石104)がある。

時期：出土土器は後期に相当する。P 4の主柱に対して実施した放射性炭素年代測定により、暦年較正後で2000～1885calBPの値が出ている。以上により、後期後葉とみる。

SI625 (図 34、写真図版 11)

概観：平面は主軸方向に長い長方形を呈する。主軸方向はN 46°Wを示す。主軸長5.8 m、副軸長4.9 mを測る。検出面から床面までの深さは30cmを測る。覆土は3層に分かれ、レンズ状の堆積を示すことから自然に埋没している。

床・壁：床の周縁部を除く全面に貼床がされる。締まりはやや強い。壁は壁際からやや急に立ち上がる。奥壁から東壁の壁際に浅い溝がめぐる。

柱穴：P 1～4の4基は主柱穴である。

炉：中央奥壁寄りに円形の炉を1基設置する。床面を長さ96cm、幅88cm、深さ10cm程度掘り下げ、さらにその中央を長さ42cm、幅30cm、深さ22cm掘りくぼめ、内部に口縁部と底部を打ち欠いた土器を埋設している。

建物内施設：P 5は南壁に接する箇所を逆丁字状に掘り下げたあり、入口施設である。P 6は南隅の床に掘られた浅いビットである。

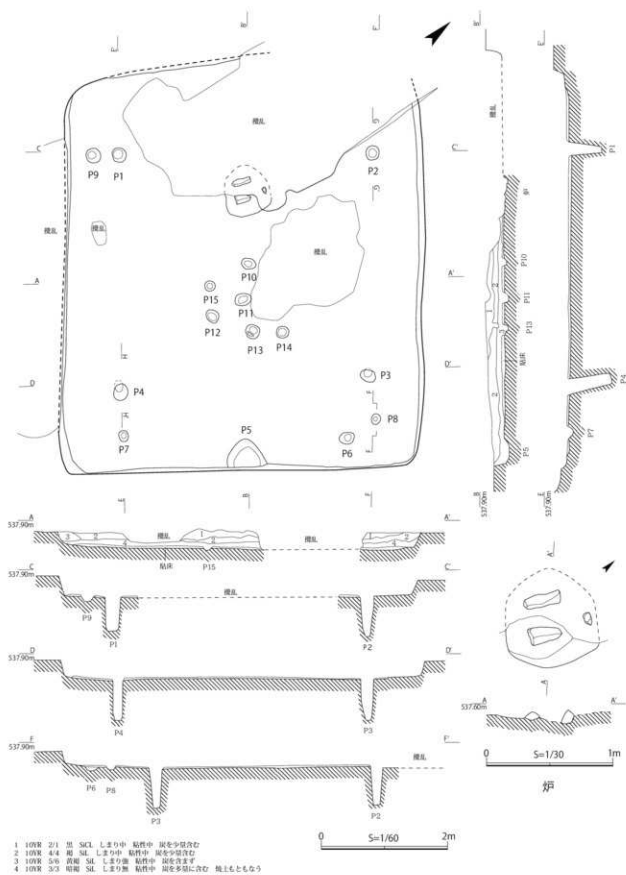


図 32 S1555

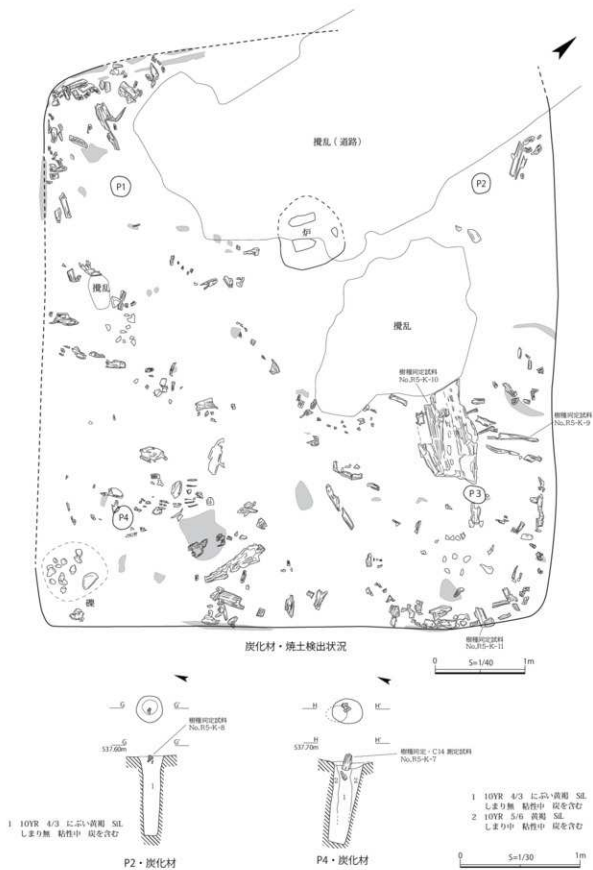


図 33 SI555 出土状況

遺物：出土した遺物の量はきわめて少ない。炉内に埋設されていた甕の胴部（土308）、柱穴P2の真上に置かれていた広口壺（土306）、壺の口縁部（土307）がある。石器は有肩扇状形石器（石178）、横刃型石器（石105・106）がある。

時期：主柱P4の底部で検出した炭化物（試料No.R4-3）を放射性炭素年代測定したところ、暦年較正後で1972～1826calBPの値が得られた。以上の結果と土器から後期後葉とみる。

SI667（図35、写真図版11）

概観：平面は方形を呈する。主軸方向はN44°Wを示す。主軸長5.5m、副軸長5.5mを測る。建物中央及び南隅に攪乱を受け、残存状況はやや悪い。検出面から床面までの深さは30cmを測る。覆土は4層に分かれ、レンズ状の堆積を示すことから自然に埋没している。

床・壁：床の周縁部を除く全面に貼床がされる。締まりはやや強い。壁は壁際からやや急に立ち上がる。

柱穴：P1～4の4基は主柱穴である。P6～9は補助的な柱穴とみられる。

炉：中央奥壁寄りに円形の石囲炉を1基設置する。床面を長さ60cm、幅54cm、深さ26cm程度掘り下げて炉としている。炉石は2個のみ残る。

建物内施設：P5は南壁に接する箇所に掘られたビットであり、入口施設もしくはその一部であろう。遺物：土器は少ない。炉の付近の床上に置かれていた壺の口縁部（土309）、ミニチュア土器（土335）がある。柱穴P3から砥石（石170）が出土した。ほかに砥石2点（石168・169）があり、1軒における砥石の出土数としては多い。これら以外に横刃型石器（石107・108）がある。

時期：出土土器から後期とみる

SI715（図36、写真図12）

概観：平面は主軸方向に長い長方形を呈する。主軸方向はN20°Wを示す。主軸長5.8m、副軸長5.1mを測る。果樹耕作等の影響がかなり大きい地点であり、縦横に溝が走り、深耕されたことで床面まで攪乱されている。検出面から床面までの深さは残存状況の良い箇所では16cmである。覆土の堆積状況の詳細は不明だが、自然に埋没したと推測される。本建物は床面の広い範囲で被熱し、炭化物が多量に分布することから、廃絶時に焼亡したとみられる。

床：床の周縁部を除く全面に貼床がされる。締まりは強く、明瞭である。被熱して赤変した箇所が随所に認められる。

柱穴：P1～4の4基は主柱穴である。P7～8の小型のビットは補助的な柱穴とみられる。

炭化木材：建物床上と壁面に炭化物が分布するが、大部分が攪乱によって乱されている。これらは取り上げ時に確認した限りすべてが樹木であり、建物に使用されていた建材とみられる。

炉：奥壁寄りの建物中央に被熱が周囲の床面と比べてやや強い箇所が認められた。大部分が攪乱によって壊されており確証はないが、炉跡の可能性はある。

建物内施設：南東側の壁際に設けられたP5・6は入口施設とみられ、この箇所の壁がわずかに外側に張り出している。

遺物：弥生土器片が主体を占める。甕（土310～313）を図示した。特殊な遺物として土製勾玉（土338）が挙げられる。石器は磨製石鏃（石193）及びその未成品（石185～190）が多く出土したことが特筆され、ほかに石包丁（石173）、打製石斧を転用した石錘（石131）、砥石（石171）がある。

時期：出土土器から後期とみる

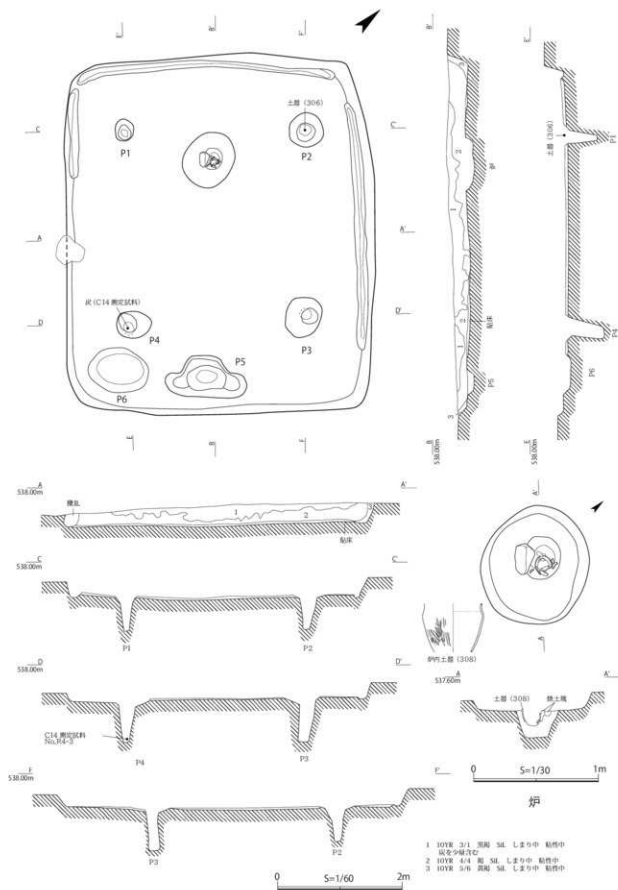


図 34 SI625

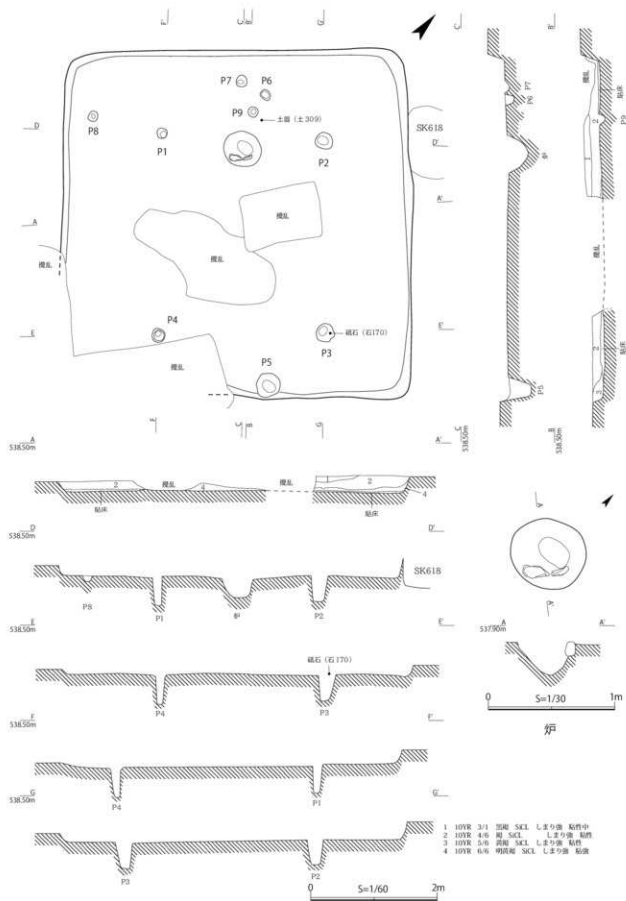


図 35 S1667

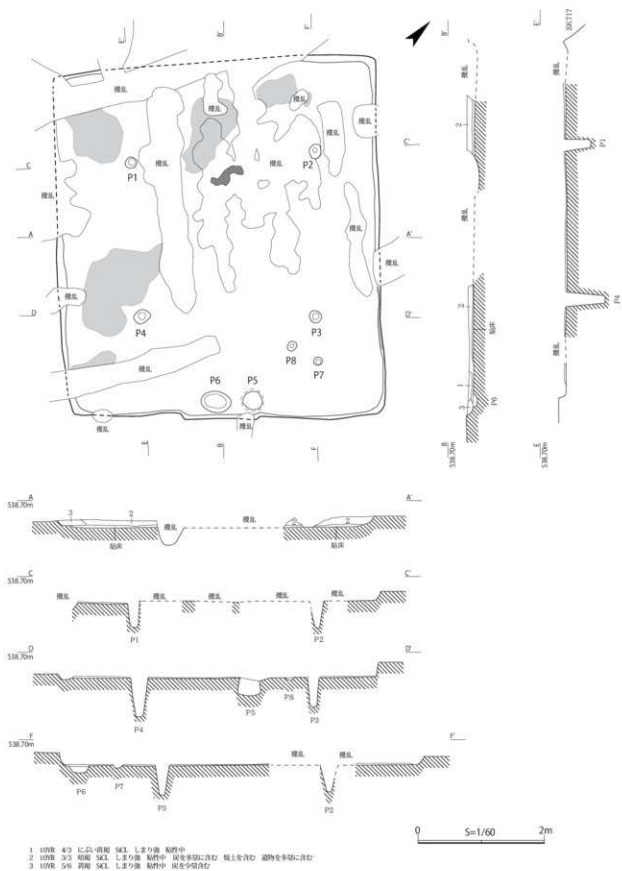


図 36 SI715

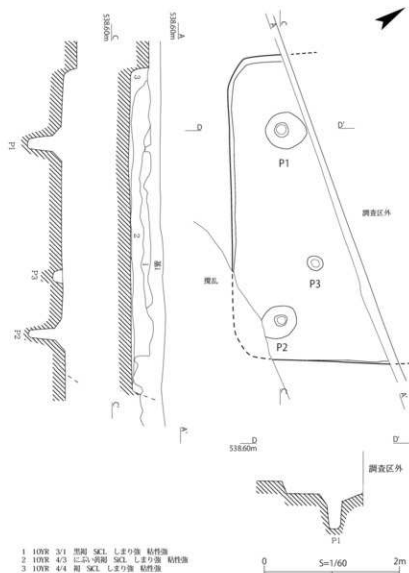


図 37 SI1006

SI1006 (図 37、写真図版 12)

概観：本建物は北半分が調査区外(段丘崖)となっており、全体の3分の1程度を把握した。主軸方向はN 60°Wを示す。主軸長4.5m、副軸残存長1.8mを測る。検出面から床面までの深さは19cmを測る。覆土は3層に分かれ、レンズ状の堆積を示すことから自然に埋設している。

床・壁：床の周縁部を除く床に貼床がされる。締まりはやや強い。壁は壁際からやや急に立ち上がる。柱穴：P 1～2は主柱穴である。P 3は補助的な柱穴とみられる。

遺物：覆土中から打製石斧(石58)、磨製石斧(石76)、有肩扇状形石器(石179)、石包丁(石174)が出土している。

時期：遺構・遺物の諸特徴から後期とみる

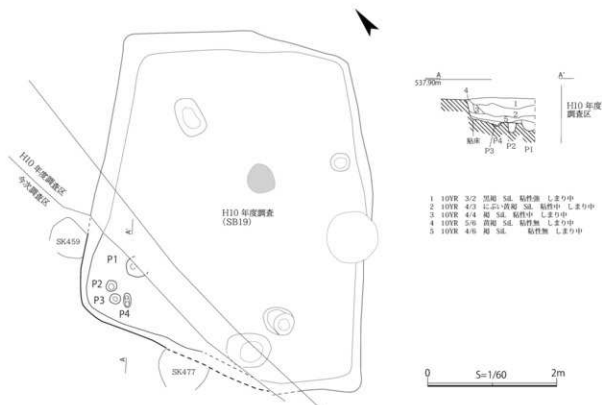


図 38 S1001(SB19)

S1001 (図 38、写真図版 12)

概観：本建物は平成 10 年度に調査された竪穴建物「SB19」である。今次調査では南東隅を新たに把握した。平面はややいびつな台形を呈する。主軸方向は $N 40^{\circ} E$ を示す。主軸長 5.5 m、副軸長 4.5 m を測る。検出面から床面までの深さは 36cm を測る。覆土は 5 層に分かれ、レンズ状の堆積を示すことから自然に埋没している。

床・壁：今次調査範囲において、床のしまりは認められない。壁は壁際からやや急に立ち上がる。

柱穴：P 1 は主柱穴か。P 2～4 は補助的な柱穴とみられる。

遺物：なし。平成 10 年度調査で磨製石鏃等が出土している。

時期：過去の調査成果における見解から後期とみる

3 集石・被熱土坑

(1) 集石 (図 39～44、写真図版 13～19)

礫が確認された遺構を集石に分類した。総数 37 基を数える。ただし、土坑の覆土中に複数の礫を包含するものがあり、両者を区別するため、一括して礫が集められたと判断したものを集石とし、埋没過程で礫が混入したとみられるものは土坑他に区分している。

集石について詳述するにあたり、各特徴に基づいて以下の通り分類する。なお、規模や出土遺物等の詳細については表 9 (p103) にまとめた。

- 1 類：底部に礫を敷くものうち、中央に大型の平石を敷くもの
SS093、SS099、SS175、SS220、SS276、SS305、SS345

2類：底部に礫を敷くもののうち、同程度の大きさの石を敷くもの

SS130、SS386

3類：底部に礫を敷かないもの

SS030、SS076、SS150、SS155、SS171、SS172、SS186、
SS201、SS202、SS240、SS248、SS309、SS411、SS458、
SS460、SS461、SS570、SS581、SS585、SS586、SS617、
SS619、SS633、SS641、SS646、SS652、SS680、SS724

① 特徴 1類は底部中央に大型の平石を置き、その周囲に花卉状に小型の平石を配置するもので、SS220が典型例である。底部に敷かれた石の面は多くが被熱している。また、SS220とSS276では平石の上に灰層の堆積が認められたように、その場で火が使用されたと断定できるものがある。いずれも底部の平石だけで検出されたものはなく、小礫が詰め込まれた状態で埋没していることから、平石の上で礫を多量に用いたか、あるいは別の場所で礫を使用した後に投入したと考えられる。上層の礫はやや乱雑に入れられており、隙間が空くことが多い。

2類は平石は敷かないものの、やや大ぶりの礫を底部の面を意識して敷き詰めるもの。SS130とSS386で、底部にやや大ぶりの礫を規則的に敷き詰め、その上に小ぶりの礫を充填する。SS130は中央に大型の平石を配置しないものの、やや大きい石を掘り込みの中心付近に据える点で1類に近い関係にあるかもしれない。また、SS386では底部の礫敷の上に炭・灰を含む層が認められ、1類と同様に火の使用がされたと考えられる。以上から、構築方法や使用面において、1類と2類は共通する点が認められる。ただし、SS130はやや特殊で、中段以下は礫を1か所に密集させるのに対して、上部ではそこからやや中心がずれた縁辺部にまで礫が分散して広がっており、礫の状況がそれぞれ異なる。これは礫が集められた段階が上部と下部で少なくとも2回以上に分かれるのであろう。

3類は底部に礫を敷かないタイプの集石である。集石の多くが本類に属する。これらのうち、礫を密集させるものがある。典型はSS076で、1か所に礫を集め、隙間なく積み重ねている。ほかにSS171、SS175、SS201、SS680がこれに該当する。その中でもSS171・SS175は底部から小ぶりの礫を積み重ねた後、その上に大型の平石を載せている点で他の例とは異なる。SS175は遺構の構築面自体に被熱も確認され、その場で火を使用したとみられる。

以上のように礫を密集させるものは少数で、出土状況からして礫を一括して投入しているものの、意図的に密集させた形跡がないものが大半を占める。規模はまちまちで、長径40cm前後のごく小型のものから長径150cm近い大型のものまでである。この類型に一括される集石の多くは小型の礫を主体とするが、SS186・SS585・SS586は大型の平坦な石ばかりを集めているなど、その内実はさらに異なる。

ほかに礫の分布に関しては、SS201・202のように構築面よりもかなり上位に礫が集中するものがある。これは掘削から一定の時間が経過し、土坑内が埋没した後に礫が投入された可能性を示唆する。内部の礫については、ほぼ全てが被熱するもの、一部が被熱するもの、礫のいずれも被熱しないものがそれぞれ認められる。SS458では炭や灰を多く含む層が認められるが、遺構自体が被熱している例はSS240のみである。全体として礫が被熱するものは多いが、集石内部で火の使用が確認できたものは少ないといえる。

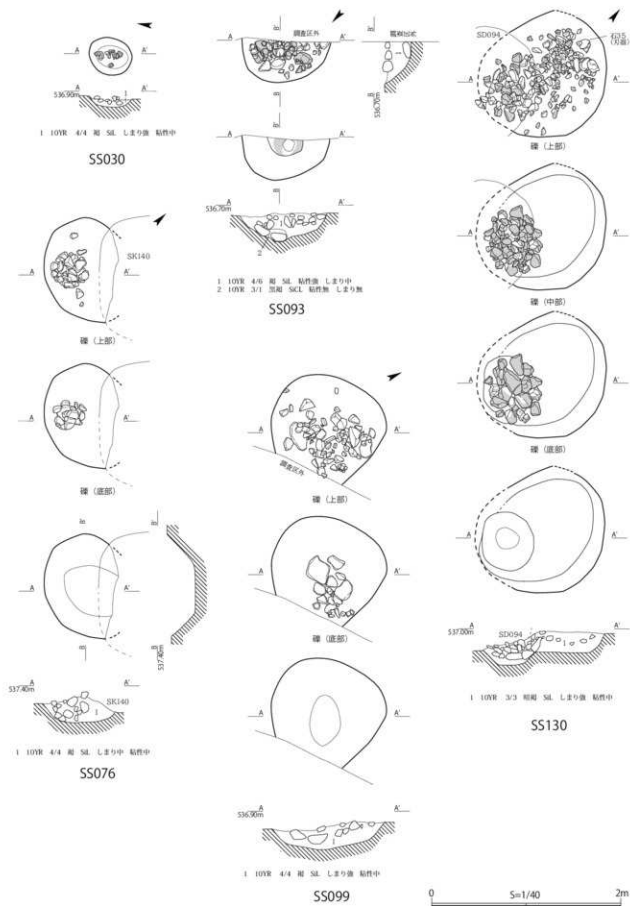


図39 集石(1)

以上から、今次調査における集石の1類、2類及び3類については使用方法や機能がそれぞれ異なると思われる、さらに3類のうち礫が密集するものとししないもの相違などについてもそれぞれ異なる使用形態を示していると考えられる。

② 遺物 土器の破片や石器が出土しているが、各集石から検出された遺物はいずれも少量である。縄文早期の押型文土器片が含まれる割合はやや高いが、撚糸文土器はほとんど認められない。押型文土器は立野式(土62、81・82・93)が比較的多いに対し、それ以外(土114・115)は少数認められる。その一方で、石器や剥片が礫の中に混じる例は多い(石16、35、61、77、83、109～112)。これらの多くは礫に混じるもので、礫と同時に集石に混入したとみられる。器種は刃器や磨石が多くを占めており、石鎌、打製・磨製石斧もあるがいずれも少ない。

③ 時期 SS386、SS175、SS458、SS680の4基の集石について、検出された炭化物を試料として放射性炭素年代測定を行った。SS386は暦年較正後で11090～10711calBPの値となった。これは今回の対象試料中で最も古い値である。次いでSS458が暦年較正後で10244～9968calBP、SS175は5473～5320calBPであった。SS680では、暦年較正後で4823～4578calBPと最も新しい結果となった。以上の結果からは、SS386は早期前葉、SS458は早期中葉、SS175は前期末～中期初頭、SS680は中期後葉となる。出土遺物の観点からは、押型文土器を包含する例が比較的多く、自然科学分析の結果からしても早期に位置づけられるものが含まれることは確実であるが、以上の結果から早期以降の集石も含まれる。

(2) 被熱土坑(図44、写真図版19)

遺構の構築面が被熱するものの礫をほとんど伴わない単独の土坑9基を被熱土坑として一括する。これらは礫の少なさから集石と区分したが、逆に集石とした土坑にも底部が被熱しながらも礫の数が少ないものがあり、被熱土坑と集石との分別が難しい例がみられる。よって、被熱土坑には集石と同等または類似する性格のものが含まれることが想定される。

① 特徴 SK054のように長径55cm程の小型のものから、SK090のように長径150cmを超えるものまである。SK189、SK614、SK733は底部が全面的に被熱しているが、そのほかは構築面の一部が被熱する。焼礫を比較的多く伴うSK090は被熱土坑としたが、集石が後世の破壊を受けた残骸の可能性もある。遺構の内部には炭化物が残存するものがあるが、燃料としての木材等が形状を保っている例は認められない。SK614では焼土層中から微細な炭化物を採取した。

② 遺物 いずれもごくわずかな量の土器片や石器を出土したにとどまる。それらも明確に遺構に伴うと判定できるものは稀である。SK090、SK162、SK189では押型文土器片が出土しているほか、石器はSK189で削器(石27)、SK237で石匙(石30)が挙げられるが、いずれも遺構の時期を特定しうるものではない。

③ 時期 SK614の炭化木材を試料として放射性炭素年代測定を実施したところ、暦年較正後で11068～10585calBPという値であった。この年代は縄文時代早期前葉に相当する。したがって、少なくともSK614に類似するSK189、SK733などの被熱土坑はSK614と同時期に位置づけられるものと考えられる。

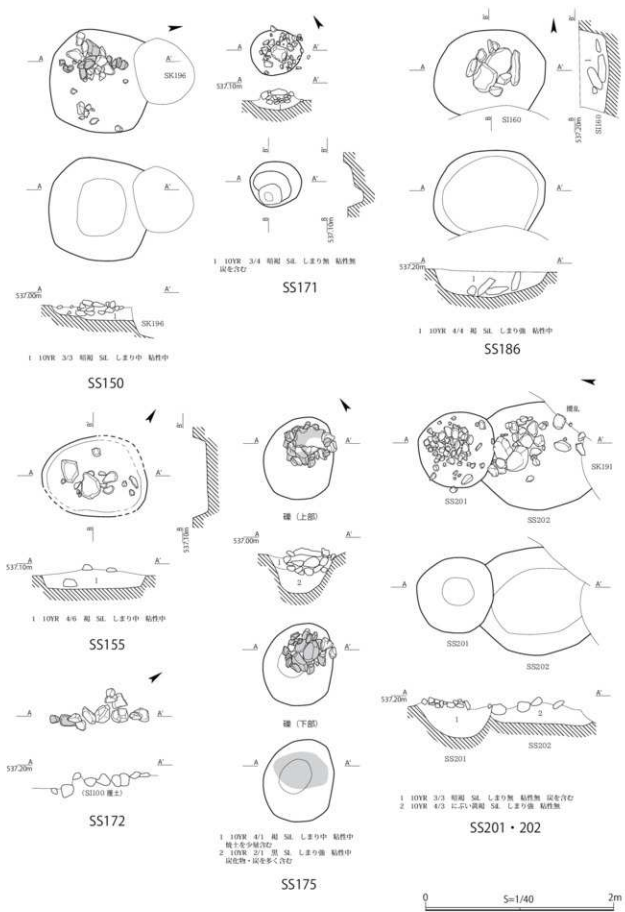


図40 集石(2)

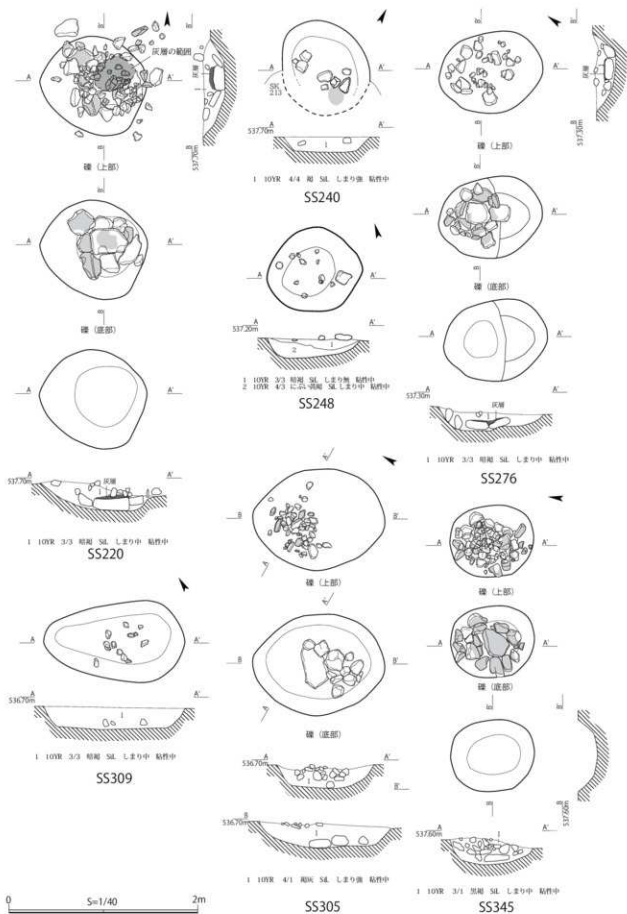


図41 集石(3)

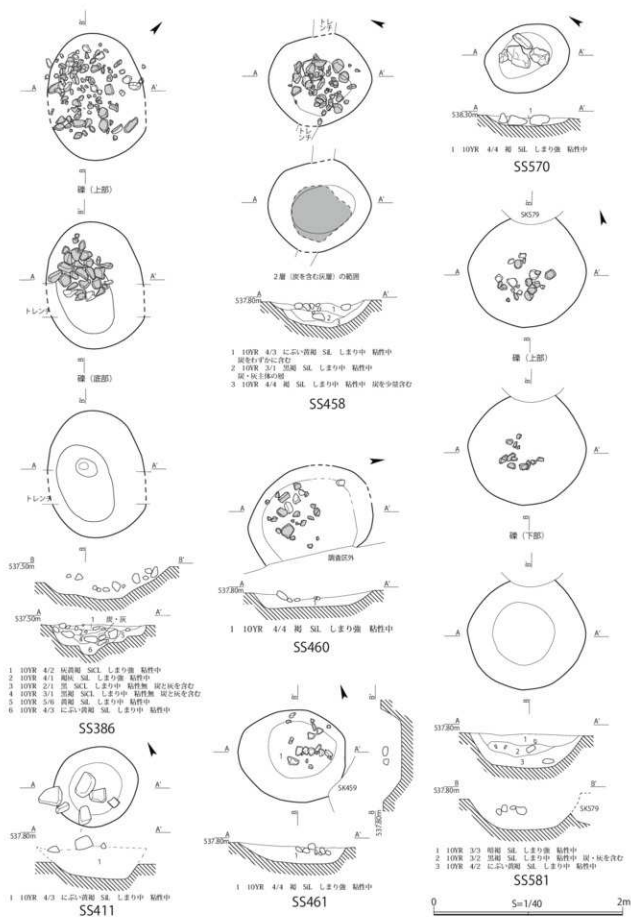
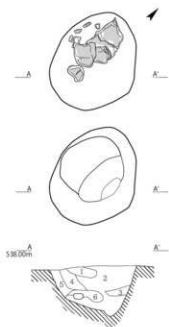
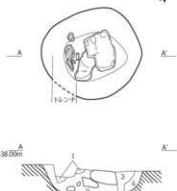


図42 集石(4)



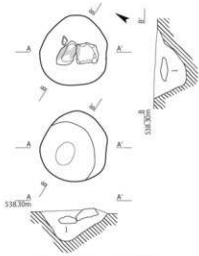
- 1 109R 5/4 におい漬期 SIL しまり中 粘液中 固全少埋含む
- 2 109R 5/3 におい漬期 SIL しまり中 粘液中 固全少埋含む
- 3 109R 4/4 期 SIL しまり中 粘液中 固全少埋含む
- 4 109R 4/6 期 SIL しまり中 粘液中 固全少埋含む
- 5 109R 3/6 期 SIL しまり中 粘液中 固全少埋含む
- 6 109R 3/2 期 SIL しまり中 粘液中 固全少埋含む

SS585



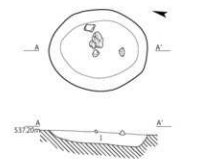
- 1 109R 4/3 におい漬期 SICL しまり中 粘液中
- 2 109R 3/3 期 SIL しまり中 粘液中
- 3 109R 4/4 期 SIL しまり中 粘液中
- 4 109R 4/6 期 SIL しまり中 粘液中

SS586



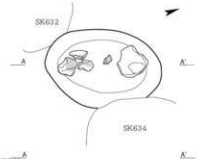
- 1 109R 4/4 期 SICL しまり中 粘液中

SS617



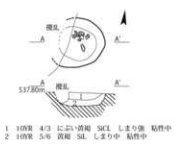
- 1 109R 4/4 期 SICL しまり中 粘液中

SS619



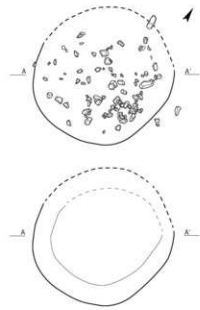
- 1 109R 4/1 期 SIL しまり中 粘液中
- 2 109R 3/6 期 SIL しまり中 粘液中

SS633



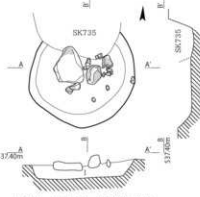
- 1 109R 4/3 におい漬期 SICL しまり中 粘液中
- 2 109R 3/6 期 SIL しまり中 粘液中

SS641



- 1 109R 4/1 期 SIL しまり中 粘液中
- 2 109R 3/3 期 SIL しまり中 粘液中
- 3 109R 3/2 期 SIL しまり中 粘液中

SS646



- 1 109R 4/4 期 SIL しまり中 粘液中

SS652

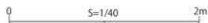


図43 集石(5)

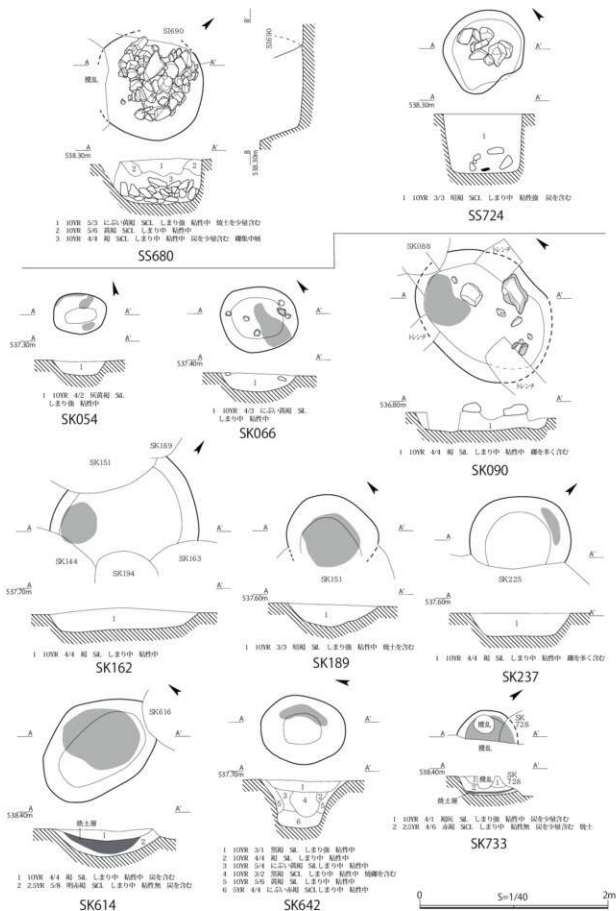


図44 集石(6)・被熱土坑

4 土坑

被熱土坑を除く各種土坑は総数 467 基を数える。そのうち時期を詳細に絞り込めたものは少数だが、土坑の大半は縄文時代に属するものとみられる。以下、遺物等の出土状況において特筆すべき土坑について個別に詳述し（図 45～48）、それ以外の土坑をまとめて図示する（図 49～69）。

なお、各土坑の計測値や出土遺物等の詳細については表 2～8（p96～102）にまとめた。

SK141（図 45、写真図版 20）

平面長楕円形を呈する大型の土坑で、断面は船底状を呈する。底部から 20cm 前後浮いた覆土中に黒曜岩の石核 5 点、チャート剥片 1 点（石 38～42）が出土した。これらは 1 箇所にまとまりをもち、分散している。遺物の出土レベルは概ねそろっており、一括して投棄された可能性が高い。時期の比定は困難だが、早期末の条痕文系土器片が他の時期の土器片に混じって出土している。

SK205（図 45、写真図版 22）

ほぼ円形を呈する小型の土坑である。花崗岩礫とともに土器 1 個体が出土した。土器は浅鉢（土 226）である。時期は中期初頭の五領ヶ台式並行期である。

SK226（図 46、写真図版 21）

縄文早期の竪穴建物 SI161 の覆土上層で検出した土坑で、SK227 に切られる。SI161 の掘り下げ中に把握したため平面形は不明で、南北方向に記録した SI161 の B-B' 断面から本土坑の直径は 130cm 以上の規模であったことが知れる。土器 1 個体が埋納される。まず胴部を 8 単位に分割し、そのうち 2 単位分は表面を上、残りは裏面を上にして下から順に積み重ねる。なお、底部付近は出土しておらず、埋納時に除外されたとみられる。土器は頸部に集合沈線を施すもの（土 232）で、中期初頭から中葉への過渡期に相当する。

SK227・228（図 46、写真図版 22）

SK226 と同様に SI161 の掘削途中で把握した土坑で、SK227 が SK228 を切る。双方とも本来の平面的なプランは不明だが、SI161 の土層断面の観察により、SK227 は長径 75cm 前後を測る。SK228 出土土器は土坑の南東側に破片がまとまり、打ち割って埋納されたとみられる。頸部に集合沈線を施す土器（土 235）で、中期初頭の所産である。SK227 は唐草文系土器の同一個体の破片 2 点（土 233・234）で、中期後葉に位置づけられる。

SK245（図 45、写真図版 20）

平面長楕円形の小型の土坑で、断面は箱状を呈する。上部を別の土坑 SK302 に切れ、下部が残る。覆土はやや複雑な土層堆積であり、全体に土器片を包含することから、土器片とともに埋めたものとみられる。土器は頸部に集合沈線を施す土器（土 227）で、北東方向におよそ 9m 離れた位置にある別の土坑 SK281 から出土した破片と接合したことが特筆される。押型文土器片（土 117・118）も出土しているが混入したもので、遺構の構築時期は中期初頭である。

SK341（図 45、写真図版 22）

平面長楕円形の土坑である。大小の自然石とともに土器片を多く含む。覆土は複雑で、黄褐色のブロックを含んでおり、人為的に埋められたとみられる。出土土器は北陸系の小型土器（土 230）や関西の大歳山式（土 229）がある。時期は前期末とみる。

SK511（図 46、写真図版 22）

平面長楕円形を呈する大型の土坑である。覆土は複雑で、暗褐色のブロックを含むことから人為的に埋められている。覆土中に土器片が混じっており、これらも一括して埋納されたとみられる。出

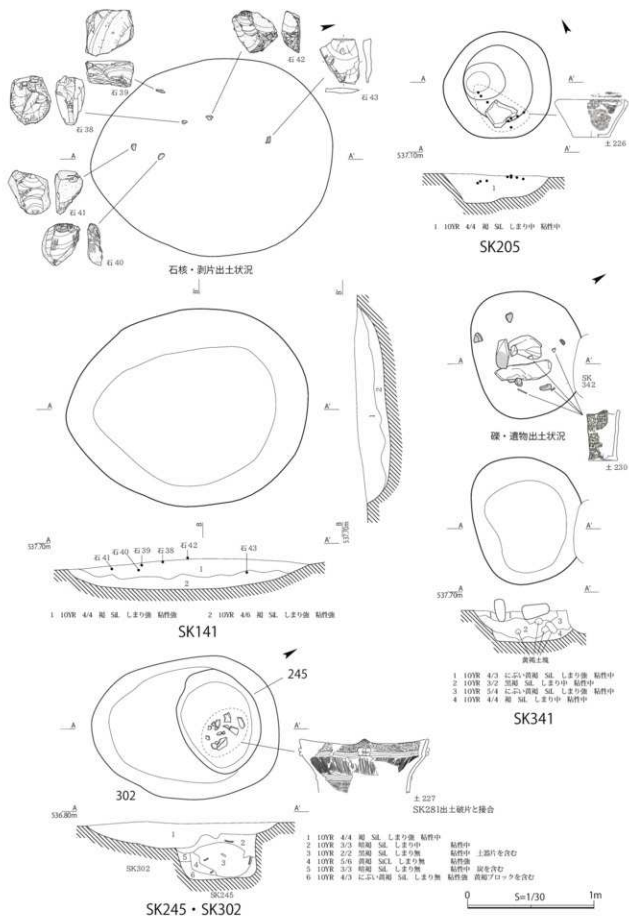


図45 土坑(1)

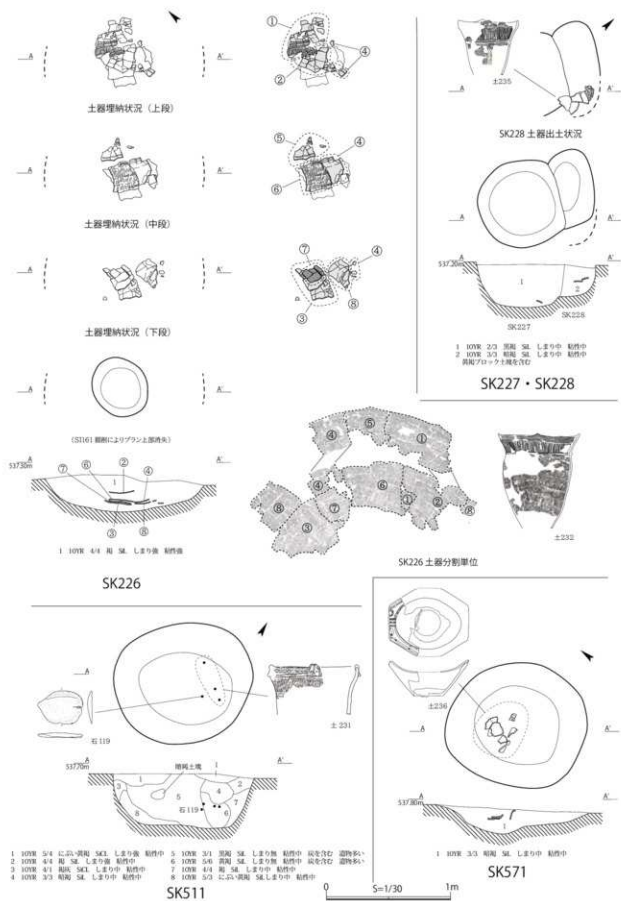


図46 土坑(2)

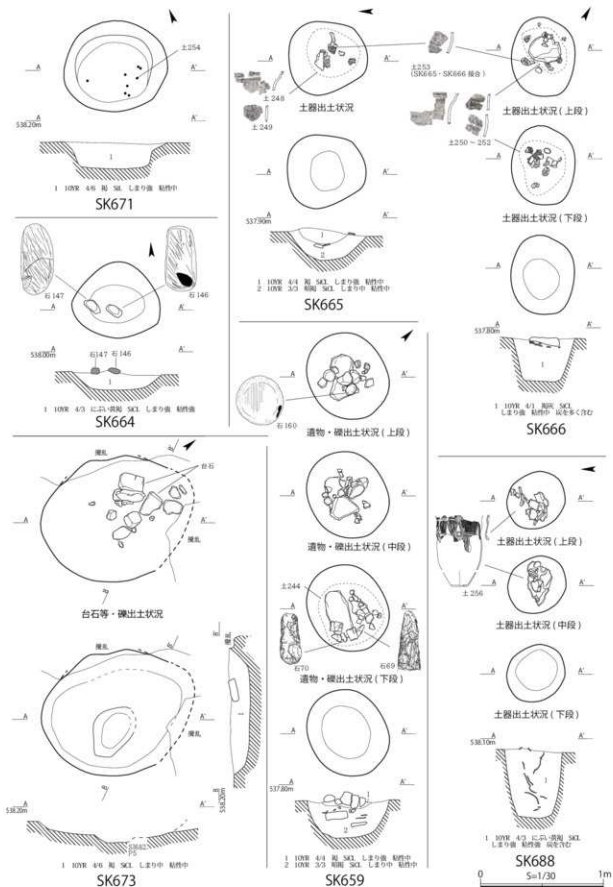


図47 土坑(3)

土器は頸部に平行沈線を施す土器（土 231）であり、時期は中期初頭に比定される。押型文土器片（土 127）が混入している。

SK571（図 46、写真図版 22）

平面がほぼ円形を呈する大型の土坑である。八ヶ岳山麓系の浅鉢（土 236）が 1 個体出土した。土層は 1 層として記録したが、出土状況から埋納されたものとみる。中期初頭～中葉に相当する。

SK618（図 48、写真図版 23）

長径 108cm を測る大型の土坑で、平面形は長楕円形を呈する。断面は箱状に深く。覆土は炭を多く含む黒色土を主とし、黄色ブロックも含む。底部には 4 個の花崗岩の平石が半円形に敷かれる。覆土中には大小の被熱した礫とともに土器片や石器が混じる。上層には大ぶりの礫が多く、中～下位にかけて礫と共に土器片が多く見受けられる。花崗岩の自然礫が多数を占めるが、一部に硬砂岩や珪質の石材が含まれ、打ち割られたものもある。底面や壁面は被熱しないものの、底部に敷かれた平石の上面は強く被熱する。また、土器も強く被熱して脆いものや、煤が付着する破片が多い。以上から本土坑において、火を使用した何らかの行為の形跡が認められる。また、礫や土器に煤が付着することから、蒸し焼きのような状態になっていた可能性がある。内側に自然堆積した土層が認められず、最終的に地山と同質の黄色ブロック土を含む土によって一度に埋め戻されている。短期間のうちに掘削と埋め戻しを行った結果であろう。

土器は主として 3 個体分あり、内訳は平行沈線を施す土器の胴部から口縁部（土 239）、縄文を地文とする土器の底部（土 240）、円筒形の土器の胴部下半（土 241）である。241 は全体が被熱して脆くなっているのに対し、239 は被熱した痕跡が認められない。以上の土器は中期初頭の末から中葉の過渡期に比定される。土器と共に伴する石器は打製石斧（石 64～66）、横刃型石器（石 120）、石錘（石 135～137）がある。

遺構内部で採取した炭化樹木について放射性炭素年代測定を実施した結果、年代較正後で 5304～5050calBP の値が得られた。これは縄文時代中期初頭であり、遺物の相対的な年代観と整合する。なお、炭化物の樹種は低湿地を好むハンノキ属であった。

SK620（図 48、写真図版 24）

平面不整形の土坑である。中央に大型の長細い花崗岩礫を据え、石器 4 点を 1 箇所にまとめて埋置する。覆土には炭が混じるが、遺構自体は被熱していない。石器は長大な打製石斧（石 67）、磨製石斧 2 点（石 81・82）、磨石（石 159）である。土器がほぼ出土しなかったため時期の特定には難があるが、石器の特徴や器種構成から前期もしくは中期の遺構とみる。

SK643（図 48、写真図版 25）

平面円形を呈する土坑である。SK644 と攪乱に一部を切られる。内部から八ヶ岳山麓系の厚手の土器（土 237・238）が破砕された状態で出土している。覆土は複雑であり、土器とともに人為的に埋められたことを示す。時期は中期初頭から中葉の過渡期である。

SK648（図 48、写真図版 25）

平面楕円形を呈する土坑である。底部は船底状で比較的浅い掘り込みであるが、上部は表土掘削時にかなり削平されており、辛うじて底部付近が残存したようである。一部を攪乱に切られる。中央に炭を含む層（1 層）とともに土器片が集中することから、本遺構では土器の破砕・埋納に際して火を用いた何らかの行為が行われた可能性があるが、遺構の構築面は被熱していない。土器は頸部に集合沈線を施す土器（土 242・243）1 個体分、口縁部から胴部にかけての一部が出土している。石器は折損された削器（石 29）が伴する。中期初頭から中葉の過渡期に相当する。

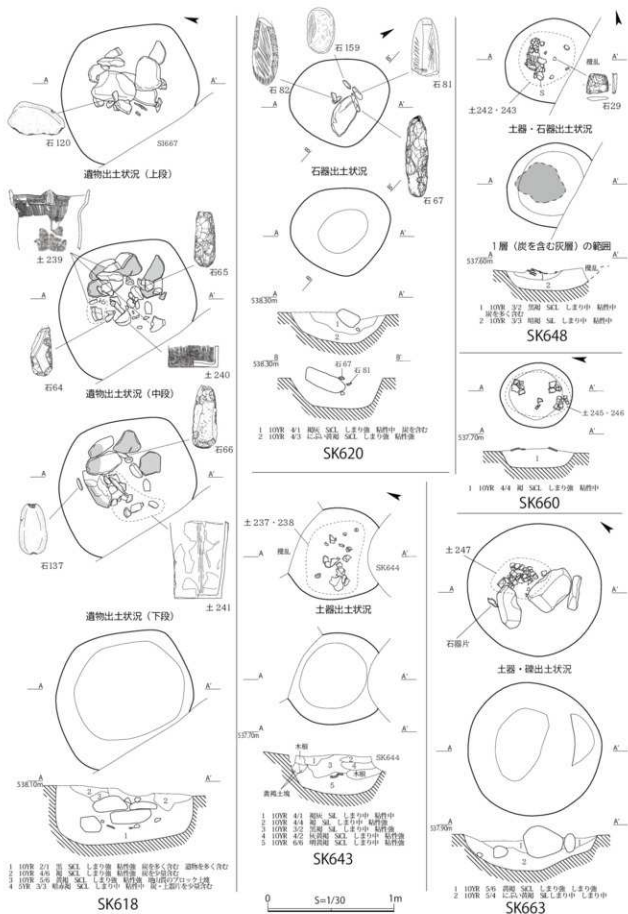


図48 土坑(4)

SK659 (図47、写真図版25)

平面長楕円形を呈する土坑である。中央に遺物と礫が集中する。底部には長大な花崗岩を敷き、破碎された土器の底部・胴部(土244)と打製石器2点(石69・石70)が集中する。中～上層には大型の花崗岩や粘板岩の礫が規則性なく投入されている。覆土には炭が混じるものの、遺構内で火が使用された形跡はないため、おそらく別の場所で火を用いて何らかの行為をした後に礫や遺物を一括して投棄した遺構と考えられる。時期は土器の年代から中期初頭に位置づけられる。

SK660 (図48、写真図版25)

平面がほぼ円形を呈する土坑である。破碎された土器片が一括して出土したが、沈線文を施した胴部(土245・土246)で、口縁部や底部はない。時期は中期初頭である。

SK663 (図48、写真図版24)

長径105cmを測る比較的大型の土坑で、平面形はほぼ円形を呈する。中央に花崗岩の巨礫2個と平石1個を置き、土器の胴部の一部(土247)のみを割り取って底部に敷く。以上から、単なる投棄ではなく何らかの行為がなされたとみられる。土器の時期からして中期初頭の遺構である。

SK664 (図47、写真図版25)

平面不整形円形を呈する小型の土坑である。検出面からの深さは20cm前後と浅い。2点の特殊磨石(石146・石147)が出土した。遺物はこの2点のみで、土器等は出土していない。当該箇所付近の表土はきわめて薄く、重機による表土掘削時に遺物が露出した。本来はさらに深い土坑であったが表土の流出等が激しく上部は失われたとみられる。特殊磨石は縄文早期に特徴的な器種であり、当該期に位置づけられる。

SK665・SK666 (図47、写真図版25・26)

双方とも平面不整形楕円形を呈する小型の土坑で、両者は僅か40cm程の距離で隣接する。平面的な規模は近いが、SK666は断面箱状でやや深く、SK665は断面船底状を呈する。SK666は中央に平たい花崗岩礫が置かれ、その下位と周囲に土器片が分布する。SK665は打ち欠かれた硬砂岩の石材が土器片と共に置かれている。それぞれ頸部に集合沈線を施す土器(土248～土253)が出土しているが、同一個体とみられる。さらにそのうち一部の破片(土253)については、各遺構から別個に出土しながら接合している。以上から、SK665・SK666は同時期に何らかの目的で1個体の土器を別々に埋納したとみられる。石器は横刃型石器(石121～石123)がある。

SK671 (図47)

平面楕円形を呈する土坑である。断面形は底部付近が垂直に近く掘られ、上部が緩やかに広がる。覆土は1層として記録したが、内部から同一個体とみられる土器の小片が一括して出土しており、埋納されたとみられる。細片化しており全体形は復元しえないが、図示した1点は沈線の文様を施す土器の胴部(土254)で、周辺の土坑に多くみられる頸部に集合沈線を施す土器と技法が同じものである。時期は中期初頭に相当する。

SK688 (図47、写真図版26)

柱穴状に深く掘られた土坑である。内部に土器1個体分の胴部が埋納されていた。底部に小型の破片を重ね、上部には大ぶりの破片を立てるようにして埋納する。出土土器(土256)は細隆線文土器の系譜をひく大型品で、時期は中期後葉に位置づけられる。

SK299 (図55)

断面逆台形状を呈する小型の土坑である。覆土は7層に分かれる複雑な土層であり、一度の機会に埋め戻しがなされたと考えられる。土器は関西地方の船元式の胴部(土260)が出土している。

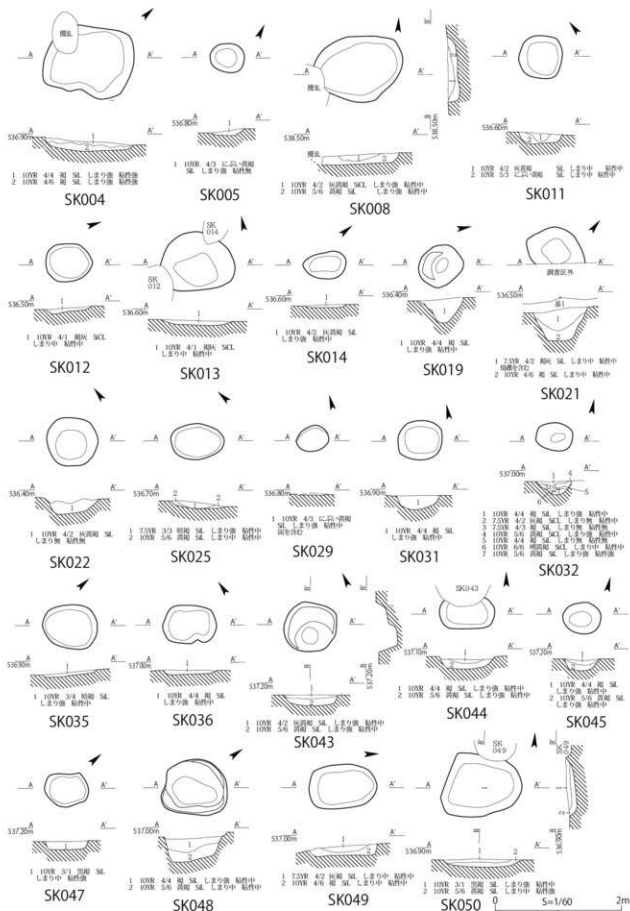


図 49 その他土坑 (1)

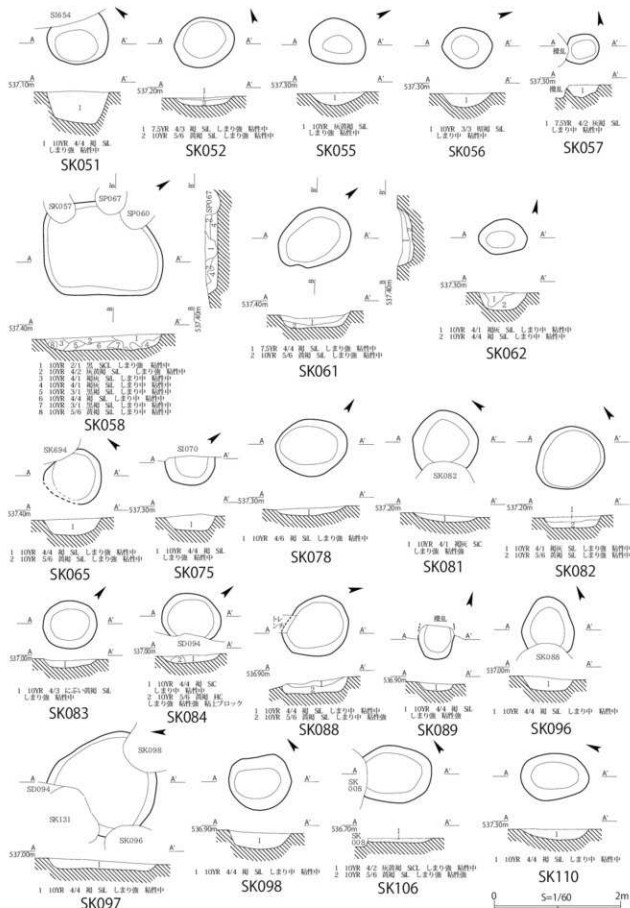


図50 その他土坑(2)

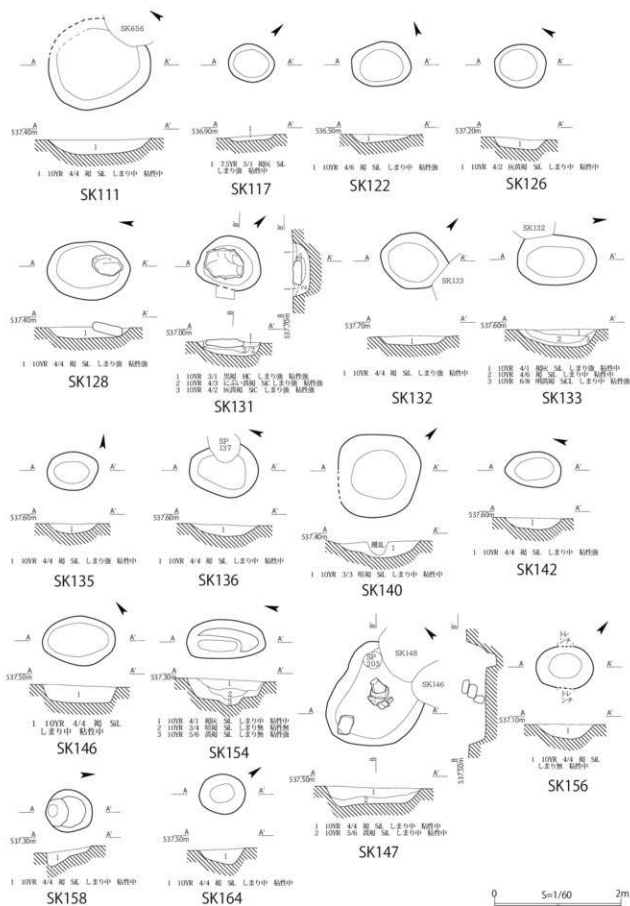


図 51 その他土坑 (3)

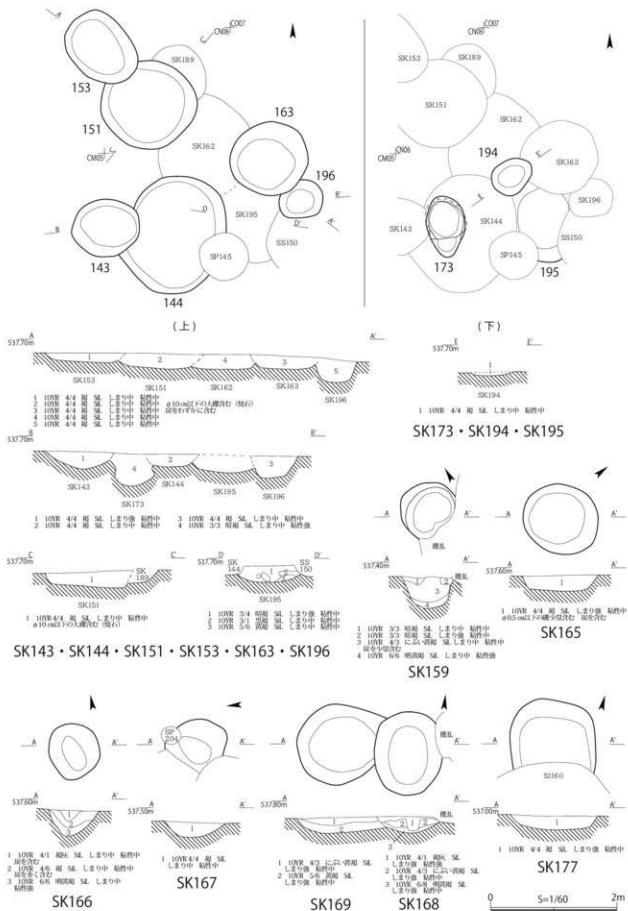


図 52 その他土坑 (4)

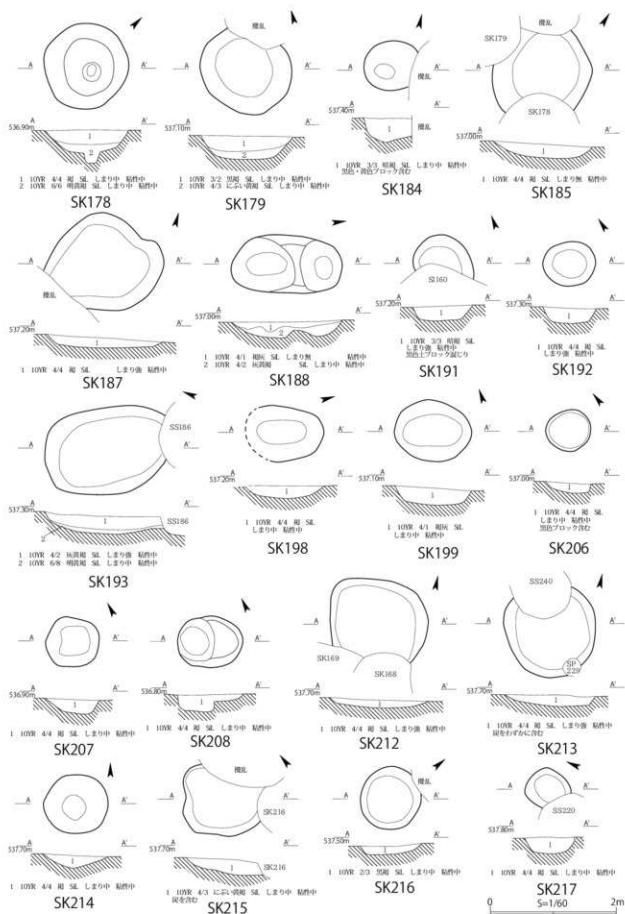


図53 その他土坑(5)

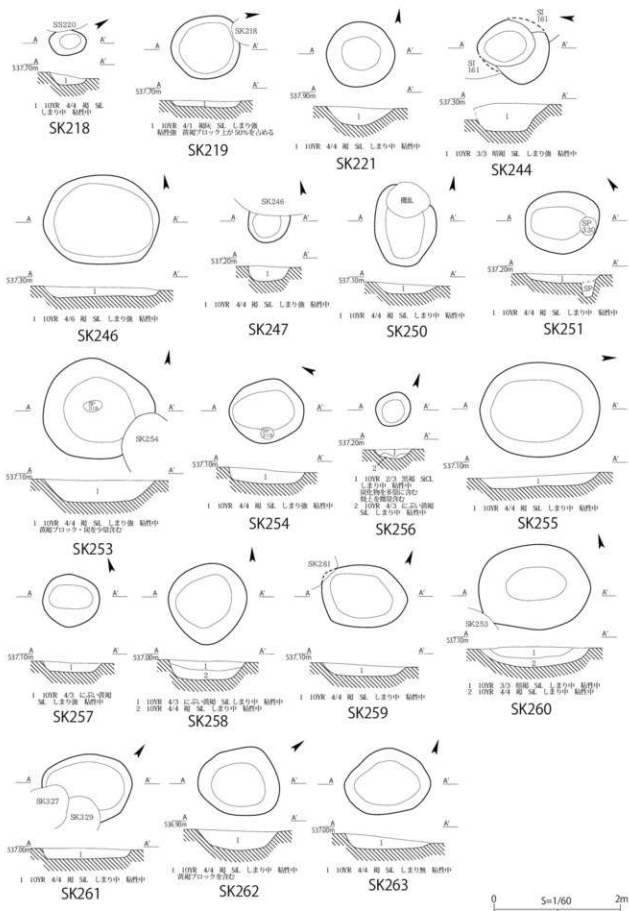


図54 その他土坑(6)

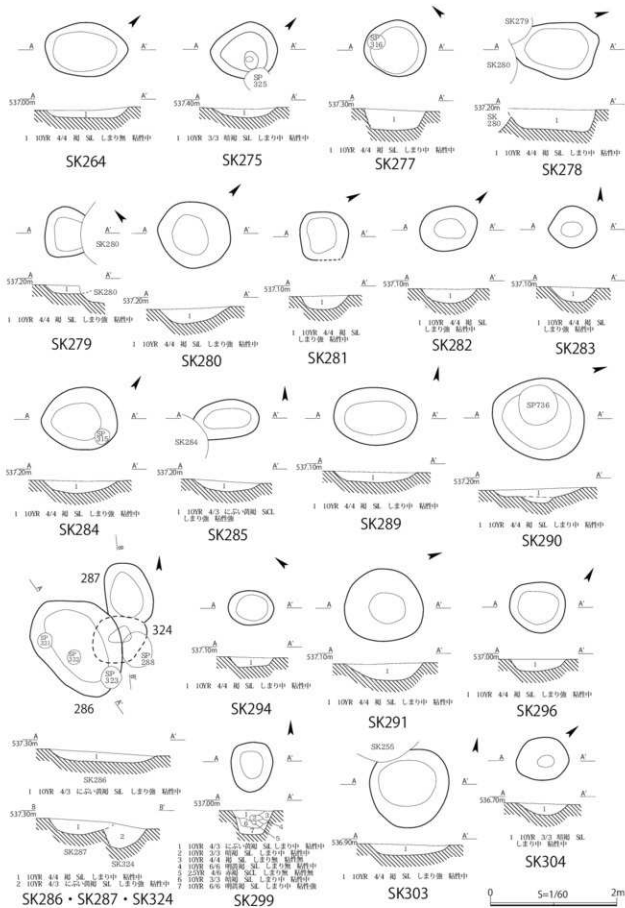


図55 その他土坑(7)

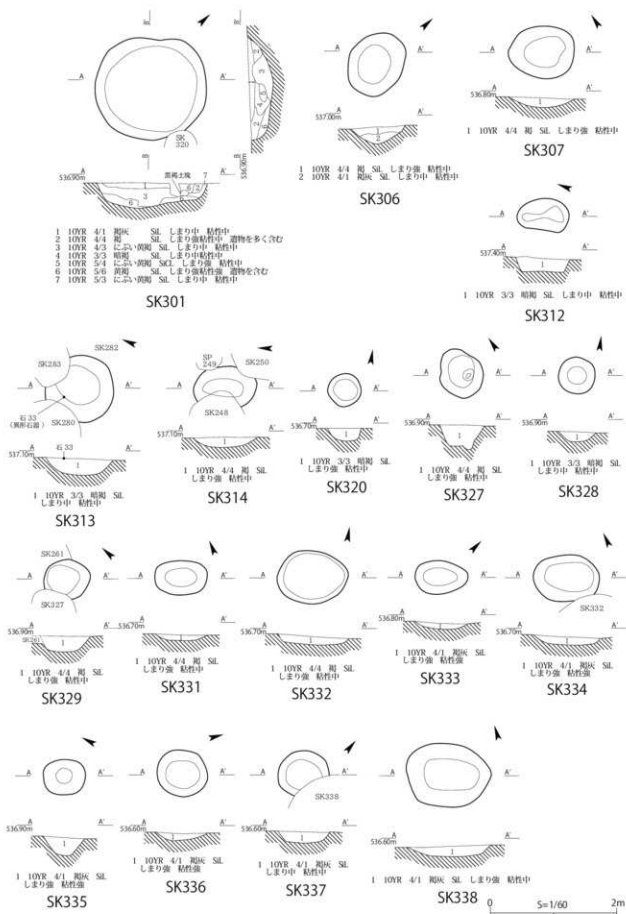


図 56 その他土坑 (8)

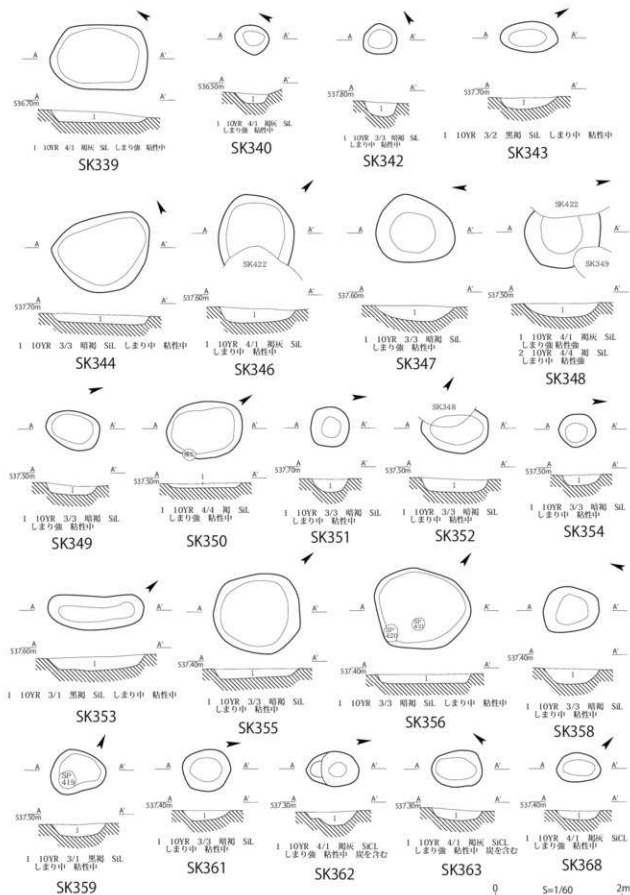


図 57 その他土坑 (9)

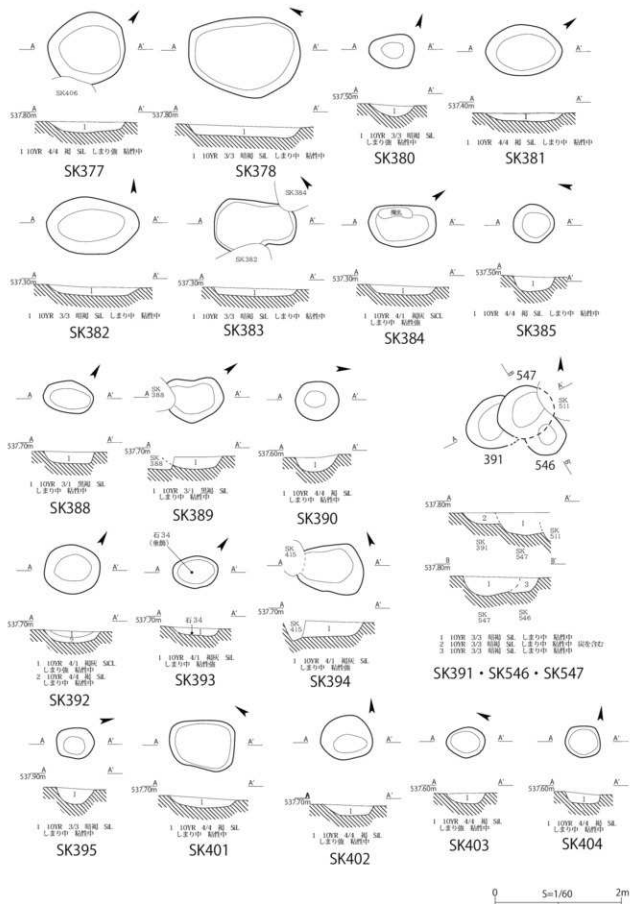


図 58 その土坑 (10)

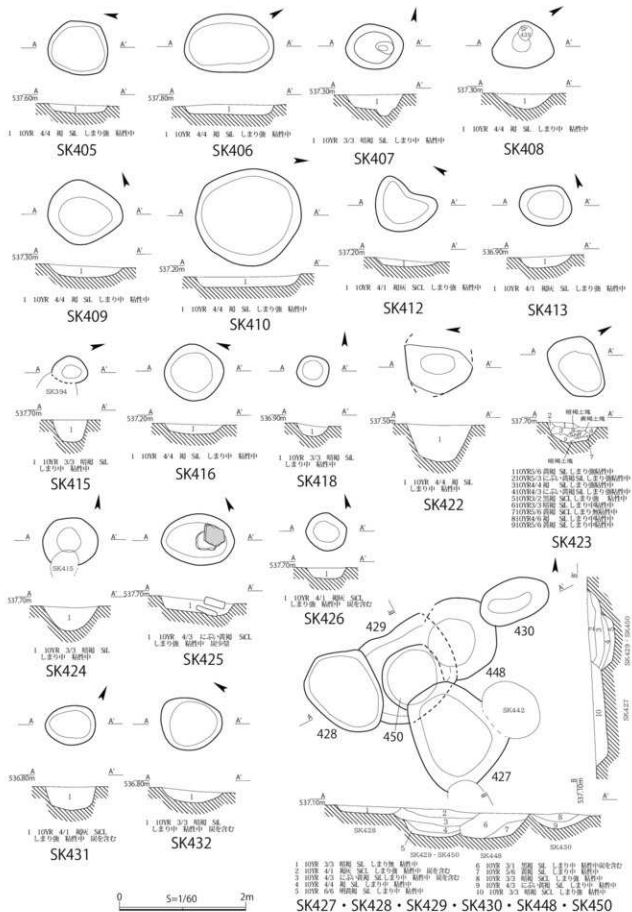


図 59 その他土坑 (11)

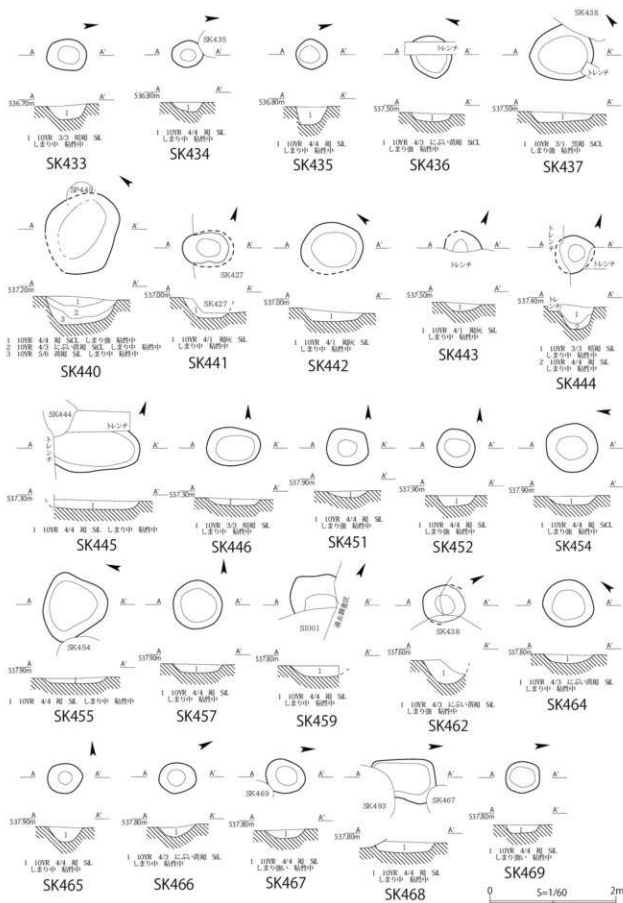


図 60 その他土坑 (12)

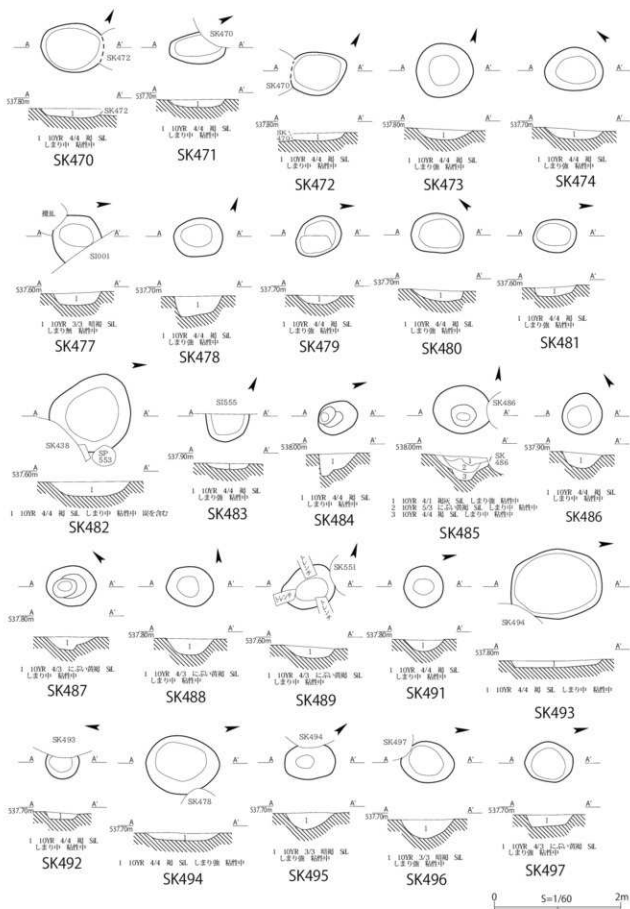


図 61 その他土坑 (13)

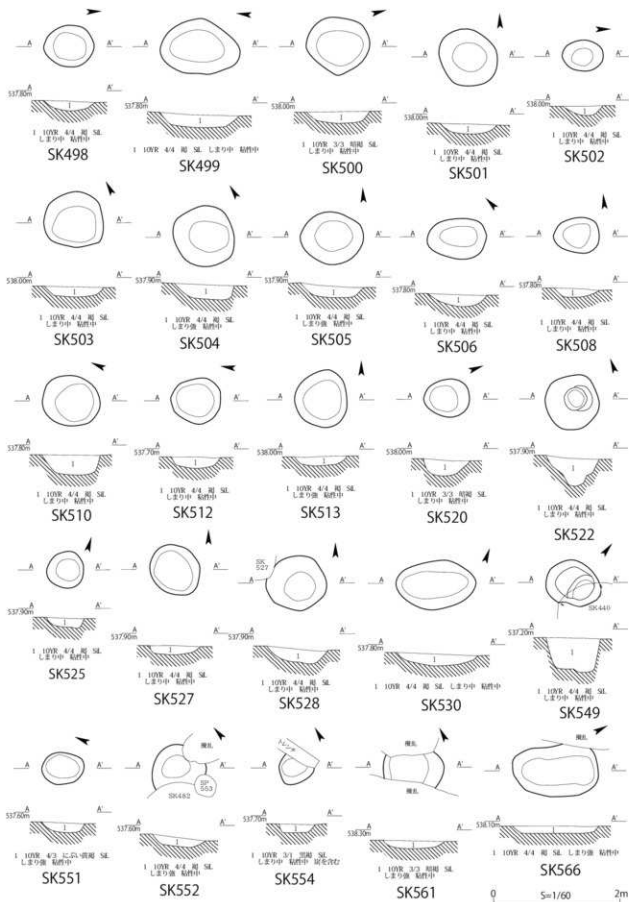


図 62 その他土坑 (14)

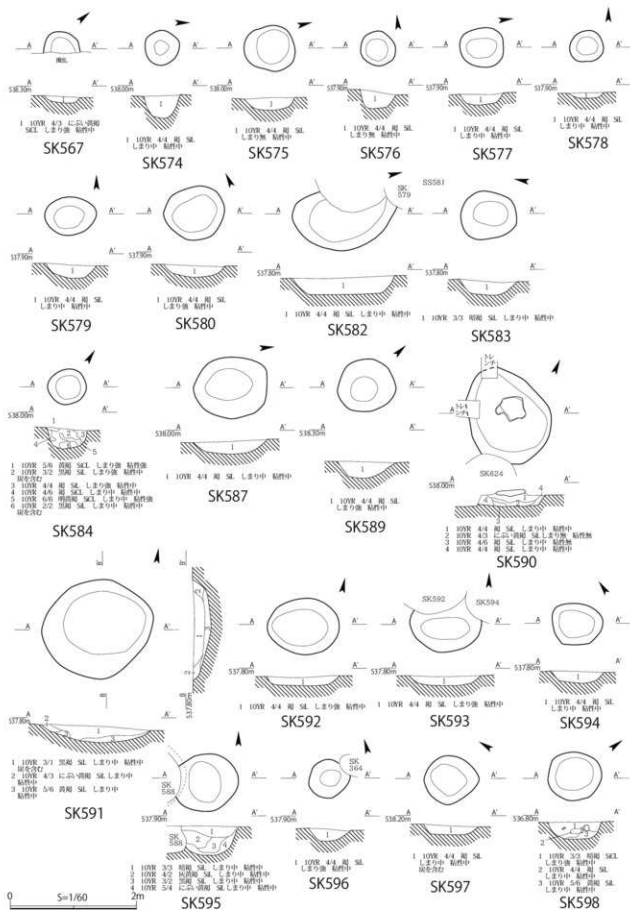


図 63 その他土坑 (15)

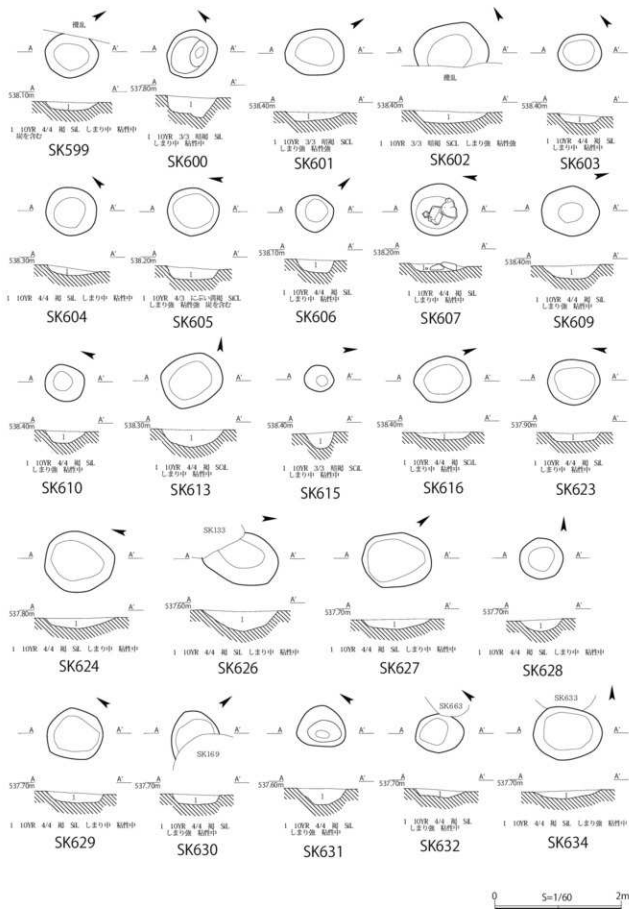


図 64 その他土坑 (16)

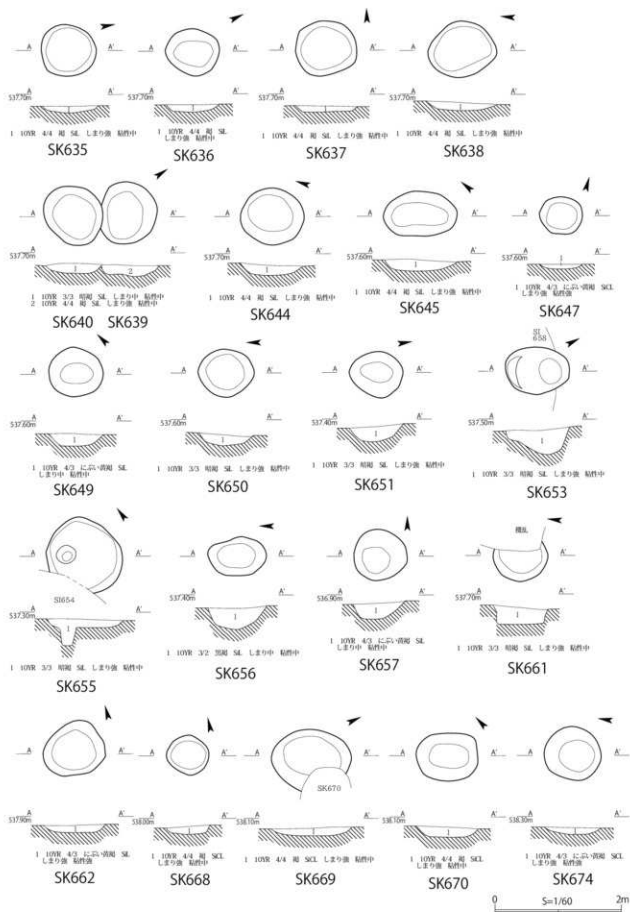


図 65 その他土坑 (17)

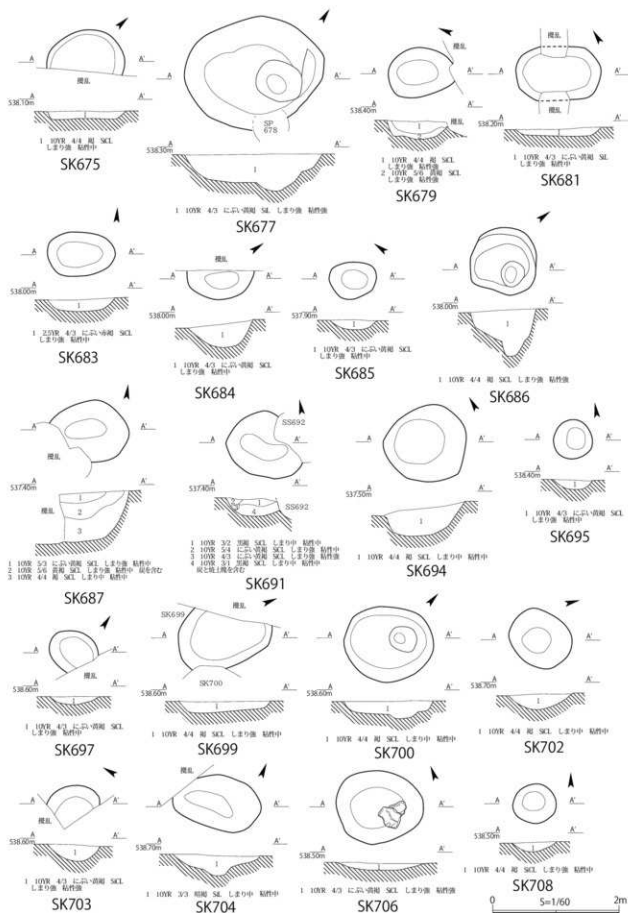


図 66 その土坑 (18)

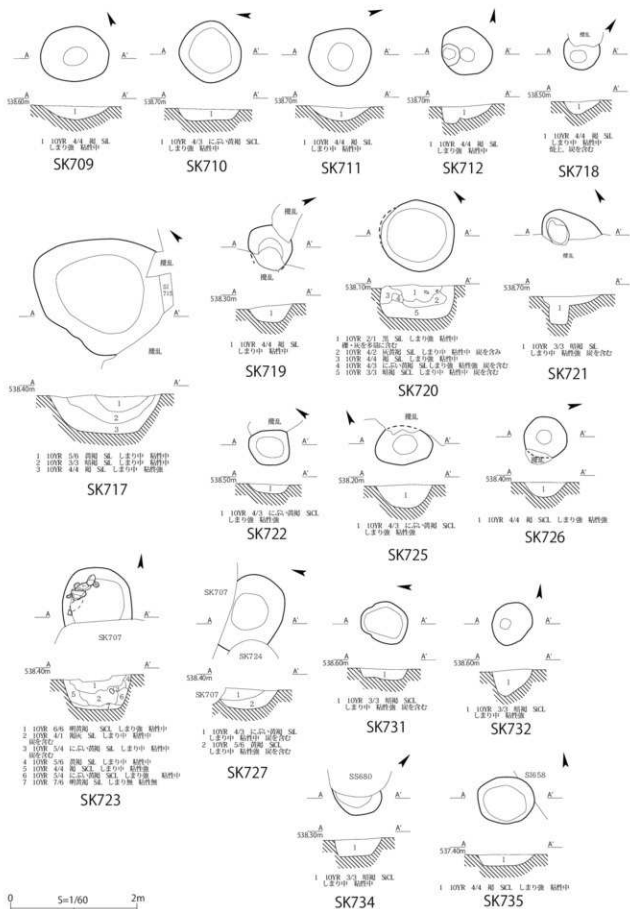


図 67 その他土坑 (19)

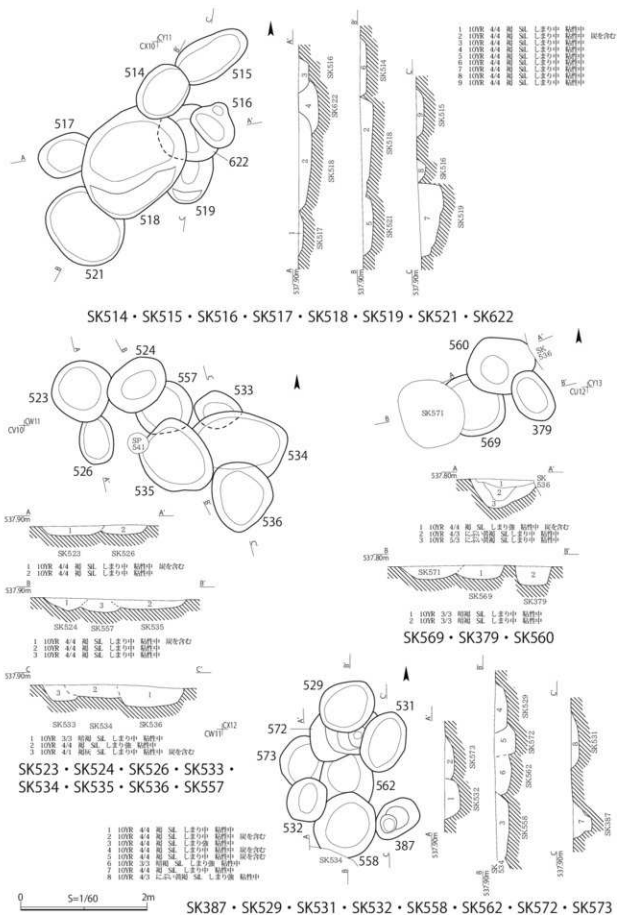


図 68 その他土坑 (20)

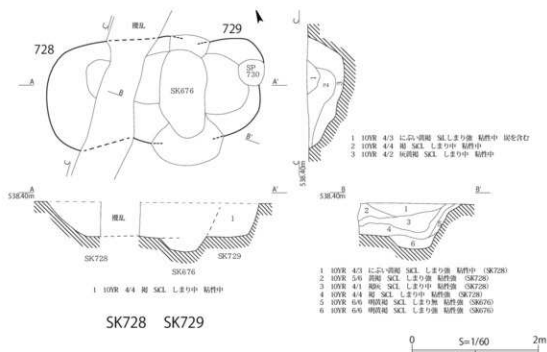


図 69 その他土坑 (21)

SK301 (図 56、写真図版 27)

平面楕円形、断面船底状の土坑である。覆土は6層に分かれ、2層以下はブロック状の土塊を含む複雑な土層であることから人為的な埋納がされた蓋然性が高い。石器は比較的多く出土しており、石錘(石132)、横刃型石器(石114、115)、特殊磨石(石148)を図示した。土器は立野式の押型文土器(土69)が含まれる。以上の出土遺物から本遺構の構築時期を早期前葉とみる。

SK313 (図 56)

平面楕円形の土坑である。遺構上部の覆土中から異形石器(石33)1点が単独で出土した。他に本遺構にともなう出土遺物はなく、構築時期は不明である。覆土は単一で自然に埋没したとみられる。以上から、異形石器については本遺構に埋納されたものではなく、混入した可能性が高いとみる。

SK350 (図 57、写真図版 27)

平面楕円形の土坑である。ごく浅く覆土も1層だが、出土遺物は土器、石器ともに量がある。土器は立野式の押型文土器片を主体とし(土71～73、91)、石器は横刃型石器(石116～118)を図示した。出土遺物から早期前葉に位置づけられる。

SK393 (図 58)

小型の平面楕円形を呈する土坑である。底部付近で石製垂飾(石34)1点が出土した。早期の撚糸文土器の破片が出土しているがごく微量である。単純な浅い掘り込みで覆土も1層で、性格や時期は不明である。

SK584 (図 63、写真図版 27)

平面円形の小型土坑である。覆土は複雑な状況を示しており、ブロック状の土塊を含む6層に分かれる。頸部に集合沈線を施す土器(土269)が出土している。時期は中期初頭に位置づけられる。

以上のほか、特筆すべき出土状況として、SK394とSK415においてそれぞれ別個に出土した土器片が接合している(土262)。

5 袋状土坑 (図70、写真図版27)

SK087、SK564、SK565、SK588の4基が該当する。

①特徴 入口が狭く、地中で下部が外側に膨らむ形態の土坑である。機能として貯蔵が考えられる。SK564は断面で見ると遺構下部が外側に丸く膨らむが、それ以外は底辺が最も広い三角ラスコ状を呈する。SK564は横幅が最大で130cmと最も大型であるが、SK588がやや小型であることを除けば、他の3者の規模にさほど相違はない。土層堆積状況から、自然に埋没している。SK564とSK565は近接した位置関係にあり、規模や出土遺物の時期も類似することから同時期に併存したとみられる。

②遺物・構築時期 SK087とSK588からは繊維を含む東海条痕文系土器が出土している。いずれも廃絶後に自然埋没する過程で流入したとみられるが、SK588では条痕文系土器の出土量が比較的多く(土159・160・164)、構築時期を前期末とみる。また、SK564・SK565の上層ではそれぞれ埋没の過程で凹石(石144)や台石の破損品等が投棄されていた。遺物には押型文土器(土119)や時期不明の土製円盤(土325)などが混じるが、中期初頭の土器片が比較的多いことから、当該期に構築されたとみる。

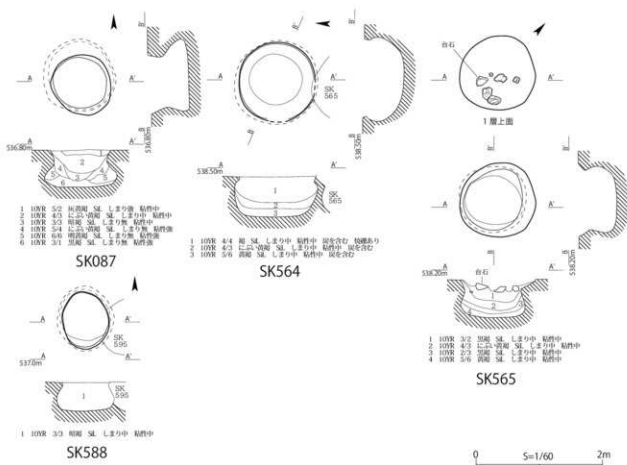


図70 袋状土坑

6 落とし穴 (図71、写真図版28～29)

SK292、SK438、SK676、SK707の4基が該当する。

①特徴 平面長方形かつ断面箱形に深く掘られた大型の土坑であり、かつ底部に数か所の小ピットを具える。SK292とSK438は平面・断面の形態が類似しており、いずれも上部が斜めに落ち込んでから垂直に近い急な角度で掘り込まれている。対してSK676とSK707は壁の角度が比較的緩やかである。SK707は攪乱と誤認したため土層堆積状況の把握ができなかったが、他はいずれも自然に埋没していることが土層断面からわかる。底部の小ピットは逆茂木の跡とみられ、いずれも直接底部に突き刺すか、ごく細い掘削具で掘った後に底部に突き立てたと考えられる。逆茂木のピットの数や配置には各落とし穴で差があり、SK292はほぼ一直線に6か所、SK707はL字状に4か所、SK438とSK707は底部の片側に寄った位置にそれぞれ3か所・4か所のピット穿たれている。なお、SK707の底部直上には棒状の炭化物がわずかに残っており、逆茂木の可能性がある。4基の位置はいずれも当遺跡の中心たる丘陵の頂部に位置しつつ、やや段丘崖寄りである。SK292とSK438は約9mとやや近い位置関係にあり、方向についてもそれぞれ長辺を土曾川の段丘崖を向けて構築されていることから、崖とは逆方向からの追込み掘を想定して落とし穴を設けたことも想定できよう。

②遺物・構築時期 各落とし穴の覆土中からの出土遺物は埋没過程で流れ込んだもので、構築時期を特定できない。SK707について、底部直上で検出された炭化物(樹木)を放射性炭素年代測定にかけたところ、暦年較正後で5446～5145calBPという値が示された。この結果から、少なくともSK707の構築時期は縄文時代前期末から中期初頭とみられる。他の落とし穴については断定できないが、川路大明神原遺跡(長野県埋蔵文化財センター 2010)など市内遺跡における落とし穴の分布状況からしても単独で存在したとは考え難いため、同時に複数の落とし穴が存在したと推測する。なお、対象試料の樹種同定結果はナシ亜科とされ、当遺跡の自然環境下で採取可能なものである。

7 立石 (図72、写真図版29)

SK148の1基のみである。残存長径87cm(推定長径105cm)、残存短径75cm(推定幅87cm)、深さ40cmの楕円形の土坑である。一部を土坑SK146に切られる。底部中央を直径24cmの円形に掘り下げ、長さ25cm、幅12cmの長方形に近い花崗岩礫の下部3分の1ほどを埋めて立てる。立石は平坦な面を北東方向に向け、南側に僅かに傾いて立つ。覆土は1層だが土質は均一で人為的に埋められた形跡はなく、自然に埋没したとみられる。出土遺物に押型土土器(土53・54)があるが、混入の可能性もあるため構築時期は不明である。

8 溝 (図72)

溝とした遺構はSD094の1条のみである。長さ4.98m、最大幅1.3mの直線的な溝で、縄文早期の集石SS130の上部をかすめる。覆土は粘質の土で、水が流れた痕跡は全く認められない。遺物は石核(石44)のほか、弥生土器片や磨製石礫の未成品(石191)などが含まれるため、構築時期は弥生時代の可能性があるが、用途は不明である。

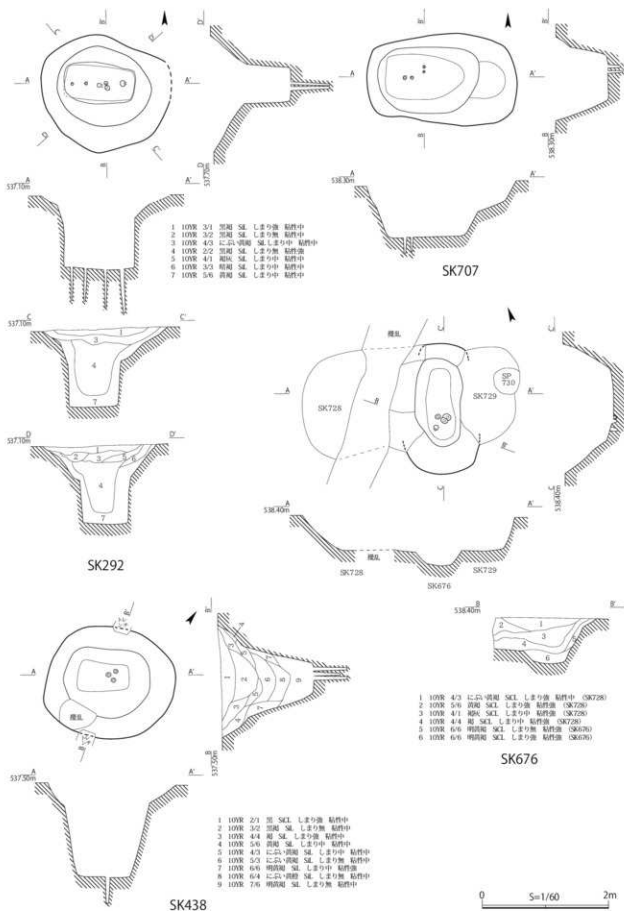


図71 落し穴

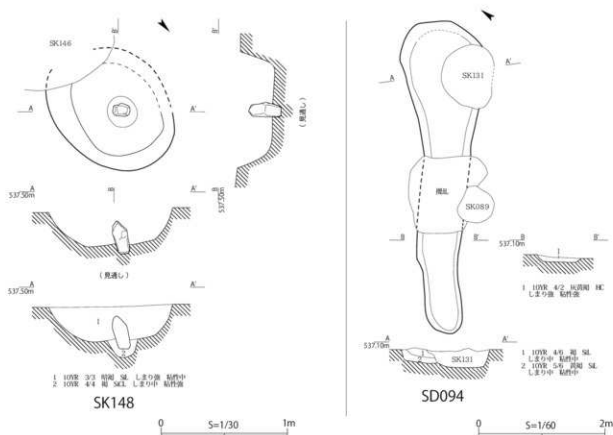


図72 立石・溝

9 ピット

ピットは総数124基を数える。それらのうち、炭化物（穀類等）を伴うピットについて個別に詳述する。全ピットの詳細については表10(p104)にまとめた。

(1) 炭化穀類等を伴うピット

SP357、SP678、SP693、SP321の4基がある。時期はいずれも弥生時代である。位置関係として、SP321とSP357、SP678とSP693がそれぞれ数mの距離に近接する。

詳細については表1(p89)に示した。また、SP357、SP678、SP321の出土炭化物に対して実施した自然科学分析については付章「黒田大明神原B遺跡出土炭化物の自然科学分析」に分析の結果と考察とを記載している。

SP357 (図73、写真図版30)

概観：円形のピットで、単独で存在する。上部は直径70cm、深さ15cmと浅く円形に広がり、その中心からやや北東にずれる箇所が深さ52cmまで柱状に深掘りされる。ピット内部の覆土は複雑で、やや上位の5層に最も多くの炭化物が含まれるが、他の層にも少量含まれる。これらの状況から、土器片と炭化物を含む層はピット内に一括埋納されたものとみられる。なお、本遺構は単独のピットとして把握したが、底部は硬化しており、埋納行為の前の段階では柱穴としての利用も考えられる。仮にそうであれば、上部の浅く広がる部分は柱を抜き取る際の副次的な土坑（抜き取り痕）の可能

性も捨てきれない。

炭化物：イネ穎果、ママ種子、クリ子葉、樹木がある。樹木は樹種同定により、ヒノキと確認された。遺物：弥生土器の口縁部（土314）の一部が炭化物に混じって出土した。

時期：炭化イネと炭化材（樹木）について、それぞれ放射性炭素年代測定を行った。イネは暦年較正後で1929～1747calBP、樹木は2114～1949calBPの値が出ている。樹木は古木効果により他の炭化物よりもやや古い年代値となる傾向があるため、本遺構の年代に近い結果はイネと考えられる。以上から本遺構の時期は弥生後期後葉である。

SP678（図73、写真図版30）

概観：長径110cm、残存短径63cm、深さ56cmの浅く掘られた土坑で、単独で存在する。北西側の一部が攪乱に切られる。破砕された土器片が検出面付近のレベルで出土した。破片は3～4枚ほどを積み重ねている。土器を取り上げると、その下に炭化物が集中する。炭化物は底部付近ではほとんどみられない。土器及び炭化物は一括して埋納されたものである。なお、底部にわずかに硬化した箇所が認められるため、柱穴として使用された可能性がある。

炭化物：炭化材（樹木）、クリ子葉が1点出土した。また、炭化材は樹種同定の結果クリと判明した。遺物：弥生土器（甕・壺か）の胴部片が少なくとも4個体分出土したがいずれも細片で全体を復元しえない。そのうち1点（土315）は甕の口縁部で、櫛描文が施される。

時期：土器は弥生後期の所産である。クリとされた炭化材の放射性炭素年代測定結果は、暦年較正後で2048～1891calBPの値であった。古木効果を考慮する必要があるが、本遺構を後期後葉とみる。

SP693（図73、写真図版30）

概観：直径46cm、深さ39cmのピットで、単独で存在する。覆土中に多量の破砕土器を伴う。土器片は10枚以上を積み重ねて埋納される。土器や微量の炭を含む1層の下にやや硬化した粘質土が敷かれる。その下からも土器片が若干出土していることや、焼土をわずかに含むことから、硬化層は柱の当たりとは考えにくい。

遺物：土器片の密集箇所の最上段に縄文中期の土器の口縁部（土320）が含まれる。他の弥生土器片に包まれるような出土状況からして、時期が異なる土器片が共伴すると判断したが、攪乱の影響で混入した可能性も捨てきれない。炭化物に伴う土器は胴部が張る土器（土316）の破片が多くを占めるが、全体の一部分である。このほか、櫛描波状文を施す壺の頸部（土317・318）と甕の底部（土319）が含まれる。

時期：出土した弥生土器より後期とみる

SP321（図77、写真図版30）

概観：直径25cm、残存する深さが41cmのピットで、単独で存在する。本来はSK286を同遺構の掘削中に把握したため上部は失われた。内部から若干の弥生土器片とともに炭化イネ穎果が出土した。また、炭化樹木も含まれており、樹種同定によりヒノキと確認された。土器片とともに炭化穀類を埋納する点でSP357、SK678、SP693と共通しており、これらと性格を同じくする特殊なピットと考えられる。

時期：炭化イネの放射性炭素年代測定により、暦年較正後で1984～1830calBPの値が出ている。よって時期は後期後葉である。

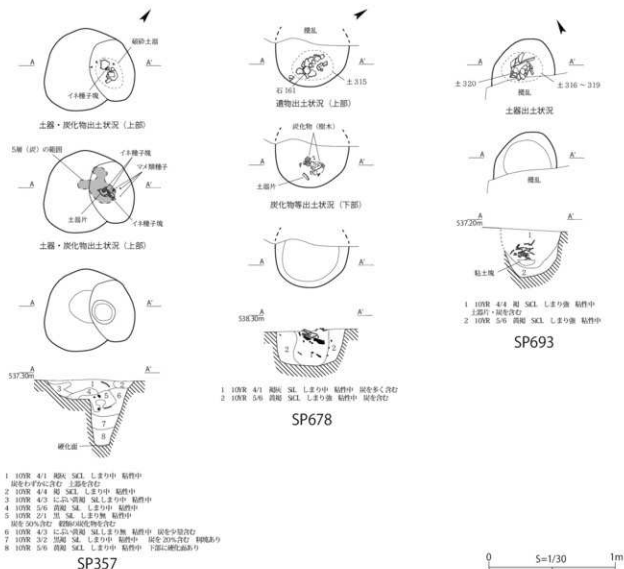


図 73 炭化穀類等を埋納するピット

表 1 炭化穀類等一覧

遺構名	炭化物	法量		試料No.	C14年代測定試料		遺物	
		重量(g)	個数		暦年較正值	種別	図番号	
SP357	イネ・穎粟	70	—	R5-K-3	1929~1747calBP	存生土器 (器種不明の口縁部)	314	
	マメ類・種子	—	751	R5-K-4				
	クリ・子葉	—	2	R5-K-5				
	樹木(ヒノキ)	53	—	R5-K-6	2114~1949calBP			
SP678	クリ・子葉	—	1	R5-S-4		存生土器 (壺)	315	
	樹木(クリ)	172	—	R5-S-3	2048~1891calBP			
SP693	不明(樹木?)	微量	—			存生土器 (大型土器、壺、甕) 縄文土器 (中期五領ヶ台式並行 他)	316	
							317	
							318	
							319	
							320	
SP321	イネ・穎粟	8	—	R5-K-1	1984~1830calBP	存生土器 (器種不明、甕か)		
	樹木(ヒノキ)	微量	—	R5-K-2				

(2) その他の土坑・ピット (図75～79、表10)

その他ピットは調査区を分割した個別図に示した。これらにはごく小型の土坑も含まれるが、掘り込みが深く柱穴状を呈するものについては、底部に柱の当たりとみられる硬化面が認められるものがある。また、一定間隔で直線的に並ぶピット群 (SP321-SP322-SP323 など) があり、何らかの建物を構成していた可能性があるが、最終的に建物跡として把握しえたものはない。遺物の出土状況で特筆すべきものとして、SP550 からミニチュア土器 (土 336) と石製紡錘車の破片 (石 198) が出土しているほか、SK694、SK043 などで弥生土器片が出土しているが、総じて遺物の量は少ない。また、SP229、SP398 は先に述べた炭化穀類等を埋納する 321、357、678、693 の各 SP と同様に、内部に土器片を埋め込む事例が確認されたピットである。当遺跡における穀類や土器、石製品などを埋納するピットは単なる柱穴ではなく、何らかの用途に供された特殊なピット群として特筆される。その他のピットで時期が特定できるものは、縄文中期の北裏C式土器が出土した SP559 が挙げられる。

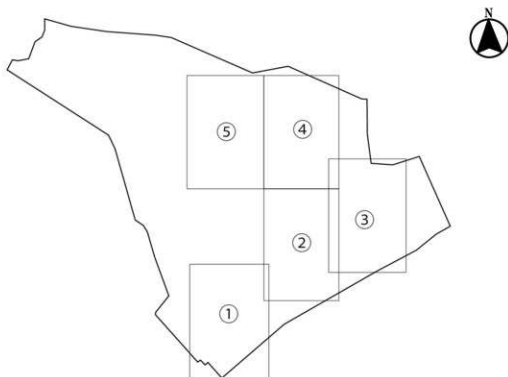


図 74 ビット分布図区割り

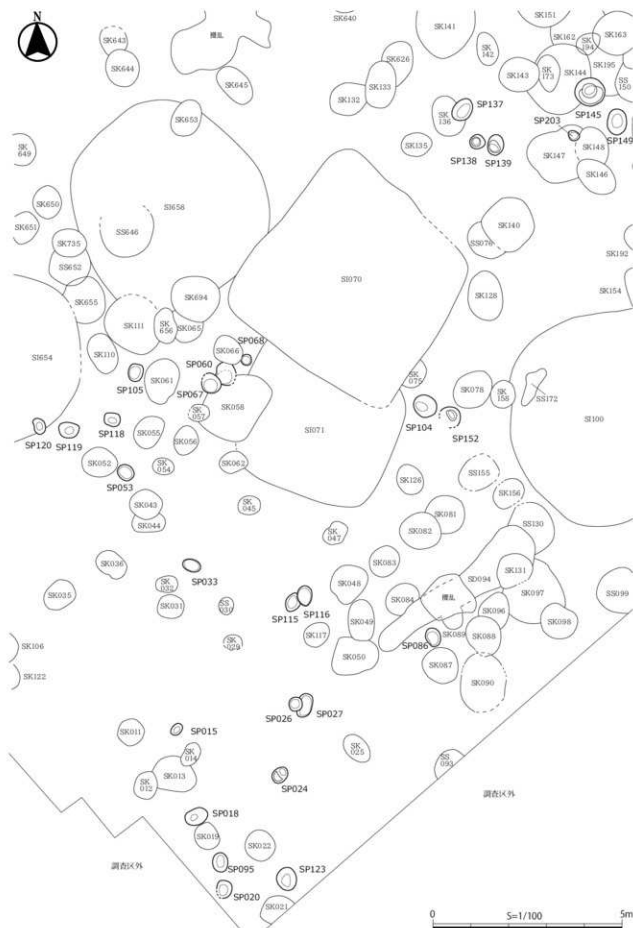


図75 ビット分布図①

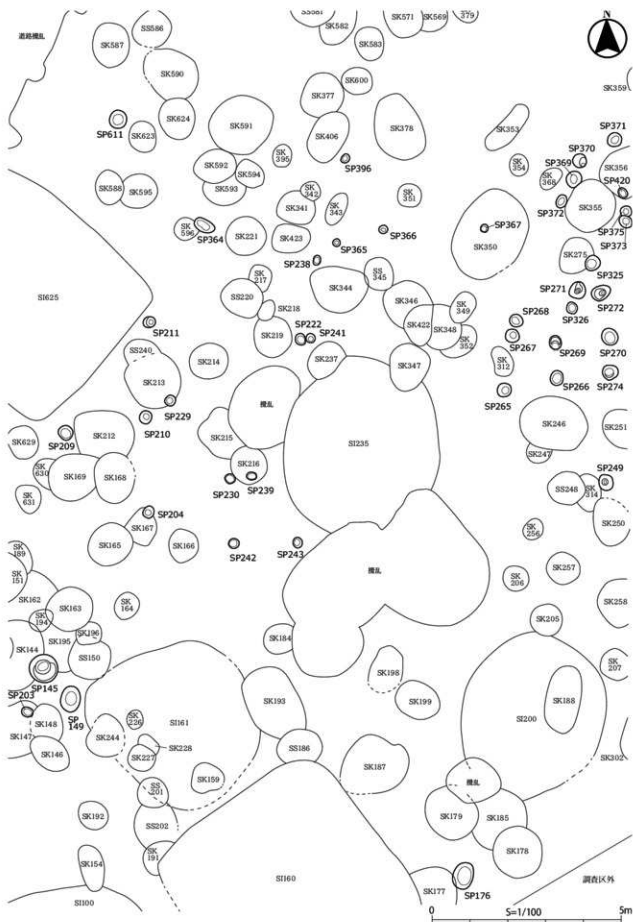


図 76 ビット分布図②

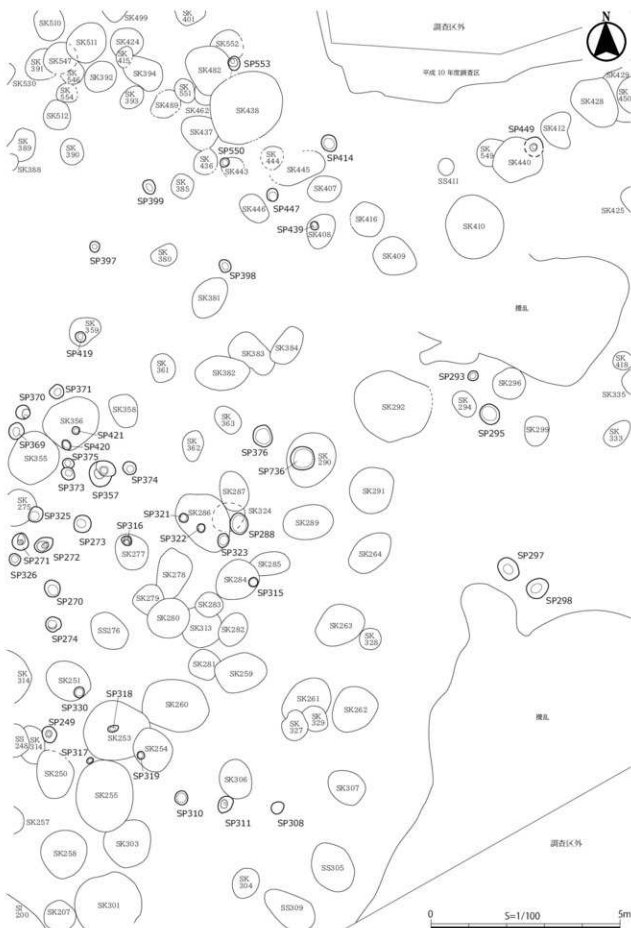


図77 ビット分布図③



図 78 ビット分布図④

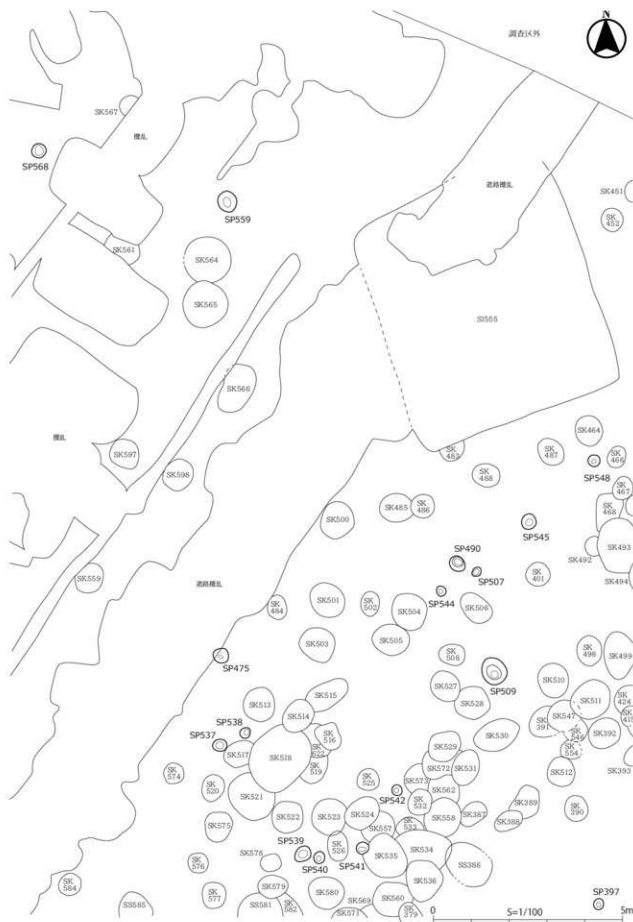


図 79 ビット分布図⑤

表2 土坑観察表(1)

遺構No.	経緯 N/E	埋深 m	検出位置 (グリッド)	出土遺物			図番号	備考
				土器・土製品	図番号	石器		
SK 004	142	112	15	CG 48	土器片(縄文)	高尾形割片		
SK 005	54	47	8	CF 48	土器片(縄文)			
SK 008	141	104	15	CF 48	土器片(縄文)	高尾形割片		
SK 011	68	67	18	CD 00				
SK 012	74	80	8	CD 08		高尾形割片		
SK 013	118	95	4	CD 08				
SK 014	68	44	4	CD 08				
SK 019	70	68	37	CG 06		高尾形割片		
SK 021	82	147	83	CB 02	弥生文化土器	高尾形割片		
SK 022	80	77	25	CG 02		高尾形割片・鏡片 笠石		
SK 023	85	38	18	CG 03				
SK 029	53	40	3	CE 02		高尾形割片		
SK 031	70	63	32	CF 01	土器片(縄文)			
SK 032	56	44	22	CF 01				
SK 035	88	70	6	CF 49	土器片(縄文)	石鏡・高尾形割片		
SK 036	86	61	4	CF 00	土器片(弥生 中層)	高尾形割片		
SK 040	83	78	18	CG 00	土器片(縄文・ 弥生)	高尾形割片・磨石		
SK 044	88	140	20	CG 00	土器片(縄文)	高尾形割片		
SK 045	59	30	16	CG 02	土器片(縄文)	高尾形割片・磨石		
SK 047	68	32	13	CG 03	土器片(縄文)	銅片		
SK 048	100	86	41	CF 03	土器片(縄文)	磨石	158	
SK 049	108	70	16	CF 03		高尾形割片		
SK 050	124	98	12	CE 02	弥生文化土器 土器片(縄文)	55 高尾形割片		
SK 051	96	(72)	30	CH 48	土器片(縄文)			
SK 052	82	79	12	CH 00	土器片(縄文)			
SK 054	56	44	16	CH 08	土器片(縄文)	高尾形割片		継続土 坑
SK 055	90	71	19	CH 08				
SK 056	80	65	21	CH 01				
SK 057	140	46	20	CH 01				
SK 058	188	148	24	CH 01	土器片(縄文・ 弥生)	石鏡・高尾形割片 磨石・磨石 鏡片・笠石		
SK 061	112	91	23	CG 01	土器片(縄文)	高尾形割片		
SK 062	76	54	28	CH 02		磨石	157	
SK 065	94	88	28	CG 01	土器片(縄文)	高尾形割片・鏡片 鏡片・笠石		
SK 066	81	70	19	CG 01	土器片(縄文)	高尾形割片		継続土 坑
SK 075	79	140	32	CG 04				
SK 078	114	82	12	CG 08	土器片(縄文)	高尾形割片		
SK 081	194	182	16	CG 04	土器片(縄文)	高尾形割片		
SK 082	108	100	18	CG 04	土器片(縄文)			
SK 083	86	72	11	CF 06	土器片(縄文)	高尾形割片		

遺構No.	経緯 N/E	埋深 m	検出位置 (グリッド)	出土遺物			図番号	備考
				土器・土製品	図番号	石器		
SK 084	93	161	11	CF 04	土器片(縄文)	高尾形割片・鏡片 笠石		
SK 087	115	120	60	CE 04	弥生文化土器 土器片(縄文)	162 石鏡・高尾形割片 鏡片・鏡片・笠石 磨石		弥生土坑
SK 088	104	94	20	CE 05	土器片(縄文)	高尾形割片・鏡片 笠石		
SK 089	50	57	8	CF 05		磨石		
SK 090	141	138	17	CE 05	弥生文化土器 土器片(縄文)	高尾形割片		継続土 坑
SK 096	82	174	20	CF 05	弥生文化土器 土器片(縄文)	47 打製石斧		
SK 097	173	162	14	CF 05	土器片(縄文)	高尾形割片・打製 石斧		
SK 098	100	86	27	CF 06	土器片(縄文)	高尾形割片		
SK 106	1103	90	8	CE 48				
SK 110	108	74	16	CG 00		鏡片・笠石		
SK 111	163	136	22	CG 00	弥生文化土器 鏡片・中層(半 打製縄文)	高尾形割片・鏡片 笠石・磨石		
SK 117	72	61	7	CE 03	土器片(弥生 中層)	石鏡・磨石	56	
SK 122	84	71	12	CE 48	土器片(縄文)	石鏡		
SK 126	82	88	15	CH 04		鏡片・笠石		
SK 128	131	91	18	CG 05	土器片(縄文)	石鏡・鏡片 高尾形割片	27	
SK 131	100	78	30	CG 05		高尾形割片・磨石 笠石	158	
SK 132	104	88	14	CG 03		高尾形割片		
SK 133	125	80	27	CG 04	土器片(縄文)	高尾形割片		
SK 135	82	81	15	CG 04	土器片(縄文)	高尾形割片		
SK 136	110	182	17	CG 04	土器片(弥生 中層)			
SK 140	131	129	22	CG 05	土器片(縄文)			
SK 141	183	187	18	CG 04	弥生文化土器 土器片(縄文・ 弥生)	石鏡・高尾形割片 磨石	38 39 40 41 42	
SK 142	89	57	17	CG 05				
SK 143	103	82	14	CG 05	土器片(縄文)			
SK 144	187	1137	20	CG 08		高尾形割片・磨石		
SK 146	117	80	28	CG 06	弥生文化土器 土器片(縄文)	高尾形割片・フー ン割片		
SK 147	165	151	30	CG 06	弥生文化土器 土器片(縄文)	48 121 高尾形割片		
SK 148	187	173	40	CG 06	弥生文化土器 土器片(縄文)	53 54 鏡片・笠石	113	笠石 内側は 弥生 弥生土坑 跡
SK 151	155	142	22	CG 08	弥生文化土器 土器片(縄文)	43 高尾形割片		
SK 153	127	95	14	CG 05		高尾形割片		
SK 154	124	82	40	CG 07	縄文中層(半 打製縄文)	高尾形割片		
SK 156	81	66	32	CG 05	弥生文化土器 土器片(縄文)	弥生文化土器 土器片(縄文)		
SK 158	74	86	22	CG 05				
SK 159	180	170	49	CG 08	弥生文化土器 土器片(縄文)	55 56 57 58 石鏡・高尾形割片 土器片(縄文) フー→割片・打製 石斧・磨石		
SK 162	158	150	20	CG 06	弥生文化土器 土器片(縄文)	高尾形割片		継続土 坑
SK 163	124	112	21	CG 07	土器片(縄文)	高尾形割片		
SK 164	73	83	23	CG 04	弥生文化土器 土器片(縄文)	163 高尾形割片・磨石 石鏡・鏡片・笠石		

表3 土坑観察表(2)

通観No.	奥行き cm	幅 cm	奥行き cm	奥行き cm	出土遺物				備考	
					土器	土製品	石器	図録番号		
SK 185	118	111	38	CM 07	原水文土器 土器片(赤土)	151				
SK 186	80	80	40	CM 08	土器片(縄文)					
SK 187	88	361	23	OG 08	土器片(縄文)	高塚遺物片 磨製 石斧	78			
SK 188	134	97	38	OG 07	土器片(縄文)	高塚遺物片				
SK 189	127	123	34	OG 07	押出文土器 土器片(縄文)	60 高塚遺物片 縄文 型石器				
SK 172	97	82	34	CM 08	土器片(縄文)	高塚遺物片				
SK 177	134	101	20	CJ 12						
SK 178	137	134	52	CJ 13	押出文土器 土器片(縄文)	68 高塚遺物片 縄文 型石器				
SK 179	145	143	38	OK 12	土器片(縄文)					
SK 184	75	78	38	CM 10	赤土系土器 土器片(縄文)	183 磨製式成跡 縄文中期(半 行次縄文) 磨 石斧	259			
SK 185	159	112	22	CJ 12	押出文土器 土器片(縄文)	62 118	高塚遺物片			
SK 187	177	158	18	OK 11	土器片(縄文)	高塚遺物片 縄文 型石器				
SK 188	78	92	34	CL 13						
SK 189	88	78	18	CM 06	押出文土器 土器片(縄文)	内蔵 削片 高塚遺 物	27			磨製式 石
SK 191	85	301	22	CJ 08	押出文土器 土器片(縄文)	63 高塚遺物片				
SK 192	84	70	24	OK 07						
SK 193	201	138	28	CL 09	土器片(縄文)	高塚遺物片 縄文 型石器 磨石				
SK 194	88	52	20	CM 06		高塚遺物片 行製 石斧				
SK 195	111(10)	76	12	CM 06	押出文土器 土器片(縄文)	68 高塚遺物片 行製 石斧				
SK 196	71	58	28	CM 07	土器片(縄文)	高塚遺物片				
SK 198	128	99	18	CM 11						
SK 199	122	88	28	CL 11	土器片(縄文)	高塚遺物片 縄文 型石器				
SK 208	85	84	23	CM 13		縄文中期後葉 226	高塚遺物片			
SK 208	72	86	18	CM 13	押出文土器 土器片(縄文)	68 高塚遺物片				
SK 207	84	80	22	CM 14	土器片(縄文)	石器 高塚遺物片				
SK 208	105	81	37	CL 15	押出文土器 土器片(縄文)	64 高塚遺物片 行製 石斧				
SK 212	156	128	13	CP 07						
SK 213	147	140	17	OG 08	土器片(縄文)					
SK 214	103	95	20	OG 08	押出文土器 土器片(縄文)	68 高塚遺物片				
SK 215	111(8)	110	24	CP 09	土器片(押出 赤土)					
SK 216	98	98	12	OG 09						
SK 217	108	108	25	CR 09	土器片(縄文)					
SK 218	38	49	18	OG 08	赤土系土器 土器片(縄文)	161				
SK 219	109	100	11	OG 08	土器片(縄文)					
SK 221	108	108	28	CS 09	土器片(縄文)	磨石				
SK 226	138	461	29	CL 08		縄文中期(半 行次縄文) 232 高塚遺物片				
SK 227	186	172	37	OK 08	中葉式 赤土系土器	233 234 高塚遺物片 磨製 石斧 高塚遺物 縄文 型石器	84			
SK 228	83	281	28	CL 08		縄文中期(半 行次縄文) 235 高塚遺物片				

通観No.	奥行き cm	幅 cm	奥行き cm	奥行き cm	出土遺物				備考	
					土器	土製品	石器	図録番号		
SK 237	168	178	24	CG 10	土器片(縄文)					30 磨製式 石
SK 244	120	91	30	CL 07	土器片(縄文・ 赤土)	高塚遺物片 縄文 型石器 磨製石 磨製石				
SK 245	150	113	43	CL 14	押出文土器 縄文中期(半 行次縄文)	117 118 227 228 高塚遺物片 磨製 石	228			SK241と 土器片 同書
SK 248	184	140	17	CP 13	土器片(縄文)	高塚遺物片				
SK 247	85	44	23	CP 13						
SK 250	130	113	18	CG 14						
SK 251	121	100	14	CP 14	土器片(縄文)	高塚遺物片				
SK 253	180	158	38	CG 15	土器片(縄文)					
SK 254	120	100	21	CG 15	赤土系土器 土器片(縄文)					
SK 255	180	180	17	CG 15	土器片(縄文)					
SK 256	38	48	14	CG 13						
SK 257	80	85	18	CM 13	土器片(縄文)	高塚遺物片				
SK 258	128	123	30	CM 14	土器片(縄文)	高塚遺物片 磨製 石				
SK 259	134	99	18	CP 16						
SK 260	178	138	25	CP 16	土器片(縄文)	高塚遺物片				
SK 261	142	106	18	CP 17	土器片(縄文)	高塚遺物片				
SK 262	128	110	31	CP 18	土器片(縄文)	高塚遺物片				
SK 263	138	104	22	CP 18	土器片(縄文)					
SK 264	131	85	14	CG 19	土器片(縄文)	高塚遺物片				
SK 275	168	88	12	CR 14	土器片(縄文)					
SK 277	88	88	32	CR 15		縄文時代 物				
SK 278	131	80	35	CG 15	土器片(縄文)	高塚遺物片				
SK 279	37	80	13	CG 15						
SK 280	114	105	24	CG 18	赤土系土器 土器片(縄文)					
SK 281	78	75	21	CP 18	縄文中期(半 行次縄文)	237 高塚遺物片 チャー コ製片				SK240と 土器片 同書
SK 282	90	71	22	CG 18	土器片(縄文)					
SK 283	78	68	24	CG 18	土器片(縄文)					
SK 284	122	101	19	CG 18		高塚遺物片				
SK 285	104	81	15	CG 17	土器片(縄文)					
SK 286	174	127	17	CR 18		縄文時代石器				
SK 287	168	75	18	CR 18						
SK 288	134	81	14	CR 17						
SK 290	148	128	22	CS 17	土器片(縄文)					
SK 291	125	114	27	CR 18						
SK 292	208	187	124	CS 18	赤土系土器 土器片(縄文)	147 石器				掘込穴
SK 294	72	54	18	CT 19		土器片(縄文)				
SK 296	88	81	19	CT 20	押出文土器 土器片(縄文)	122				
SK 299	78	64	28	CS 21	磨石	260				

表4 土坑観察表(3)

遺構No.	横径 cm	縦径 cm	深さ cm	検出位置 (グリッド)	出土遺物			
					土器・土製品	銅器	石器	陶器号
SK 301	176	182	40	CM 15	押型文土器 土器片(縄文 中層~中)	99	石製削片 高塚 削片 磨製石斧 磨 製石刀 磨製石 磨 製石 磁石 114 115 132 148	
SK 302	150	112	43	CL 14	押型文土器 縄文時代 他			
SK 303	128	122	17	CR 13				
SK 304	83	88	18	CM 17				
SK 306	97	88	26	CO 17	土器片(縄文)			
SK 307	104	83	15	CR 18	土器片(縄文)	高塚削片		
SK 312	83	52	23	CG 13		高塚削片		
SK 313	107	104	26	CG 18			33	
SK 314	101	321	16	CO 14	押型文土器 土器片(縄文)	70	高塚削片	
SK 320	52	52	30	CM 15				
SK 324	431	440	38	CR 18	土器片(縄文)			
SK 327	95	70	47	CO 17	土器片(縄文)	チャート削片		
SK 328	58	37	16	CP 18	土器片(縄文)			
SK 329	73	821	26	CO 18				
SK 331	83	54	9	CT 23				
SK 332	113	83	13	CS 22	土器片(縄文)	磨石		
SK 333	84	53	16	CS 22				
SK 334	106	333	12	CS 22	土器片(縄文 中層)			
SK 335	86	56	26	CT 22				
SK 336	81	73	11	CR 23	土器片(縄文 中層)			
SK 337	82	88	18	CT 24	土器片(縄文)			
SK 338	133	191	16	CT 24	土器片(縄文)	打製石斧	82	
SK 339	154	103	17	CG 22	土器片(縄文)	石器 高塚削片 縄文型石斧		
SK 340	54	46	15	CG 22	土器片(縄文)			
SK 341	781	100	28	CS 10	小笠土器 丸底山式	229 230	石器	17
SK 342	54	48	22	CS 10	土器片(縄文)			
SK 343	92	48	30	CS 10				
SK 344	154	124	15	CR 10	土器片(縄文)			
SK 346	120	376	22	CG 11	土器片(縄文 中層)	高塚削片 打製 石斧		
SK 347	125	107	25	CG 11	土器片(縄文)			
SK 348	106	833	21	CG 12	磨製文系土器 土器片(縄文)	90 92	高塚削片 打製 石斧 磨製石斧	
SK 349	84	81	15	CG 12				
SK 350	240	181	16	CR 12	押型文土器	71 72 73 81	縄文型石斧	118 117 118
SK 351	83	81	21	CS 11				
SK 352	106	333	21	CG 12	土器片(縄文)	削片 磨製石斧	78	
SK 353	153	35	24	CT 13	土器片(縄文 中層)			
SK 354	58	52	17	CS 13	土器片(縄文)			
SK 355	138	138	17	CS 14	縄文時代	261		

遺構No.	横径 cm	縦径 cm	深さ cm	検出位置 (グリッド)	出土遺物			
					土器・土製品	銅器 号	石器	陶器号
SK 356	150	126	14	CS 14	土器片(縄文)			
SK 358	88	73	24	CS 15	押型文土器	74 75		166
SK 359	87	70	20	CT 14				
SK 361	78	85	18	CT 15	土器片(縄文)			
SK 362	82	56	22	CS 16	土器片(磨製 中層)			
SK 363	81	57	16	CS 16				
SK 368	49	48	14	CS 13				
SK 377	122	114	18	CT 10	土器片(縄文)			
SK 378	178	128	18	CT 11	土器片(縄文)	縄文型石斧		
SK 379	82	381	14	CG 12				
SK 380	71	54	18	CG 15				
SK 381	122	83	14	CG 18	押型文土器 土器片(縄文)	57		
SK 382	142	90	14	CT 18	土器片(磨製 中層)			
SK 383	130	843	12	CT 17				
SK 384	107	88	14	CT 17	押型文土器 土器片(縄文)	84		
SK 385	66	891	24	CV 16				
SK 387	78	55	28	CG 13	土器片(磨製)			
SK 388	78	51	18	CG 13				
SK 389	(76)	87	20	CG 13	土器片(縄文)			
SK 390	89	82	23	CG 14				
SK 391	86	703	21	CR 14	土器片(縄文)			
SK 392	80	77	19	CR 15	土器片(縄文)			
SK 393	72	52	12	CR 15	磨製文土器 土器片(縄文)		石製品(磨製)	34
SK 394	(82)	80	20	CR 15	土器片(縄文)	262	石核 磨石	SK415上 土器片 の検出
SK 395	59	48	26	CS 10	磨製文系土器			
SK 401	104	80	15	CV 16				
SK 402	82	72	28	DA 18	土器片(縄文)			
SK 403	82	48	16	DA 17				
SK 404	54	50	16	CV 17				
SK 405	84	84	13	CV 17	縄文時代	263		
SK 406	142	92	14	CT 10	磨製文系土器	167		
SK 407	92	72	34	CV 18	押型文土器	123		
SK 408	94	74	34	CV 18	磨製文土器	145		
SK 409	120	102	18	CV 19	土器片(縄文)			
SK 410	169	154	18	CV 19	板文式 縄文中層(半 行淡緑文)	265 266	磨石	
SK 412	86	87	10	CG 21				
SK 413	82	85	18	CG 22	土器片(縄文)			
SK 415	56	423	35	CR 15	土器片(縄文)	262 264		SK415上 土器片 検出
SK 416	85	90	17	CV 18				

表5 土坑観察表(4)

観測No.	経緯 高径 cm	深径 cm	深径 cm	観測位置 (グリッド)	出土遺物			
					土器 土製品	石器	図章号	備考
SK 418	32	49	18	CT 22	土器片(縄文)			
SK 422	105	72	37	CG 11	土器片(縄文)			
SK 423	190	100	63	CR 10	土器片(縄文)			
SK 424	88	72	38	CK 15	土器片(縄文)			
SK 425	116	81	20	CV 22	土器片(縄文)	打製石斧・縄文型石鏃	43	
SK 426	94	59	17	CW 22	土器片(縄文)			
SK 427	188	158	20	CW 22	土器片(縄文)			
SK 428	144	110	11	CX 21	土器片(縄文)			
SK 429	(134)	144	43	CX 22	土器片(縄文)			
SK 430	116	94	28	CX 23	磨氷文土器 焼成粘土塊	330		
SK 431	90	61	37	CU 23	土器片(縄文 中期)			
SK 432	97	64	18	CU 23	土器片(縄文)			
SK 433	84	50	21	CU 23	土器片(縄文)			
SK 434	50	43	14	CV 23	磨氷縄文 物			
SK 435	50	48	28	CV 23	土器片(縄文)			
SK 436	66	65	12	CV 16	縄文土器 土器片(縄文)			
SK 437	101	68	16	CW 16	土器片(縄文)			
SK 438	202	178	148	CX 17	磨氷文土器 縄文土器 土器片(縄文)	124	縄文型石鏃	掘り穴
SK 440	(122)	118	43	CW 20	土器片(縄文 中期)	287		
SK 441	74	46	29	CW 22	土器片(縄文)			
SK 442	89	38	17	GW 23	土器片(縄文)			
SK 443	59	32	24	CW 17	土器片(前期 中期)			
SK 444	36	30	37	CW 17	土器片(縄文)			
SK 445	(130)	34	14	CW 17	天満山式 土器片(縄文)			
SK 446	84	61	11	CV 17	土器片(縄文)			
SK 448	36	126	40	CX 22	土器片(縄文)	石器 縄文型石鏃		
SK 450	32	78	43	CX 22	土器片(縄文)			
SK 451	65	57	11	DF 15	縄文中期(早 行)土器片 土器片(縄文)	268		
SK 452	62	60	18	DF 15	磨氷文土器 土器片(縄文)	148		
SK 454	62	76	14	DE 15	土器片(縄文 中期)		石器	
SK 455	106	102	8	DE 16	土器片(縄文)			
SK 457	78	76	14	DE 15	土器片(縄文)			
SK 458	(78)	(34)	18	DC 17	土器片(縄文)	銅片		
SK 462	(66)	(47)	38	CX 16	縄文土器 土器片(縄文)	123 126		
SK 464	61	73	13	DC 14	土器片(縄文)			
SK 465	58	48	24	DD 16	土器片(縄文)			
SK 466	59	47	17	DC 15	土器片(縄文)			
SK 467	62	63	11	DD 15	土器片(縄文)			
SK 468	(76)	70	18	DD 15	土器片(縄文)			

観測No.	経緯 高径 cm	深径 cm	深径 cm	観測位置 (グリッド)	出土遺物			
					土器 土製品	石器	図章号	備考
SK 469	53	51	13	DD 15	土器片(縄文)			
SK 470	100	78	14	DD 15	土器片(縄文)			
SK 471	80	(51)	12	DD 15	土器片(縄文)			
SK 472	66	68	12	DD 16	土器片(縄文)			
SK 473	90	84	16	DC 16	土器片(縄文)	銅片		
SK 474	92	68	16	DD 16	土器片(縄文)			
SK 477	77	(44)	19	DD 17	土器片(縄文)			
SK 478	76	60	32	DA 16	土器片(縄文)			
SK 479	70	62	14	DA 16	土器片(縄文)			
SK 480	83	62	17	DA 16	土器片(縄文)			
SK 481	67	51	14	CY 16	土器片(縄文)			
SK 482	130	120	32	CX 18	磨氷文土器 土器片(縄文)			
SK 483	66	40	8	DC 13	土器片(縄文)			
SK 484	62	52	35	DA 10	土器片(縄文)			
SK 485	(32)	78	38	DD 12	土器片(縄文)			
SK 486	64	64	24	DD 12	土器片(縄文)			
SK 487	70	64	21	DC 14	土器片(縄文)			
SK 488	75	63	28	DD 12	土器片(縄文)			
SK 489	(82)	(64)	17	CW 16	土器片(縄文)			
SK 491	65	62	18	DA 14	土器片(縄文)			
SK 492	53	(32)	11	DA 14	土器片(縄文)			
SK 493	148	110	12	DA 15	土器片(縄文)		磨石	
SK 494	117	92	12	DA 15	土器片(縄文)			
SK 495	81	(48)	27	DA 15	土器片(縄文)			
SK 496	85	65	29	CY 16	土器片(縄文)			
SK 497	73	62	20	CY 15	土器片(縄文)			
SK 498	80	66	14	CY 14	土器片(縄文)			
SK 499	128	87	20	CY 15	土器片(縄文)			
SK 500	100	90	18	DD 11	土器片(縄文)	縄文型石鏃		
SK 501	92	90	15	DA 11	土器片(縄文)			
SK 502	65	49	15	DA 11	土器片(縄文)			
SK 503	64	67	18	CY 11	土器片(縄文)			
SK 504	96	95	32	CY 12	土器片(縄文)	58	縄文土器 土器片(縄文)	
SK 505	100	83	18	CY 12	土器片(縄文)			
SK 506	94	64	18	CY 13	土器片(縄文)			
SK 508	72	56	16	CY 13	土器片(縄文)			
SK 510	91	79	82	CY 14	土器片(縄文) 焼成粘土塊 4%	銅片 縄文型石鏃		
SK 511	113	96	41	CX 14	縄文土器 縄文中期(早 行)土器片 土器片(縄文)	127 231	銅片 縄文型石鏃	118
SK 512	77	73	18	GW 14	土器片(縄文)			

表6 土坑観察表(5)

遺構No.	規模 長径 短径 深	構造 形状 等	出土位置 (グリッド)	出土遺物			
				土器・土製品 品番 号	石器	銅器号	備考
SK 313	91	84	14	CX 10			
SK 314	93	72	11	CX 11	土器片(陶器 不明)		
SK 315	114	87	12	CX 11	土器片(縄文 土器)		
SK 316	76	42	18	CX 11			
SK 317	174	88	7	CX 10	土器片(縄文 土器)		
SK 318	182	148	22	CX 10	土器片(縄文 土器)	横刃型石器	
SK 319	863	323	34	CW 11			
SK 320	72	39	25	CW 09	奈良文系土器	148	
SK 321	123	100	15	CW 10	土器片(陶器 不明)	横刃型石器	
SK 322	88	84	44	CW 10	土器片(縄文 土器)	横刃型石器	
SK 323	98	88	14	CW 11			
SK 324	99	75	19	CW 11			
SK 325	40	38	15	CW 11	土器片(縄文 土器)	石鏃	133
SK 326	78	38	13	CV 11			
SK 327	80	78	14	CX 13			
SK 328	98	85	22	CX 13			
SK 329	84	80	18	CX 13			
SK 330	128	78	18	CX 13	土器片(縄文 土器)		
SK 331	98	70	13	CW 12			
SK 332	70	42	24	CW 12	土器片(縄文 土器)		
SK 333	74	338	28	CW 12			
SK 334	194	390	22	CV 12	土器片(縄文 土器)		
SK 335	121	102	16	CV 12	土器片(縄文 土器)		
SK 336	108	98	28	CV 12	土器片(縄文 土器)		
SK 346	82	589	23	CX 14			
SK 347	178	84	31	CX 14			
SK 349	843	882	53	CW 20			
SK 351	35	35	15	CW 18			
SK 352	40	30	13	CX 18	土器片(縄文 土器)	328	
SK 354	30	25	14	CX 14			
SK 357	69	55	22	CW 12	土器片(縄文 土器)	石鏃	134
SK 358	381	25	18	CW 12	奈良文系土器		
SK 360	35	30	48	CV 12			
SK 361	45	40	12	DE 08	押型文土器 土器片(縄文 土器)	128	
SK 362	65	45	23	CW 12	土器片(縄文 土器)		
SK 364	403	30	80	DE 09	奈良文系土器 土器片(縄文 土器)	144	横刃土 器
SK 365	45	40	80	DE 09	押型文土器 土器片(縄文 土器)	119 393	横刃土 器
SK 366	136	134	11	DD 10	土器片(縄文 土器)		
SK 367	58	333	9	DG 08		石鏃	

遺構No.	規模 長径 短径 深	構造 形状 等	出土位置 (グリッド)	出土遺物			
				土器・土製品 品番 号	石器	銅器号	備考
SK 368	30	25	20	CU 12	縄文中期(平 行文縄文) 土器片(陶器 不明)		
SK 371	85	55	19	CU 11	越前式渡船	238	
SK 372	201	25	31	CW 13	土器片(縄文 土器)		
SK 373	200	50	18	CW 13	土器片(陶器 不明)		
SK 374	55	50	38	CW 09	奈良文系土器 土器片(縄文 土器)		
SK 375	45	40	18	CW 09			
SK 376	85	45	28	CV 09			
SK 377	481	50	18	CV 08			
SK 378	45	40	8	CV 10			
SK 379	82	81	20	CV 10			
SK 380	98	88	18	CV 11			
SK 382	162	87	28	CU 10			横刃型石器
SK 383	89	76	22	CU 11			
SK 384	82	58	32	CV 07	縄文中期(平 行文縄文)	269	
SK 387	83	83	28	OU 07			
SK 388	102	91	44	CS 07	奈良文系土器 土器	159 160 164	横刃土 器
SK 389	83	83	28	DC 06	土器片(縄文 土器)		
SK 390	1482	133	18	CT 08	土器片(陶器 不明)		
SK 391	170	157	28	CT 08	縄文様式	270	
SK 392	114	89	14	CS 09	土器片(縄文 土器)		
SK 393	115	76	15	CS 09	奈良文系土器 奈良文系土器 土器片(縄文 土器)	169	
SK 394	82	84	18	CS 09			
SK 395	90	82	46	CS 08	土器片(縄文 土器)		
SK 396	86	81	18	CR 08	土器片(陶器 不明)		
SK 397	88	77	14	DC 06	土器片(縄文 土器)		
SK 398	85	77	27	DB 09	奈良文系土器 土器片(縄文 土器)		石鏃 横刃型石器
SK 399	85	89	12	DA 08	土器片(陶器 不明)		
SK 400	80	76	32	CT 11			
SK 401	94	74	14	DC 05	土器片(陶器 不明)		横刃型石器
SK 402	118	780	19	DC 05	押型文土器 土器片(縄文 土器)		銅片
SK 403	87	56	14	DC 06			
SK 404	81	75	11	DA 04	奈良文系土器 土器片(縄文 土器)		
SK 405	82	78	18	DA 05	押型文土器	129	
SK 406	81	58	18	CV 06	土器片(陶器 不明)		
SK 407	90	82	12	CV 05	奈良文系土器		
SK 408	81	79	22	DB 03	奈良文系土器 土器片(縄文 土器)	149	
SK 410	82	58	20	DA 04	縄文中期(平 行文縄文)	271	
SK 413	100	83	28	CX 03			
SK 414	135	88	28	CV 03			横刃土 器

表7 土坑観察表(6)

連続No.	経緯 長緯 短緯	深さ m	検出位置 (フリップ)	出土遺物			
				土器 土製品	銅器 金	石器	図番号 備考
SK 615	40	42	25	CV 03			
SK 616	61	72	11	CV 03			
SK 618	109	191	47	CV 02	縄文中期(早 行法線文) 241	銅片 打製石斧 磨 製石斧 硯石製石 器 石鏃 242 120 120-127	SK 65 SK 66 SK 67 SK 68 SK 69 SK 70 SK 71 SK 72
SK 620	153	140	48	OW 02	土器片(縄文)	打製石斧 磨製石 斧 磨石 磨製石斧 夾製品 67 80 81 82 159	
SK 622	190	88	31	CX 11			
SK 623	84	72	13	CT 08			
SK 624	112	97	16	CT 08	埴原文土器		
SK 626	119	84	21	CM 04	土器片(縄文)	黒曜岩製片	
SK 627	109	85	18	CP 05			
SK 628	89	65	18	OD 06			
SK 629	88	78	18	CP 06			
SK 630	75	57	18	OD 06	埴原文土器		
SK 631	79	84	25	OD 06			
SK 632	77	1921	11	OD 04			
SK 634	109	75	12	OD 05			
SK 635	86	82	19	OD 05			
SK 636	85	73	11	OD 06		黒曜岩製片	
SK 637	87	88	80	CN 05	土器片(縄文)		
SK 638	111	88	12	CN 03	土器片(縄文)	黒曜岩製片	
SK 639	98	97	18	CN 04			
SK 640	99	92	11	CN 04	土器片(縄文)	硯石製石器	
SK 642	88	73	50	CP 03	多岐文土器 埴原文土器	黒曜岩製片	磨製工 砥
SK 643	150	72	31	CM 00	埴原式 227 230	黒曜岩製片	
SK 646	101	88	18	CM 00	土器片(縄文)	黒曜岩製片	
SK 648	117	70	18	CM 02	土器片(縄文)	黒曜岩製片	
SK 647	89	59	8	CG 48			
SK 648	135	121	25	CN 49	縄文中期(早 行法線文) 242 土器片(磨製 平刷)	陶器 29	
SK 648	88	78	20	CL 48			
SK 650	90	76	18	CK 49		打製石斧	
SK 651	86	74	24	CK 49			
SK 652	102	75	48	CM 01	土器片(縄文)	黒曜岩製片 硯石 製石器	
SK 655	1202	113	42	CJ 00	縄文中期(早 行法線文) 242	黒曜岩製片 硯石 製石器 121	
SK 656	1941	81	35	CJ 01	縄文中期(早 行法線文) 242	黒曜岩製片	
SK 657	84	81	24	CH 47	埴原文土器	78 92	黒曜岩製片
SK 659	71	86	31	OD 48	縄文中期(早 行法線文) 244	銅片 打製石斧 磨 製石斧 磨石 磨石 製石斧 磨石 磨石 141 142 143 149	SK 68 SK 69 SK 70 SK 71 SK 72 SK 73 SK 74 SK 75 SK 76 SK 77 SK 78 SK 79 SK 80 SK 81 SK 82 SK 83 SK 84 SK 85 SK 86 SK 87 SK 88 SK 89 SK 90 SK 91 SK 92 SK 93 SK 94 SK 95 SK 96 SK 97 SK 98 SK 99 SK 100 SK 101 SK 102 SK 103 SK 104 SK 105 SK 106 SK 107 SK 108 SK 109 SK 110 SK 111 SK 112 SK 113 SK 114 SK 115 SK 116 SK 117 SK 118 SK 119 SK 120 SK 121 SK 122 SK 123 SK 124 SK 125 SK 126 SK 127 SK 128 SK 129 SK 130 SK 131 SK 132 SK 133 SK 134 SK 135 SK 136 SK 137 SK 138 SK 139 SK 140 SK 141 SK 142 SK 143 SK 144 SK 145 SK 146 SK 147 SK 148 SK 149 SK 150 SK 151 SK 152 SK 153 SK 154 SK 155 SK 156 SK 157 SK 158 SK 159 SK 160 SK 161 SK 162 SK 163 SK 164 SK 165 SK 166 SK 167 SK 168 SK 169 SK 170 SK 171 SK 172 SK 173 SK 174 SK 175 SK 176 SK 177 SK 178 SK 179 SK 180 SK 181 SK 182 SK 183 SK 184 SK 185 SK 186 SK 187 SK 188 SK 189 SK 190 SK 191 SK 192 SK 193 SK 194 SK 195 SK 196 SK 197 SK 198 SK 199 SK 200
SK 660	57	50	12	OD 46	縄文中期(早 行法線文) 246		

連続No.	経緯 長緯 短緯	深さ m	検出位置 (フリップ)	出土遺物			
				土器 土製品	銅器 金	石器	図番号 備考
SK 661	88	78	28	CR 43	土器片(磨製 平刷)	打製石斧 磨製 石斧 磨石	138
SK 662	99	87	12	CR 48	土器片(縄文)		
SK 663	108	104	28	CR 48	縄文中期(早 行法線文) 247	銅片	
SK 664	72	82	14	CR 49		特殊磨石	148 147
SK 665	84	81	22	CR 49	縄文中期(早 行法線文) 248 249 253	硯石製石器	122
SK 666	85	51	31	CR 49	縄文中期(早 行法線文) 250 251 252 253	硯石製石器	123
SK 668	88	63	12	CR 48			
SK 669	127	180	13	CT 49			
SK 670	88	76	18	CT 49			
SK 671	83	74	21	CU 00	縄文中期(早 行法線文) 254		
SK 673	1240	1181	13	CV 48	埴原文土器 土器片(縄文 磨製)	255	硯石製石器 磨石
SK 674	81	84	11	CW 81			
SK 675	125	851	12	CU 04	土器片(縄文)		
SK 676	287	172	78	DA 01	土器片(縄文)		硯石片
SK 677	220	180	58	CX 00	土器片(縄文)		
SK 678	186	78	29	CW 00			
SK 681	135	84	13	CV 48			
SK 683	107	70	18	CK 48			
SK 684	103	641	36	CX 45			
SK 685	76	57	15	CY 44	土器片(縄文)		
SK 686	187	184	73	CY 45	土器片(縄文)		
SK 687	1381	98	78	CW 42	土器片(縄文)		
SK 688	47	46	85	DO 45	磨製文土器	256	
SK 684	130	1103	34	CJ 01	土器片(縄文・ 磨製)		黒曜岩製片
SK 685	82	86	18	DR 02	土器片(縄文)		
SK 687	76	851	12	DO 00			
SK 688	148	194	18	DE 02	埴原文土器 土器片(縄 文)	59	
SK 700	141	120	28	DE 02	土器片(縄文)		硯石製石器
SK 702	100	92	24	DO 02	土器片(縄文 平刷)		硯石製石器
SK 703	84	821	28	DH 03			
SK 704	140	88	32	DH 02	土器片(縄文)		
SK 706	138	113	10	DO 47			
SK 707	238	133	82	DO 47	埴原文土器 大森山式 磨	60 77 79	石器 打製石斧 磨製石器
SK 708	88	81	14	DH 05			
SK 709	108	87	21	CH 04	土器片(縄文)		
SK 710	100	98	18	DR 01	土器片(縄文)		
SK 711	100	82	22	DL 00			

表8 土坑観察表(7)・竪穴建物出土遺物一覧・遺構外出土品掲載遺物一覧

遺構No.	埋蔵 深さ m		出土位置 (グリッド)	出土遺物			
	長さ m	幅 m		土器・土製品	図案 番号	石器	図案 番号
SK 712	91	75	27	DH 46			
SK 717	217	182	76	DK 46	埴間瓦土器 土器片(縄文)	79	
SK 718	57	140	21	CG 46			
SK 719	70	140	28	CG 47	縄文中期(平 行線文)土 器片(不明)		
SK 720	120	113	61	DC 46	土器片(縄文)		
SK 721	361	54	44	DK 46			
SK 722	64	34	14	DG 46	土器片(縄文)		
SK 723	100	180	52	DD 46			
SK 725	60	131	36	DD 46	土器片(縄文 前期)	272	
SK 726	68	180	24	DD 47	土器片(縄文)		
SK 727	180	80	31	DC 46			
SK 728	177	180	84	DA 01			
SK 729	50	41	1	DA 02	埴間瓦土器	120	
SK 731	74	87	16	DL 46			
SK 732	64	34	38	DK 46			
SK 733	301	333	42	DA 03			竪穴 土坑
SK 734	174	130	26	DA 06	土器片(不明)		
SK 735	91	74	18	CK 46			
SD 064	496	1160	22	CE 04	土器片(不明)	石鏡 高麗岩製片 打製石斧 磨石 磨 石 磨石 磨石 磨 石 磨石	44 191

遺構外出土品掲載遺物一覧

出土地点	土器	図案番号
遺構外	埴間瓦土器	108~111 131~136 141
遺構外	埴間瓦土器	152~153
遺構外	赤褐色瓦土器	173 174
遺構外	縄+縄文	275 276 277 278
遺構外	縄文式?	279
遺構外	+十三管挿式	280 281 282
遺構外	縄+縄文?	283
遺構外	縄文前期(磨 石)	284
遺構外	北畿式	285 286
遺構外	縄文中期(平 行線文)	287 288
遺構外	縄文内式	289
遺構外	土器片(縄文)	290
遺構外	土器片(不明)	291 292
遺構外	土製刀部	293
遺構外	土製刀部	294
19800遺土	埴間瓦土器	112 139 140
19800遺土	赤褐色瓦土器	177
19160遺土	土器片(磨石)	322
19160遺土	埴間瓦土器	95 113
19355遺土	土器片(不明)	144

※出土遺物のうち土器・土製品について、詳細な型式が不明なものは「土器片」に統一して年代や特徴を記載した。

竪穴建物出土遺物一覧

遺構No.	出土位置	土器・土製品	図案番号	石器	図案番号
SI 161	CL 06	埴間瓦土器 土器片(縄文)	1~8	石鏡 磨石 高麗岩製片 打製石斧 磨製石斧 横刃型石鏡 石鏡	1 2 26 72 85 87 88 124 149
SI 200	CL 13	埴間瓦土器 土器片(縄文)	9~25	石鏡 高麗岩製片多数 打製石斧 横刃型石鏡 磨石	3 45 46
SI 458	OK 01	埴間瓦土器 焼成粘土土器片(縄文)	26~47	石鏡 石鏡土製品 石鏡 高麗岩製片 横刃型石鏡 石鏡 磨石	4 5 6 7 8 9 24 25 88 89 90 91 92 93 125 150 151 152
SI 100	CI 07	埴間瓦土器	48~52	石鏡 高麗岩製片 打製石斧 磨製石斧 横刃型石鏡 石鏡 磨石	10 47 74 94 126 142
SI 690	DC 47	縄+縄文 十三管挿式 北畿式 大塚山式 玉縄+台式 陸岸式 山形平式 土製刀部	175~195 223 224	石鏡 製片 打製石斧 横刃型石鏡 石鏡 磨石 磨石	11 12 13 48 49 50 51 96 97 127 128
SI 071	CH 03	磨製瓦土器 中室式 在地系 新油室23式 磨台	196~216	高麗岩製片 打製石斧 横刃型石鏡 石鏡 磨石	32 53 54 95
SI 235	CP 11	磨製瓦土器	217 218	石鏡 高麗岩製片 ナヤト製片 打製石斧 横刃型石鏡 磨石	55 88
SI 654	CI 49	中室式	219~225	高麗岩製片 横刃型石鏡	99 100
SI 682	CW 47	土器片(縄文)		製片 打製石斧 磨石	56 145
SI 689	DB 46	土器片(縄文)		製片 横刃型石鏡 石鏡	101 129 130
SI 180	CJ 09	弥生土器(磨 磨) ニョップア土器	292~294 331	石鏡 高麗岩製片 ナヤト製片 打製石斧 横刃型石鏡 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石	14 137 132 302 102 143 166 147 165 164 181 182 179 176
SI 070	CI 02	弥生土器(流汗 磨) ニョップア土器 円形土製品	299~304 322 332 337	石鏡 高麗岩製片 ナヤト製片 打製石斧 横刃型石鏡 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石 磨石	17 57 75 104 153 184 194 195
SI 535	DO 13	弥生土器(磨) ニョップア土器	305 334	石鏡 高麗岩製片多数 打製石斧 磨製石斧 横刃型石鏡 磨石	105 106 178
SI 625	CS 06	弥生土器(磨 磨)	306 307 308	石鏡 高麗岩製片 横刃型石鏡 石鏡 磨石 有磨製状石鏡 その他不明	
SI 667	CT 00	弥生土器(磨) ニョップア土器	309 335	製片 磨製石斧 横刃型石鏡 磨石	107 103 166 169 170
SI 715	DH 47	弥生土器(磨 磨) 土製勾玉	310~313 338	製片 石鏡 石包丁 磨石 磨石 磨製石鏡 磨製石鏡土製品	173 121 171 187 193 190 189 185 188 186
SI 1006	DN 34			打製石斧 磨製石斧横刃型石鏡 有磨製状石鏡 石包丁	58 76 179 174
SI 001				石鏡	

表9 集石観察表

遺構No.	規模 (cm)			有無	礎石				出土遺物			礎の材質 (花崗岩以外)			
	長さ	幅	高さ		柱礎	大礎	中礎	小礎	地外礎	土器・土製品	石	礎	礎の材質	その他所見	
S5030	45	40	10	○	9	0	0	9	9						
S5076	198	(74)	27	○	42	5	33	4	41	土器片(不明)	143	黒曜岩割片			
S5093	93	44	29	○	79	8	21	50	79			109	硝子製石器 磨製石片 黒曜岩割片	硬化面あり	
S5099	120	(99)	25	○	79	12	25	42	13	押型土器 土器片(不明)	黒曜岩割片			遺部に平石を敷く	
S5130	132	130	36	○	219	11	33	175	169	押型土器 土器片(縄文)	62	打製石片 石核 硝子製石器 磨製石片	35 59	砂岩33 不明5	礎の集積は2段階か
S5150	(87)	110	18	○	55	3	24	28	51	土器片(縄文)		石鏡 黒曜岩割片	16		
S5155	111	85	22	○	23	3	5	15	23	条痕土器 土器片(縄文)		黒曜岩割片			
S5171	55	48	18	○	88	1	8	79	88	条痕土器 土器片(縄文)					
S5172	110	45	—		14	5	6	3	2						列石状 S100内で把握 備土・プラン詳細不明
S5175	87	70	41	○	48	5	18	25	36	土器片(縄文)		硝子製石器 黒曜岩割片	110		上部を平石で閉塞 炭化物あり 遺に炭層あり C14分析対象(No.R5-S-1)
S5186	119	(82)	31	○	9	5	4	0	3			磨製石片 石鏡 黒曜岩割片	77		平石のみを集積
S5201	81	80	35	○	81	0	26	55	81	土器片(縄文)		硝子製石器			硬砂岩63
S5202	(94)	115	22	○	37	8	8	21	37	条痕土器 土器片(縄文)		石鏡 黒曜岩割片			砂岩1 不明2
S5220	114	104	23	○	103	18	44	41	35	条痕土器		打製石片 黒曜岩割片	60	青石1 砂岩3	遺部に平石を敷く 遺部数石の上に炭層あり
S5240	92	(86)	16	○	7	2	3	2	3	土器(不明)	142				
S5248	101	88	20	○	11	1	0	10	4			硝子製石器 磨製石片 磨製石片 黒曜岩割片	111 154		
S5276	109	83	20	○	44	8	8	28	17	土器片(縄文)		黒曜岩割片			砂岩1 遺部に平石を敷く 遺部数石の上に炭層あり
S5305	141	107	25	○	171	5	62	104	171	土器片(縄文前期)	257	黒曜岩割片			砂岩 硬砂岩 16 下層に平石を敷く
S5309	150	86	22	○	22	0	1	21	16	押型土器 土器片(縄文)	81	硝子製石器 磨製石片			黄褐色は木炭層なし
S5345	87	76	26	○	89	7	27	55	86	土器片(縄文)		黒曜岩割片			カルンフェル 2.2 遺部に平石を敷く
S5386	133	102	38	○	153	10	53	90	83	条痕土器 押型土器 土器片(縄文)					硬砂岩1 砂岩4 C14分析対象(No.R5-S-5)
S5411	44	42	16		6	2	2	2		土器片(縄文)					
S5458	109	(94)	26	○	65	3	21	41	65	押型土器 土器片(縄文中期初期)	114				硬砂岩2 柱石 3 不明1 砂石の転用品1+あり C14分析対象(試料No.R5-S-2)
S5460	128	(94)	10	○	33	0	11	22	32	土器片(縄文中期前期)		硝子製石器			硬砂岩2
S5461	114	98	18	○	21	0	12	9	16	土器片(縄文)		磨石 石核			長石1 砂岩3 加工面のある花崗岩1を含む
S5570	89	72	9	○	4	3	1	0	4	押型土器	115				
S5581	124	(108)	36	○	50	0	15	35	43	土器片(縄文)		石鏡 割片			砂岩9 柱石1
S5585	100	89	53		10	4	2	4	6	土器片(縄文中期初期)	258	石鏡			
S5586	107	95	28		7	2	1	4	5						
S5617	74	70	34	○	4	2	0	2	4			割片			
S5619	104	86	13	○	4	0	1	3	3	押型土器	93	磨石	155		
S5633	123	84	16		5	2	2	1	4						
S5641	103	75	29		9	0	2	7	4	土器片(縄文)		磨製石片未製品 硝子製石器 磨製石片 黒曜岩割片	83		
S5646	148	(117)	15	○	92	2	15	75	92	黒糸土器 土器片(縄文)	150	硝子製石器 磨製石片	112	硬砂岩3 砂岩2	
S5652	109	(72)	12	○	32	1	2	29	31	押型土器 土器片(縄文)	82	黒曜岩割片			
S5680	(106)	98	48	○	74	23	45	6	71	土器片(縄文) 土器片(不明)		打製石片 割片 黒曜岩割片	61	不明3	C14分析対象(試料No.R6-4)
S5724	87	86	63	○	9	9	0	0	9						

※礎石の項目の大礎・中礎・小礎はそれぞれ小礎：直径8cm未満 中礎：8cm~16cm 大礎：16cm以上
 ※出土遺物のうち土器・土製品について、詳細な型式等が不明なものには「土器片」に続けて時代や特徴等を記載した。

表10 ビット観察表

機種								出土遺物												
遺物№	長さ cm	短径 cm	深さ cm	検出位置 (グリッド)	土器・土製品	図章 号	石部	図章 号	備考	遺物№	長さ cm	短径 cm	深さ cm	検出位置 (グリッド)	土器・土製品	図章 号	石部	図章 号	備考	
SP019	40	30	10	CO 01						SP322	25	20	12	CR 16						底部が硬化
SP018	65	45	29	CC 01						SP323	40	30	16	CR 16						
SP020	50	40	28	CB 01						SP324	45	40	11	CR 14						
SP024	50	40	15	CO 02						SP326	35	30	19	CQ 14						
SP026	40	40	8	CE 02			黒曜岩製片			SP330	30	30	29	CP 14						底部が硬化
SP027	65	(25)	18	CO 03						SP357	70	70	52	CS 15	土器片(再生)	314				底部が硬化 炭化物埋納 C14測定資料 №:PG-K-3, 6, 8 埋納等測定(試 料№:PG-K-4, 5, 6)
SP033	50	35	12	CF 01			黒曜岩製片			SP364	60	30	24	CS 08						
SP032	50	40	10	CH 00			黒曜岩製片			SP365	20	20	21	CR 10						
SP060	60	52	8	CI 01			黒曜岩製片			SP366	25	20	24	CR 11						
SP067	45	40	23	CI 01	土器片(縄文-弥生)		黒曜岩製片			SP367	20	20	44	CS 12						底部が硬化
SP068	25	25	25	CI 02	弥生土器(壺)					SP369	45	40	15	GS 13						
SP086	55	40	10	CE 04						SP370	40	40	52	CS 14						
SP095	50	40	24	CB 01						SP371	40	40	13	CT 14						
SP104	65	60	17	CI 04	土器片(縄文)					SP372	36	28	12	CS 13						底部が硬化
SP105	50	45	14	CI 00						SP373	40	35	36	CS 14						底部が硬化
SP119	35	40	11	CF 02			黒曜岩製片			SP374	35	35	24	CS 15						
SP116	55	40	11	CF 03			黒曜岩製片			SP375	40	40	52	CS 14						底部が硬化
SP118	45	35	21	CH 00			石核			SP376	60	50	7	GS 17						
SP119	55	40	25	CH 49			黒曜岩製片			SP376	25	20	72	CS 14						
SP120	50	35	12	CH 49						SP377	30	25	19	CV 15	土器片(縄文)					土器片炭化物埋納(ツト)と類似
SP123	60	55	20	OB 02			黒曜岩製片 チャート製片			SP398	35	30	35	CU 16	土器片(再生)					
SP137	65	50	18	CL 05	土器片(縄文)					SP399	40	35	15	CV 15						
SP138	40	40	70	CL 05	土器片(縄文)	170				SP414	45	40	11	CW 18						
SP139	55	45	40	CL 05	弥生土器		黒曜岩製片			SP418	30	30	32	CT 14						底部が硬化
SP143	80	75	44	CM 08	土器片(縄文)		黒曜岩製片			SP420	30	25	16	CS 14						底部が硬化
SP149	70	50	19	CL 07	縄文土器 土器片(縄文)	61	黒曜岩製片			SP421	20	20	24	CS 14						底部が硬化
SP152	65	(30)	32	CH 04	土器片(縄文)		黒曜岩製片			SP438	25	20	36	CV 18						底部が硬化
SP174	75	55	26	CJ 12	土器片(縄文)					SP447	35	30	37	CV 17						底部が硬化
SP203	35	30	22	CL 06						SP448	(25)	(25)	59	CW 20	棒+横式					
SP204	35	30	39	CO 08						SP475	45	40	54	CY 10	土器片(縄文)		石部			
SP209	45	40	30	CP 07						SP490	50	40	12	DA 13	土器片(縄文)					
SP210	35	35	25	CP 08						SP507	30	25	27	DA 13						
SP211	35	30	24	CO 08						SP509	70	60	87	CY 13	土器片(縄文)					
SP222	35	30	18	CG 10	土器片(再生)					SP537	40	35	20	GX 10						
SP229	30	30	34	CP 08	土器片(縄文)		黒曜岩製片 土器片炭化物埋納(ツト)と類似			SP538	30	30	26	GX 10						底部が硬化
SP230	30	25	20	CO 08	土器片(縄文)					SP539	50	40	20	CV 11						底部が硬化
SP238	25	20	20	CR 10						SP540	35	30	16	CV 11						底部が硬化
SP239	30	20	24	CO 09						SP541	35	30	18	CV 11						底部が硬化
SP241	25	20	20	CG 10						SP542	30	25	18	CW 12						
SP242	30	25	22	CA 09						SP544	30	25	19	DA 12						
SP243	30	25	22	CN 10						SP545	45	40	18	DB 14						
SP249	45	35	21	CO 14	土器片(縄文)		黒曜岩製片			SP548	35	30	11	DB 14	土器片(縄文)					
SP265	40	40	13	CP 13						SP550	25	25	44	CW 16	土器片(縄文)	北ニユキヤ 136				166
SP266	40	35	12	CQ 13						SP553	40	40	76	CX 16	土器片(再生)					
SP267	40	35	16	CQ 13						SP559	56	48	20	DF 10	土器片(縄文)					
SP268	40	30	46	CQ 13	土器片(縄文)					SP568	40	40	8	DG 07	土器片(縄文)					底部が硬化
SP269	40	30	41	CQ 13	土器片(縄文)					SP608	30	25	41	CX 05						
SP270	50	45	20	CQ 14						SP611	50	50	11	CT 07						石部未製品
SP271	45	45	15	CR 14						SP612	65	55	14	DA 13						
SP272	55	40	21	CR 14	土器片(縄文)					SP621	(30)	25	20	CW 02	土器片(縄文)					
SP273	50	50	15	CR 14	土器片(縄文)					SP678	110	(63)	56	CX 01	弥生土器(壺) 弥生土器(壺) 弥生土器(壺)	315	磁石	161	炭化物埋納 C14測定資料 №:PG-S-3) 埋納等測定(試 料№:PG-S-3, 4) 底部が硬化	
SP274	45	40	41	CQ 14	土器片(縄文)					SP693	(31)	46	39	CW 49	弥生土器(壺) 弥生土器(壺) 弥生土器(壺) 弥生土器(壺)	130 316 317 318 319 320	銅片			土器片等埋納・ (炭化物も発見) 埋納の形等あり 埋納不明
SP288	60	50	26	CR 16	棒+横式					SP698	55	50	14	DC 03						
SP293	30	25	18	CT 20						SP698	45	40	15	DD 02						
SP295	60	50	19	CS 20	土器片(縄文)					SP701	65	45	58	DF 03						
SP297	65	50	28	CG 20	土器片(縄文)					SP705	(40)	50	18	DE 05						
SP298	60	50	28	CG 20	土器片(縄文)					SP730	45	40	55	DA 02	土器片(縄文)					
SP308	40	35		CN 17						SP736	64	62	25	CS 17						
SP310	40	35	21	CN 16																
SP311	50	35	34	CN 16	弥生土器	171														
SP315	25	25	32	CO 17																
SP316	30	25	30	CR 15																
SP317	20	15	21	CO 14	弥生土器 弥生土器 土器片(縄文)	140	黒曜岩製片													
SP318	30	15	18	CO 15																
SP319	25	20	26	CO 15																
SP321	25	25	41	CR 16	土器片(再生)															

※出土遺物のうち土器・土製品について、詳細な型式等が不明なものに「土器片」に記して時代や特徴等を記載した。

第4節 遺物

1 縄文時代の土器 (図80～92・94、写真図版31～41)

(1) 早期の土器

a. 押型文土器

総じて器面が風化によって荒れており、文様が不明瞭なものも多数含まれる。主体となる立野式の押型文土器について、器厚や胎土及び施文方法に基づき立野式を最初に一括し、それ以外の押型文土器片と分ける。立野式の特徴として挙げられているのが、縦位密接施文でネガティブ文を含む文様構成、厚手の器壁かつ雲母と砂粒を多く含む胎土、細く長い山形文などである。文様の分類は飯田市の美女遺跡(飯田市教育委員会 1998)に準拠するが細分はせず、大きく「楕円文」「ネガティブ文」「市松文」「山形文」「格子目文」とし、これに含まれないものは他事例を参考とした。その他の押型文土器は、器壁が薄く、帯状施文の山形文を施文する。胎土は赤褐色や白色を呈するものが多く、黒色を呈するものも少数含まれる。樋沢・細久保式もしくは沢式に近い一群と考えられる。

以下、出土遺構別に竪穴建物、集石・土坑、遺構外の順に示す。

S1161 1～7は立野式の押型文土器である。1～3は楕円文で、格子目に近い。総じて楕円が小ぶりである。4～6はネガティブ文、7は山形文である。5・7は口縁端部に斜めの刻みを入れる。8はその他の押型文土器で、薄手の器壁に山形文を施文するもの。

S1200 9～22は立野式の破片である。9～15は楕円文の同一個体の破片で、口縁部から胴部下版まで残る。楕円はかなり大ぶりで浅い。9は口縁端部に斜めの刻み目を連続させ、頸部から胴部にかけて縦位密接施文する。16～20はネガティブ文、21は格子目文である。22は山形文を密接に施した底部で、縦位密接施文である。内面の付着炭化物を放射性炭素年代測定の試料とした。23～25はその他の押型文土器片で、薄手の器壁に山形文を施す。

S1658 26～44は立野式である。26は楕円文、27～39はネガティブ文である。ネガティブ文は大ぶり・小ぶりな楕円がそれぞれ認められるが、器壁の荒れによって文様の詳細が判別できないものが多い。40は口縁部で、頸部から端部にかけて先を細らせながら反する。口縁部に刻み目を入れ、以下に角度が大きい山形文を施す。41は判別が難しいがネガティブ文か。42・43は格子目文である。44は「平行線文」とされる文様に近いものである。信濃町の市道遺跡(信濃町教育委員会 2001)で少数が確認されている。45・46はその他の押型文土器の破片で、山形文を施す。46は帯状施文で横位と縦位が交差する部位である。47は立野式に類似する胎土の縄文を施す破片である。

S1100 48～50は立野式の破片である。48は市松文、49・50は山形文である。51・52はその他の押型文土器で、文様は山形文である。

SK・SS・SP 53～61は楕円文である。いずれも密接施文であるが、56は縦位と横位が交差する。59・60の楕円はやや小ぶりである。62～79はネガティブ文である。網目状の大ぶりの楕円や船形の沈文のほか、78・79のようにかなり小粒の楕円も含まれる。80は無文、81～92は山形文、93は格子目文である。94は口縁部で、平行線文に分類されるものであろう。

遺構外 95～113は立野式である。95～101は楕円文で、いずれも密接に施文される。96は胴部の破片で、縦位に施文する。102～104はネガティブ文である。101は底部に近い胴部で、船形状を呈する楕円である。105～109は山形文の破片である。いずれも角度は広い。110～112は格子目文、113は平行線文である。114～141はその他の破片を一括した。文様は全て山形文である。

122・123・124・126～128に帯状施文が認められる。また、123・131・132・133は内面にも施文されるもので、施文方向は全て外面が縦位であるのに対して横位である。117・119・131は口縁端部の破片で、いずれも端部を平坦に整え、原体を押し当てて施文する。142は型式や文様の峻別が困難な破片である。口縁部下に縦に連続する粒状の文様が認められる。

b. 撫糸文土器

いずれも細片であり、全体の特徴が知れるものはない。押型文土器よりも少量で、多くが遺構外で出土している。遺構内で押型文土器と共伴したものは認められなかった。器壁は総じて薄く、胎土は押型文土器とは大きく異なり、雲母や砂粒を含むが緻密で灰白色を呈するものが多い。口縁部は肥厚せず、内面に横位の撫糸文を施すもの(145・146・152・154)もある。152と153は口縁部である。150と151は底部で、150は先端の尖りが弱いのにに対し、151は先端を細く整形して尖らせる。

c. 条痕文系土器

早期末の粕畑式を一括する(159～174)。いずれも胎土に繊維を含み、器面が条痕調整される。文様は口縁部下に爪形文列が認められる。159・161は山形に連続する口縁部で、頂部を肥厚させて突起状にする。164・174はそれぞれ底部である。

(2) 前期前葉の土器

212・213・216は縄文中期の竪穴SI071の覆土中から出土した。胴部に撫りの粗い縄文を施する薄手の土器で、内面に指頭痕が残る。釈迦堂Z3式に類似する。

(3) 前期後葉～末葉の土器

SI690出土の175は円筒状の口縁で、全周が粘土紐の貼り付けで加飾される。石川県真脇遺跡出土土器(能登町教育委員会1985)に類似する。同176は胴部に貼り付けた隆帯を押圧するもの。177～179・263・278・279は胴部の渦巻状の沈線文の一部で、270・275・276は三角陰刻文が、277は刺突文が施される。これらは中部高地に分布する曙ヶ峰式及び北陸における鍋屋町式に相当する。180・281・282は縄文を地文とし、細い粘土紐の貼付文を有する。関東地方の十三菩提式に類する。229は薄手の器壁で口縁部に数段の爪形の押し引き文を連続させるもので、関西地方の大歳山式である。同型式の181では太い縄を地文に用いる。230は北陸系とみられる小型土器で、口縁部は山形で胴部に絞杉状の沈線文を施す。遺構外出土の283は細い隆帯を貼付した薄手の土器で、北陸の蛸ヶ森式とみられる。284は薄手で縄文を地文とし、細い隆帯を縦位に貼付する。隆帯上には刻みがある。関西系の土器とみられる。このほかの土器片として、257と280はそれぞれは縄文を地文とし、細い隆帯を貼付して押し引きを加えるもの。261は結節浮線文を縦横に施す。267は羽状縄文を施す。272は口縁端部付近で、細い粘土紐を直交させた格子目状の文様を有する。

(4) 中期初頭～中葉の土器

竪穴建物SI690出土の183・184、土坑由来の227・228・231・232・235・239・242～254・258・266・268・269・271、遺構外の287・288は「平出第三類A」(平出遺跡調査会1955)に類似する土器である。いずれも頸部に縦方向の平行沈線文を密に充填する。口縁端部に縄文

を施文するものとしめないものがある。胴部は沈線で区画され、地文に縄文を用いるか、あるいは沈線文のみで加飾される。製作技法や胎土には個体差が認められ、248～253、258は外面を磨いており、一部に光沢がある。240・244～247もこのタイプの底部・胴部であろう。241は円筒状を呈する土器の底部から胴部で、4方に縦位の隆帯を貼付する。

260・265は関西地方を中心に分布する船元式である。265は円孔刺突文列を有する口縁部、260は縦長の圧痕が残る胴部である。

185～188・236～238は鴛鴦式である。187・188・236・259は浅鉢である。187は口縁部に段をつくり、内面側には3段の爪形文を、外面には隆帯上に円形刺突を連続させる。188は丸みを帯びた口縁端部に爪形文を施し、内面には沈線を施す。236は両端を平面台形に突出させ、口縁部の平坦面に2列の爪形文を巡らせる。原村大石遺跡出土土器に器形・文様がほぼ一致する類例がある（長野県教育委員会 1976）。259は円形刺突が施される。SP693出土の320は交互に刺突した三角陰刻を施す口縁部で、鴛鴦式期に並行するものであろう。

262・273・274・285・286は隆帯上に半截竹管による爪形文を連続する土器で、東海地方の北裏C式に類する。191～195は同じく東海の山田平式とみられる土器である。191は半円形に突出する口縁部で、端部に爪形文を連続させる。193は頸部に三角陰刻を入れ、以下を半截竹管沈線で充填する。226は口縁端部に縄文を施文し、さらに沈線を巡らせる浅鉢である。182は器種・型式等不明の中空の土器片で、縄文の施文と胎土からこの段階の所産とみる。

(5) 中期後葉の土器

竪穴建物 SI071、SI235、SI654 の3基の竪穴建物に加え、土坑 SK227 から出土したものを挙げる。なお、当該期の土器の分類・編年は吉川（2008）に準拠する。

SI071 唐草文系土器、東海地方の中富式土器が出土している。196～199は唐草文系土器の同一個体である。口縁部の直下に貫通しない円筒状の把手状突起を有する。胴部は隆帯で区画し、条線を充填する。三尋石遺跡第3次調査 SB10 出土土器（飯田市教育委員会 1999）に類例がある。200は口縁端部を折り返して肥厚させた口縁、206は把手で、ともに「下伊那Aタイプ」である。208～211は中富式の土器である。210は口縁部に渦巻が連続する沈線を巡らせ、頸部は無文とする。胴部下半は連弧文を施し、間に縦の条線を充填する。以上の土器は総体として中期後葉の第Ⅱ段階に比定される。

SI235 217は埋甕に用いられた唐草文土器で、中信地方を中心に分布する形態である。口縁端部と底部は打ち欠かされている。樽形の胴部を上下に区画し、口縁部の区画には横に長い楕円形を配し、内部に交互刺突を施文する。胴部下半は隆帯を逆J字に垂下させ、間に条線を充填する。中信唐草文系土器編年の第3段階に相当する。218は下伊那唐草文土器の口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部下に隆帯を垂下させ、間は沈線で埋める。下伊那唐草文系土器編年の第3段階に相当する。

SI654 219～225は中富式である。口縁部が山形に連続し、口縁部に渦巻文状のモチーフを沈線で表現する。219は頸部が無文で、他は頸部から胴部にかけて縦の条線を施す。下伊那唐草文系土器編年の第2段階に相当する。

SK227 233は中富式である。口縁端部を内側に折り込み、渦巻状の沈線を施す。胴部は縄文を施文する。234は口縁部直下に把手を有する。中期後葉の第3段階に位置づけられる。

SK668 256はいわゆる細隆線土器の系譜をひく大型の土器である。頸部から上と胴部の一部を欠く。粘土紐を編み上げた把手を有する。胴部はX字の隆帯を連続させて区画し、その間に縦方向

の条線を充填する。中期後葉の第2段階に位置づけられる。

(6) その他の土器

SK678 は 288 は堀之内式とみられる胴部破片で、後期の土器として 1 点のみが確認された。

143・144、255・289～291 は詳細な判別ができなかった土器片である。143・144 はそれぞれ薄手の土器で、斜め方向に刺突した文様を連続させる。255 は山形の口縁部で、口縁部下に斜行する沈線を施し、その上に細い粘土紐を交差させて格子目状の文様とするもの。289 は頸部から口縁部付近を無文とし、頸部下に横方向の条線を施す。290 は口縁部とみられ、外面に網目状の深い不整楕円形の文様を施す薄手の土器である。阿南町根吹遺跡 9 号住居址（阿南町教育委員会 1995）に類例がある。291 は平坦面に爪形の文様を 2 列連続させるもので、土製品の可能性がある。

2 縄文時代の土製品・焼成粘土塊（図 95、写真図版 43）

a. 土製円盤

323～325 は土製円盤である。323 は沈線と縄文が施されるもので、中期初頭の所産であろう。

b. 土製耳飾

326 は小型の土製耳飾である。直径 1.4cm を測る。円柱形の片面を凹部とし、側面を窪ませる。

c. 土錘

327 は土錘で、薄手の破片の 3 方に刻みを入れる。片面にネガティブ文が押捺されており、早期に位置づけられる。

d. 焼成粘土塊

焼成粘土塊は SK430、SK510、SI658 の P15・P5 から出土した。遺構別の重量は、SK430 で 30g、SK510 で 40g、SI658 の P15 で 40g、P5 で 8g である。SK430 から出土した大型の 1 点を図示した（土 330）。このほか、SK088、SK097 でも微量が確認された。

3 弥生時代の土器（図 93・94、写真図版 41・42）

(1) 前期の土器

中期末の竪穴建物 SI160 の覆土中から 322 の 1 点のみ前期に比定される壺の口縁部が出土している。肥厚する口縁端部上面に縄文を施し、側面に突起を連続させる。

(2) 中・後期の土器

SI160 甕、壺が出土している。293 は口縁部がわずかに外反する甕である。口縁端部近くに斜行する櫛描文を施し、その下に波高の小さい櫛描波状文を施す。294 は逆「ハ」の字状に広がる壺の口縁部、297 は炉内に設置されていた壺の底部である。これらは総体として中期末に比定される。

SI070 299 は高坏の身部である。器壁は薄く、口縁端部が折れるように外反する。300～302 は口縁部が緩やかに外反する甕の上半部と底部である。303 と 304 は同じく頸部の破片で、櫛描波状

文をそれぞれ施す。以上は弥生後期前葉に比定される。

SI555 305 は胴部が球形を指向する甕である。頸部にはハケによる調整痕が認められる。弥生後期の所産である。

SI625 306 は東海系の広口壺である。胴部の下位が張り出し、器面はよく磨かれる。黄白色の緻密な胎土で焼成は良く、搬入品の可能性がある。307 は在地系の壺の口縁部で、端部に縦の沈線が連続し、頸部には櫛描波状文が施される。308 は炉内に設置されていた甕である。口縁端部と底部を打ち欠かされている。胴部は無文で研磨される。以上は弥生後期に比定される。

SI667 309 は壺の頸部から口縁である。頸部には横位にハケ状工具による条線が2段以上巡る。弥生後期に比定される。

SI715 甕、壺が出土している。310・311、313 は口縁部が緩やかに外反する甕である。310・311 は頸部に斜行する櫛描文を配する。313 は頸部に櫛描波状文を施す。以上は弥生後期に比定される。

土坑・ピット 314～320 はピット内で炭化物と共存した土器である。316 は横に張り出した大型の土器で全周の3分の1程度が残る。口縁部となっている上端は角が立ち、壺の胴部下半を切断した可能性がある。317・318 も壺の肩部から底部の破片で、315 は櫛描文を施文する。

3 弥生時代の土製品 (図95、写真図版43)

331～336 はミニチュア土器である。いずれも手づくねで整形される。337 は中央に穿孔のある円形の土製品で、表面に顔料を塗布した痕跡が認められる。338 は土製勾玉とみられる製品である。細い粘土棒を緩い逆「く」の字状に曲げ、片側の端部寄りの中央に穿孔する。先端部を欠損する。

4 石器 (図96～110 写真図版44～49)

石器は各遺構や遺跡全体で特徴的なものを選別した。以下、種類別に提示する。図示した石器の観察表は表10・11 (p144・145) にまとめた。

(1) 石鏃

1～23 は石鏃である。1の正面側両側縁は裏面側の剥離痕によって切られている。基部は裏面の剥離痕が表面を切っている。石材は黒曜岩。2の正面、裏面の剥離痕は交互に無作為に切り合っている。石材はチャートで下部が赤色で上部が青色である。3の基部形態は左右非対称である。石材は黒曜岩。4の裏面剥離痕は正面の剥離痕に切られている。基部の半円状の抉りは複数の剥離痕によって形成されている。5は脚部が長く、その先端が尖鋭な石鏃である。正面左側縁は裏面側によって切れ、右側縁と基部は正面が裏面側を切る。先端は欠損している。石材は黒色チャート。6は先端が欠損し、両側縁とも鋸歯状となっている。基部は小さい抉りが二つある。石材は黒曜岩。7は先端部がやや膨らんでいる。正面、裏面の剥離痕は交互に切り合っている。基部には小さい抉りが二つ施されている。石材は黒曜岩。8はやや幅広く正面左側縁の一部は鋸歯状となっている。裏面には、断面を抉る自然の割れ面がある。それに剥離を加え、形を整えている。先端は丸まっている。石材は黒曜岩。9の正面左側縁と基部は正面側が裏面の剥離痕を切り、右側縁が裏面側の剥離痕が正面側を切っている。基部には小さい抉りが二つ施されている。石材は黒曜岩。10の両側縁と基部

の正面剥離痕は裏面の剥離痕を切っている。石材は下呂石。11は被熱作用を受けている黒曜岩製の石鏃である。表面光沢は喪失し、白く濁るような色調へと変化している。10倍ルーペで観察すると無数の亀裂が確認できる。被熱した黒曜岩には被熱痕跡が生じ、条件によってさまざまな痕跡がみられることが明らかにされている(御堂島 2018)。この石鏃に生じている格子目状の微細な亀裂は、それが風化によって顕在化したものの可能性がある。被熱痕跡は石鏃作成時に発生した剥離痕にも及んでいることから、石鏃作成後に被熱したことを示唆している。両側縁基部共に正面の剥離痕が裏面の剥離痕を切っている。12の両側縁・基部の正面剥離痕は裏面を切っている。基部の扱りは幅広いのV字状をなす。石材は黒曜岩。13の正面両側縁の剥離痕は裏面の剥離痕を切っているが、基部は裏面の剥離痕が正面を切っている。脚部は外側に張り出し、その底部は直線状をなす。石材は黒曜岩。14の正面左側縁は裏面側の剥離痕に切られ、右側縁が正面側の剥離痕が裏面の剥離痕を切っている。基部は裏面側の剥離痕が正面を切っている。基部には小さい扱りが二つ施されている。石材は黒曜岩。15の正面左側縁の剥離痕は裏面から正面を、右側縁と基部は正面から裏面を切っている。石材はチャート。16の正面左側縁と基部は裏面の剥離痕に切られ、右側縁の剥離痕が裏面を切っている。概形は左右非対称。石材は黒曜岩。17の側縁は正面裏面を交互に転換しながら加工を施されている。ただし基部は正面が裏面の加工を切っている。石材は黒曜岩。18の正面左側縁は一部を除き裏面の剥離痕に切られ、右側縁の剥離痕が裏面を切っている。底部は直線状で基部の扱りはU字状をなす。石材は黒曜岩。19は下呂石製で風化が著しい。そのため正面背面の剥離痕の前後関係は明瞭ではない。基部に半円状の扱りが認められる。20の正面左側縁の剥離痕は裏面を切り、正面右側縁が裏面の剥離痕に切られている。石材はメノウ。21の側縁と基部は正面裏面を交互に転換し加工を施している。脚部の先端が尖鋭でやや内側にすばまる。石材は黒曜岩。22は当該遺跡唯一の有茎の石鏃である。舌は欠損し本来の長さは不明。正面左側縁の剥離痕は裏面を切り、右側縁の剥離痕は裏面によって切られている。石材は黒曜岩。23の正面両側縁と基部は裏面の剥離痕に切られている。基部は平基。石材は珪質頁岩である。

(2) 石錐

24は石錐である。素材剥片の棒状になった部分に加工を加え石錐としている。一方のつまみ部分はさほど手は加えられていない。石材は黒曜岩。

(3) 掘器

25は小型の掘器である。下部は両面ともに細かく加工が加えられ刃部を形成している。刃部角は高い。SI658の時期である立野式土器期である栃原岩陰遺跡(藤森編 2019)や美女遺跡(馬場ほか 1998)などでも同様の石器が出土している。

(4) 削器

26～29は削器である。26は剥片を折り取り、その一部を素材とする削器である。加工は両面から施されている。一部に丸状の夾雑物の脱落が見られる。石材は黒曜岩。27は剥離面を打面として剥がされた横長の剥片を素材としている。石材は珪質凝灰岩。28は連続した生産された横長の剥片を素材としている。打面は残されていない。打点に平行する縁辺部を両面から加工し刃部を作出している。石材は御嶽山周辺に見られる玄武岩。29は縦長の剥片を素材としている。両側縁ともに両面からの加工によって刃部が作出されている。底部は折れており、刃部の加工を切っている。石材

はチャートである。

(5) 石匙

30～32は石匙である。30は縦長石匙である。刃部・つまみの加工は粗雑で自然面を残す。石材は黒曜岩。31は横長石匙である。残された素材面から、素材となる剥片は連続した同じ打面から剥がされたもののひとつである。全体的に周到な加工が施されている。石材は下呂石。32は横長の剥片を素材とする縦長石匙である。裏面右側縁には剥片作出後におそらく厚みを減らすためと思われる剥離痕が残されているが、加工の途中で剥離の末端にステップが形成されたために奥まで剥離が及んでいない。石材は黒曜岩である。

(6) 異形石器

33は異形石器である。概形は錐型のものである。両面ともに摩耗痕が認められるが成因は不明である。全体的に周到な加工が施されている。石材は灰色の珪質頁岩であるが色調・質感を踏まえると当該遺跡では類例がない。

(7) 垂飾

34は石製垂飾である。平面形状は隅丸の菱形に近い不整形である。隅に近い1箇所に両側から穿孔される。全体がよく研磨され、光沢を有する。石材は詳細な分析を行っていないが、薄い緑色を地としてマーブル状に白色が混じるもので、ネフライトとみられる。

(8) 石核

35～43は石核である。35の背面には、やや小型の横刃型石器の素材剥片を求心状に複数回剥がした剥離痕が残されている。正面にも一枚の大きな剥離痕が残されている。一方で裏面右側縁の剥離痕の末端はステップになっている。これらの剥離の後、放棄されたものと考えられる。石材は硬砂岩。36は両面とも求心状に剥離痕が残されている。その後、直接打法から両極打法へと打撃法を転換し、更なる剥片剥離を試みている。石材は珪質凝灰岩。37は大型の剥片を素材とする石核である。剥片を剥がした後、その剥離面を打面に一度剥片剥離を試みている。石材は凝灰岩。38～42は黒曜岩の原石に数回程度の剥離を加えているのみの石核である。そのうちの41はバイポーラ剥片を剥がした剥離痕が残されており、両極打法による剥片剥離が試みられていることを示唆している。43はホルンフェルス製の剥離面打面でバルブの発達した剥片を素材とする石核である。背面側には求心状に複数の剥離が残されており、この素材剥片もそうして剥がされたうちの一枚である。その素材剥片の打面を90度転移して剥片剥離を試みている。ただし十分な大きさの剥片を剥がすことが出来ず放棄されている。44の打面は自然面打面でコーンとバルブが発達している。末端部の形状は欠損のため不明である。

(9) 打製石斧

45～72は打製石斧である。刃部の形状はほとんど両刃のものが多数を占めるが、54のように片刃のものもある。概形はほとんどが短冊型であるが撿型のものも存在する。石材は硬砂岩と緑色岩が大半を占める。

(10) 磨製石斧

73～82は磨製石斧である。74や78などのいわゆる定角式磨製石斧や、76などの乳棒状磨製石斧なども見られる。83、84は自然面を多く残す磨製石斧の未成品である。石材は緑色岩が多いが、安山岩なども少数ながらある。

(11) 横刃型石器

85～123は横刃型石器である。そのほとんどが背面の自然面を多く残しており、素材剥片a（桜井 1986）を素材としていることをうかがわせる。石材の大半は硬砂岩。

(12) 石錘

124～140は石錘である。3～5cmの小型のものと、7～10cmの中型のもの二つに分けられるが、140のように13cm以上の大型のものもある。すべて打欠石錘。131は打製石斧が欠損したものを転用している。石材は硬砂岩が大多数を占める。

(13) 凹石

141～144は凹石である。144は地面に設置しての利用は困難な断面形をしており、手持ちでの利用が考えられる。また敲石として利用された痕跡も残されている。

145は敲石である。拳大でやや扁平で楕円状の垂円礫を素材とする。石材は緑色凝灰岩である。

(14) 特殊磨石

146～148は特殊磨石である。縄文時代早期にみられ、少なくとも立野式土器期には存在する。146も特殊磨石であるが、中央部はわずかに窪んでいる。欠損後に凹石として使用されたものであろう。石材は146が安山岩、146、147が硬砂岩である。

(15) 磨石

149～161は磨石である。大半は扁平な円礫を素材としているが、151など、楕円状の円礫を使用しているものもある。基本的に表面を機能部として使用しているが、152などは側縁も使用部としている。石材の大半は硬砂岩であるが、安山岩や花崗岩製のものもある。

(16) 石皿

162は石皿である。162は機能部が顕著に窪んでおり、使い込まれている。石材は花崗岩。

(17) 台石

163は台石である。研磨痕が見られるものの、機能部は平で、使用度合いに差が見られる。石材は花崗岩である。

(18) 砥石

164～170は砥石である。164～168は楕円状の砥石で、その中でも167や168は正面だけでなく側面にも研磨痕が見られるなど多面的に使用されている。165は極めて薄く定型的な砥石である。170は、機能部の反対側の面に凹凸があり、石皿のように地面に設置して使用するのには適していないが、折れによって平坦面になっている側面は地面に設置するのに適している。そのためこ

の面を設置したうえで砥石のように使用していたものと考えられる。石材は砂岩が多いが、粘板岩製のものもある。

(19) 石包丁

172～174は石包丁である。173は刃部が直線状であるものの、172は刃部が内湾し、174は内湾している。すべて磨製であり、打製の石包丁は当遺跡では見られない。石材は172、173が粘板岩で、174が緑色片岩である。

(20) 有肩扇状形石器

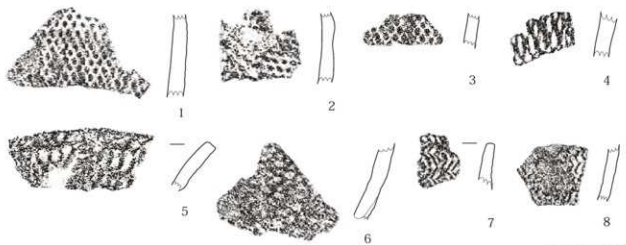
175～180は有肩扇状形石器である。横刃型石器と同様、素材剥片aを素材としている。177を除いて側縁の抉りは浅いものが多い。石材は硬砂岩のみである。

(21) 磨製石鏃

181～196は磨製石鏃である。竪穴建物からの出土が多くを占め、特にSI715で多数出土している。188、189は粗割段階のもので、研磨までには至っていない。181～187、190～192は研磨段階のもので、187などのように一部粗割時の剝離痕を残すものもあれば、184などように研磨が一層進んだものもある。193～196は磨製石鏃の完成品である。穿孔のあるものと、茎のあるものがある。石材のほとんどは粘板岩である。

(22) 紡錘車

197～198は石製紡錘車である。断面形は円形。石材はともに砂岩であるが、197は被熱を受けており、黒く変色している。



1 ~ 8 : S1161

9 ~ 21 : S1200

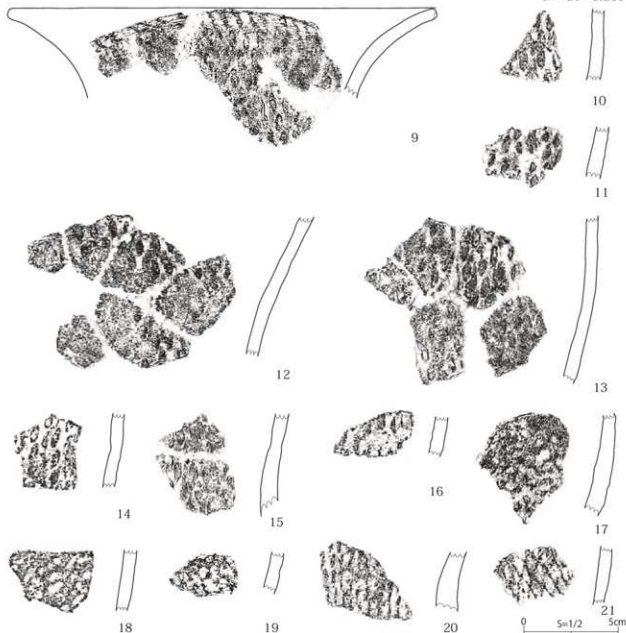


圖80 土器(1)

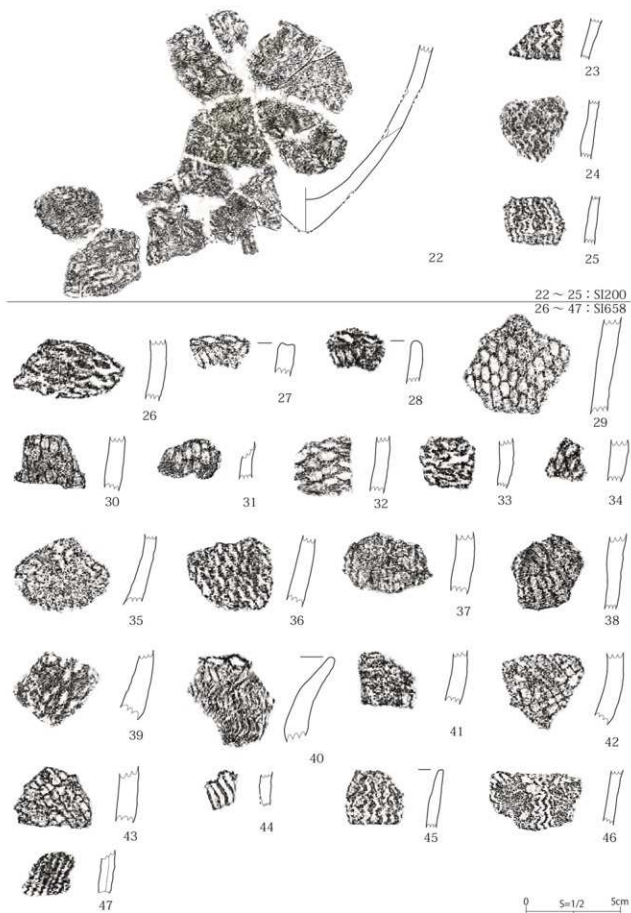


図81 土器(2)

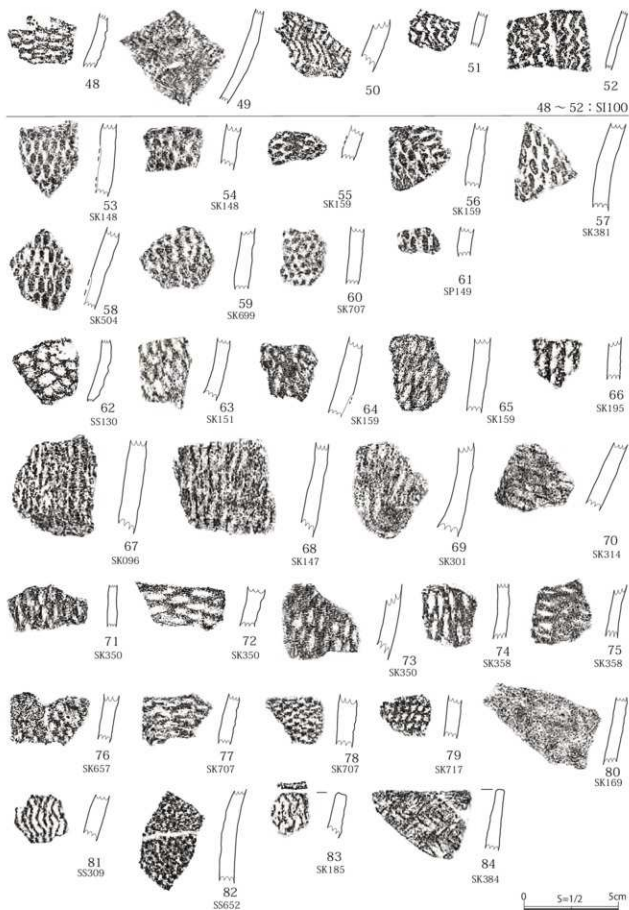


図82 土器(3)

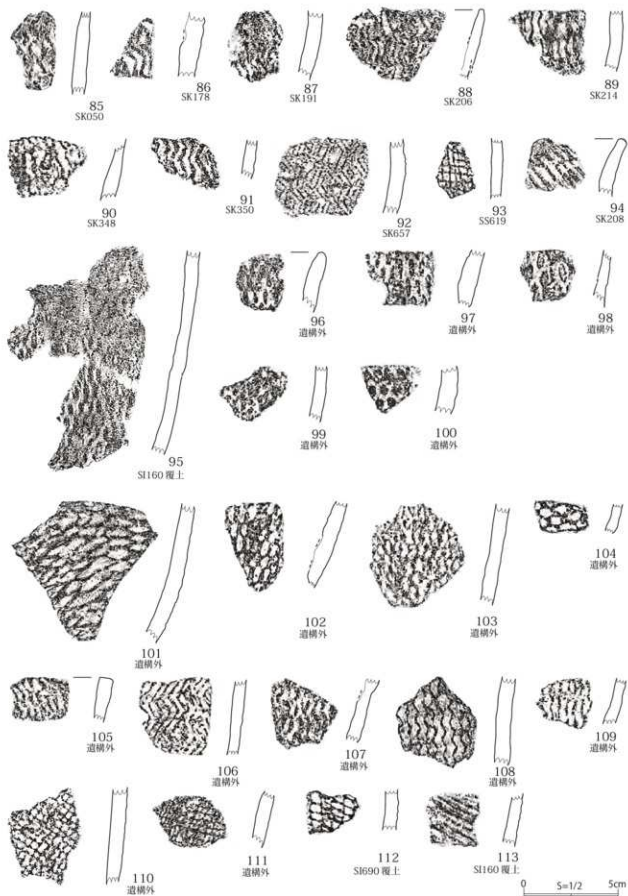


図83 土器(4)

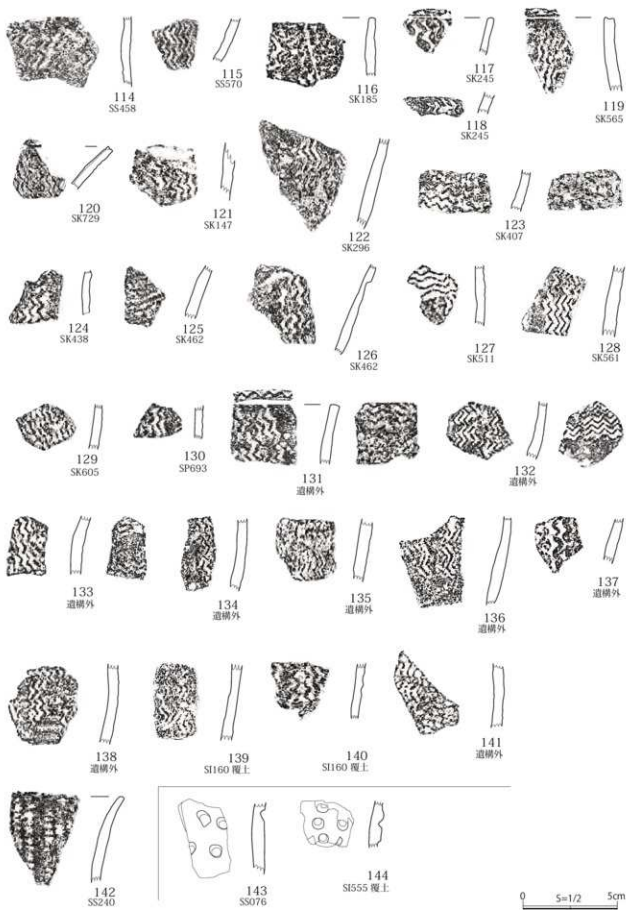


図84 土器(5)

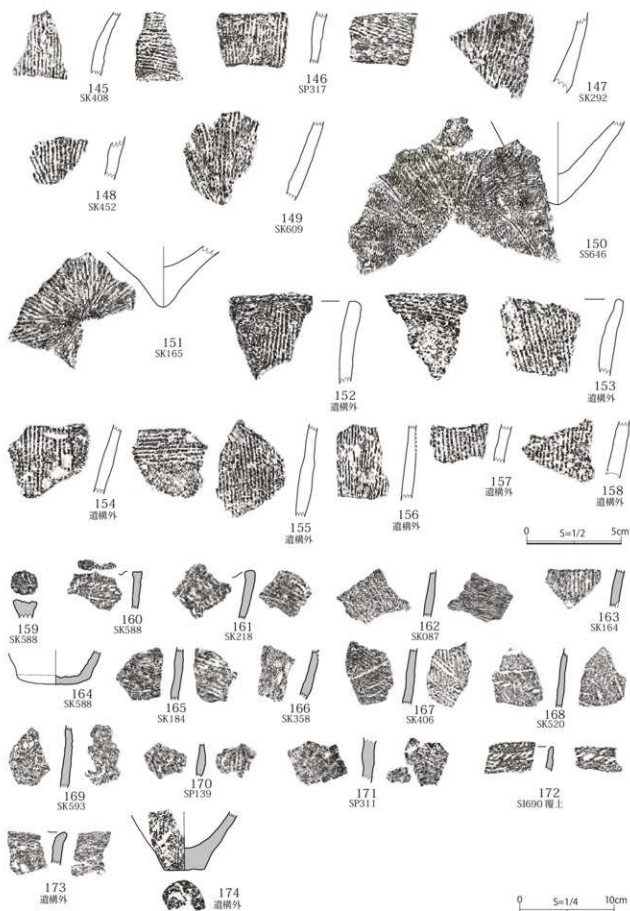
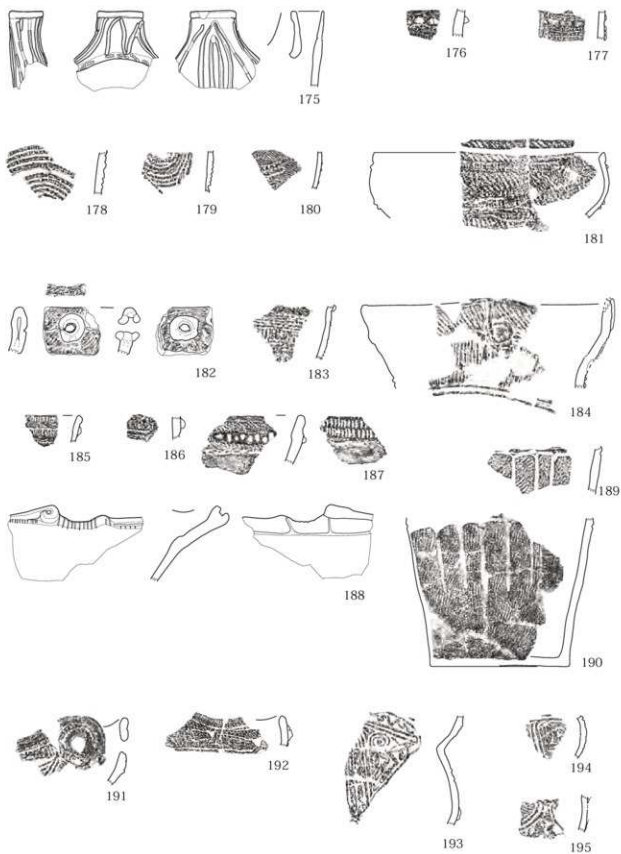


図85 土器(6)



175 ~ 195 : S1690 0 5=1/4 10cm

図86 土器(7)

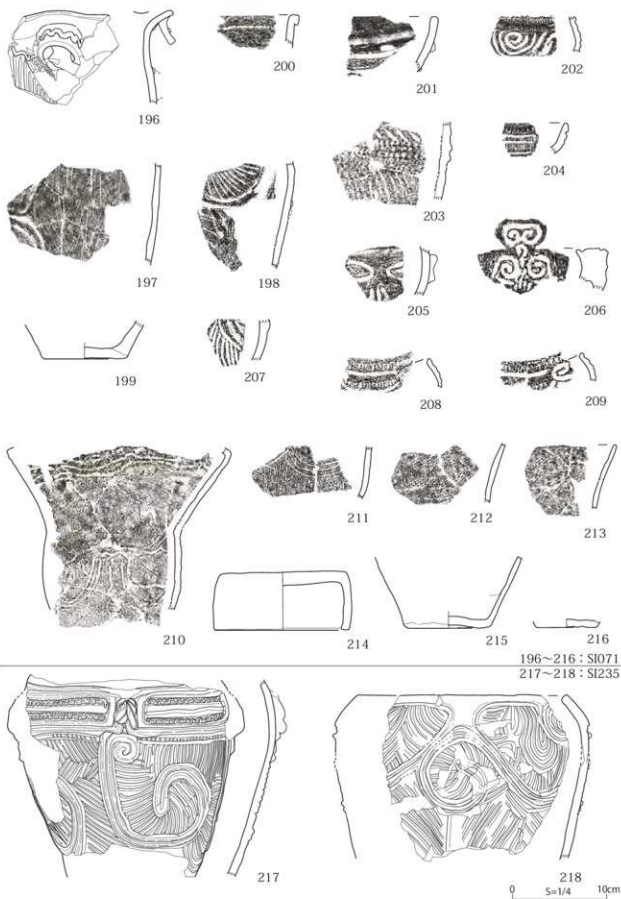
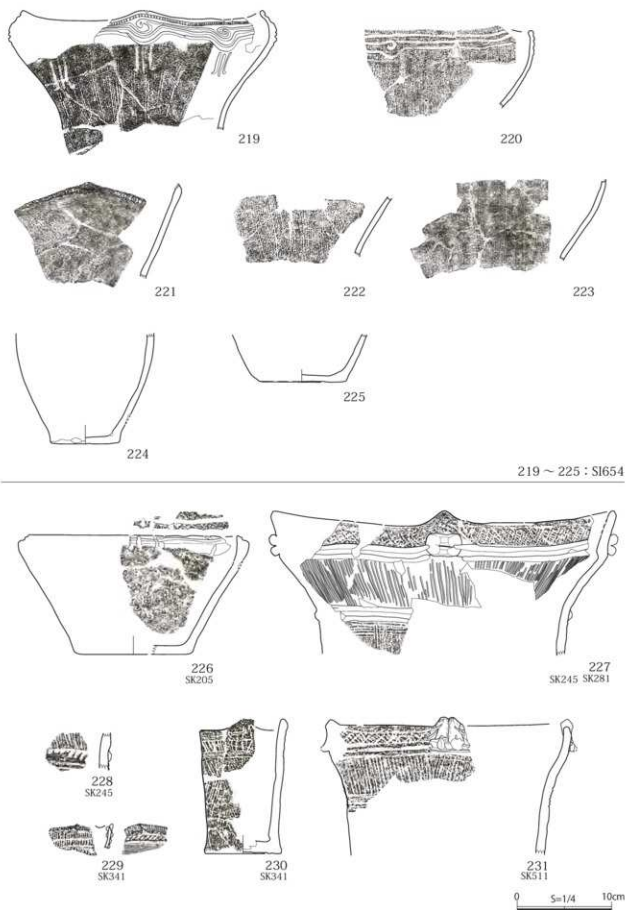


図87 土器(8)



219 ~ 225 : SI654

図88 土器(9)

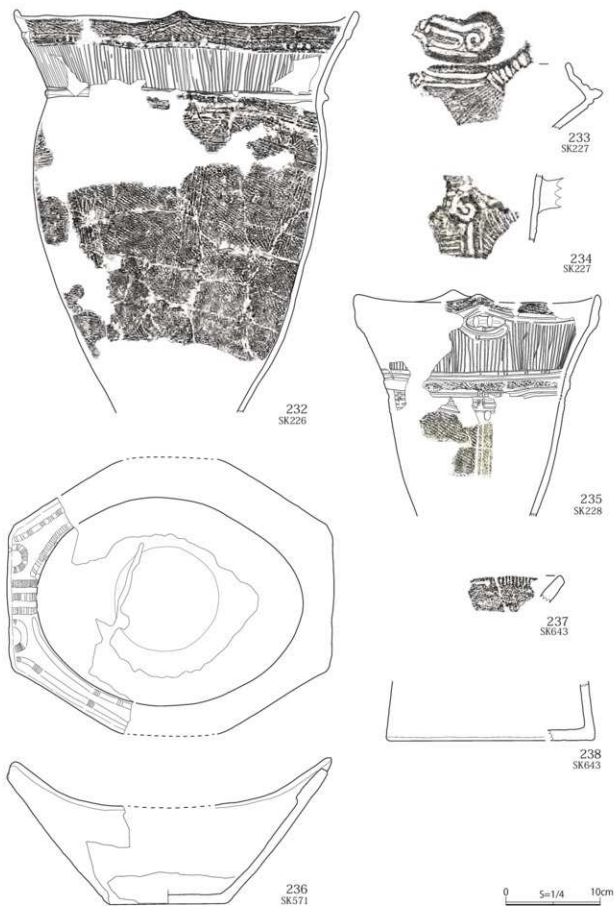


図89 土器(10)

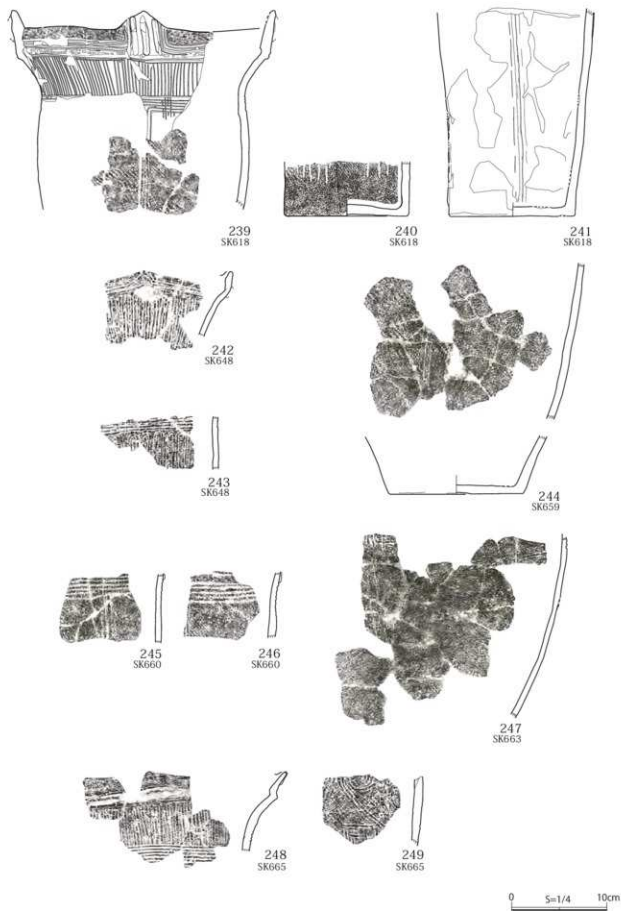


図90 土器(11)

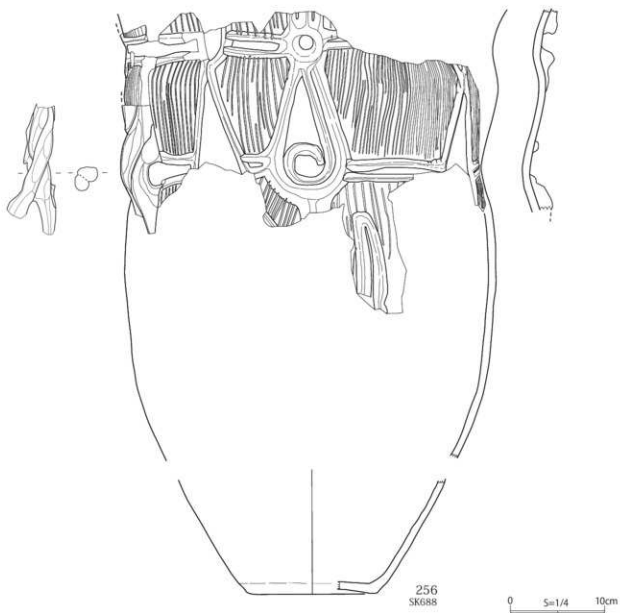
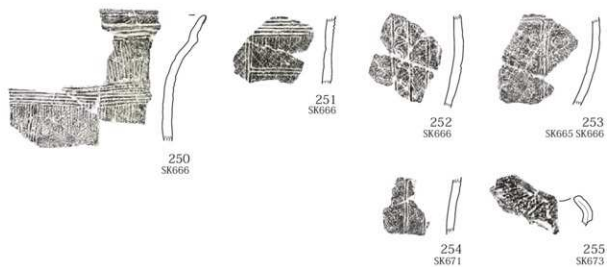


図91 土器(12)



図92 土器(13)

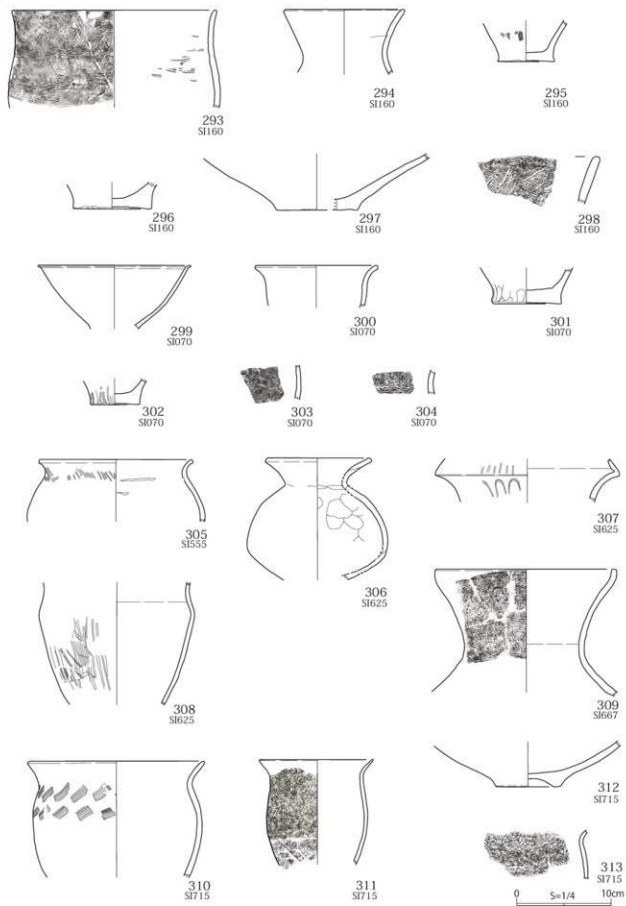


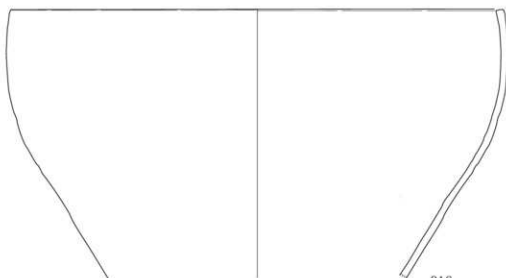
図93 土器(14)



314
SP357



315
SP678



316
SP693



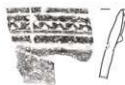
317
SP693



318
SP693



319
SP693



320
SP693



321
SK178



322
SI160 覆上

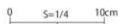
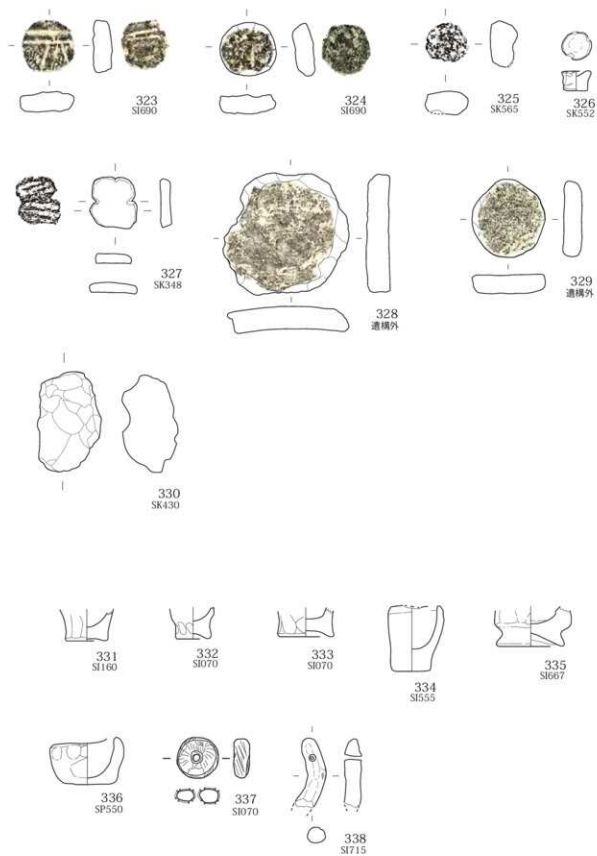


図94 土器(15)



0 S=1/2 5cm

図95 土製品

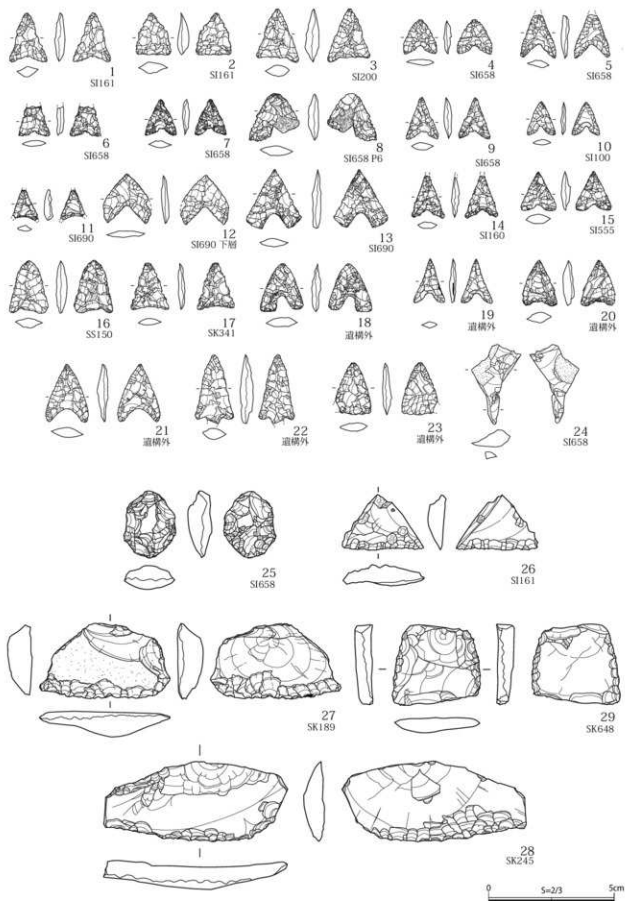


図96 石器(1)

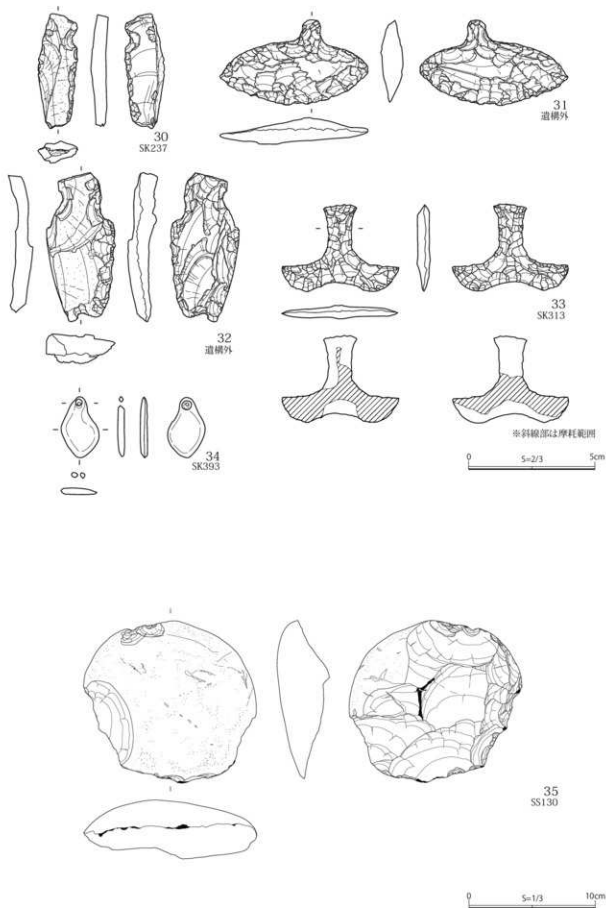


図 97 石器 (2)

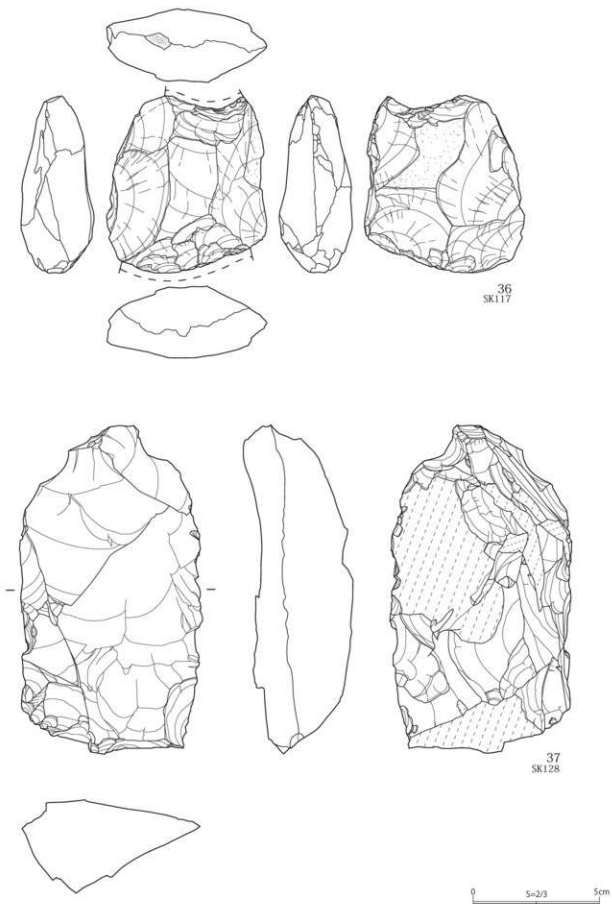


图98 石器(3)

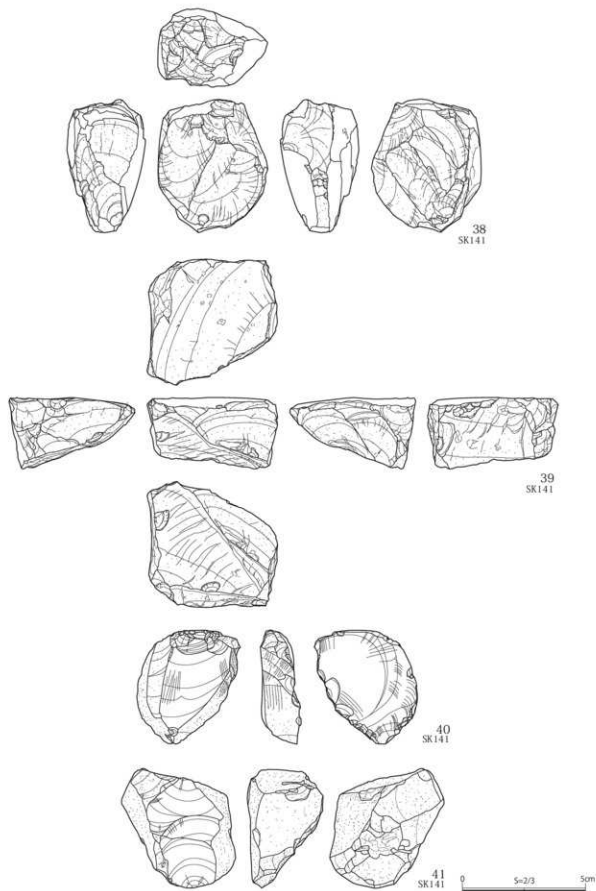


図99 石器(4)

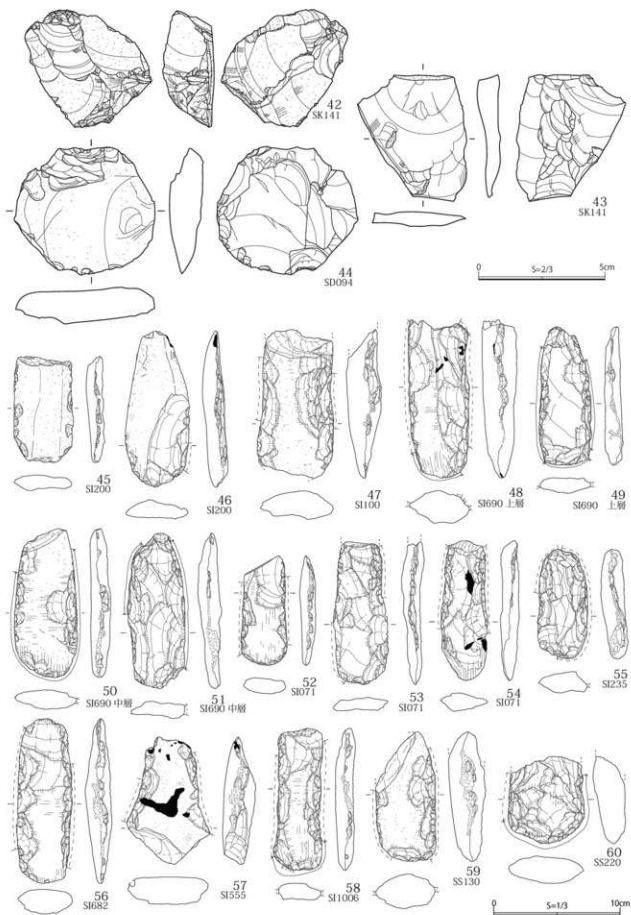


圖100 石器(5)

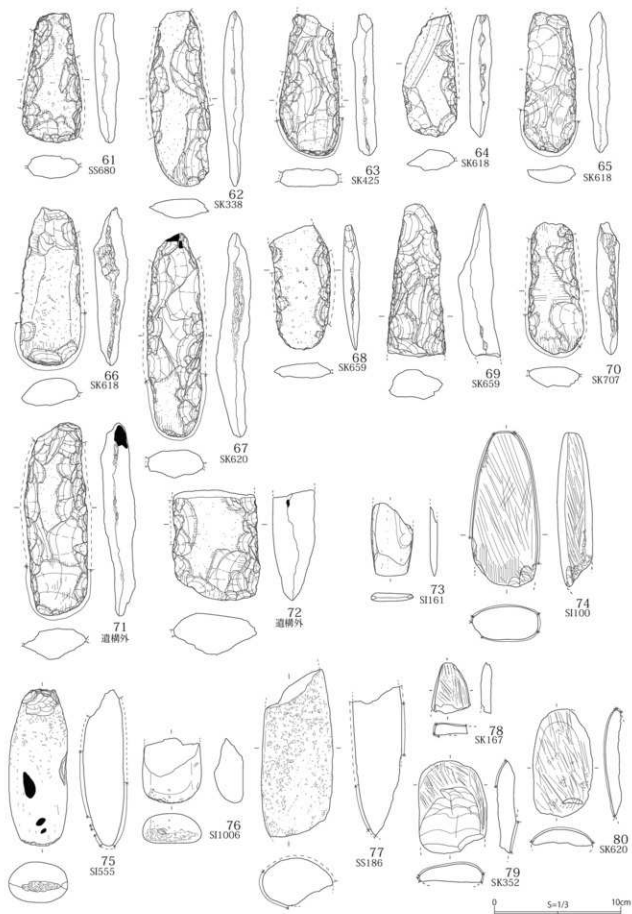


図101 石器(6)

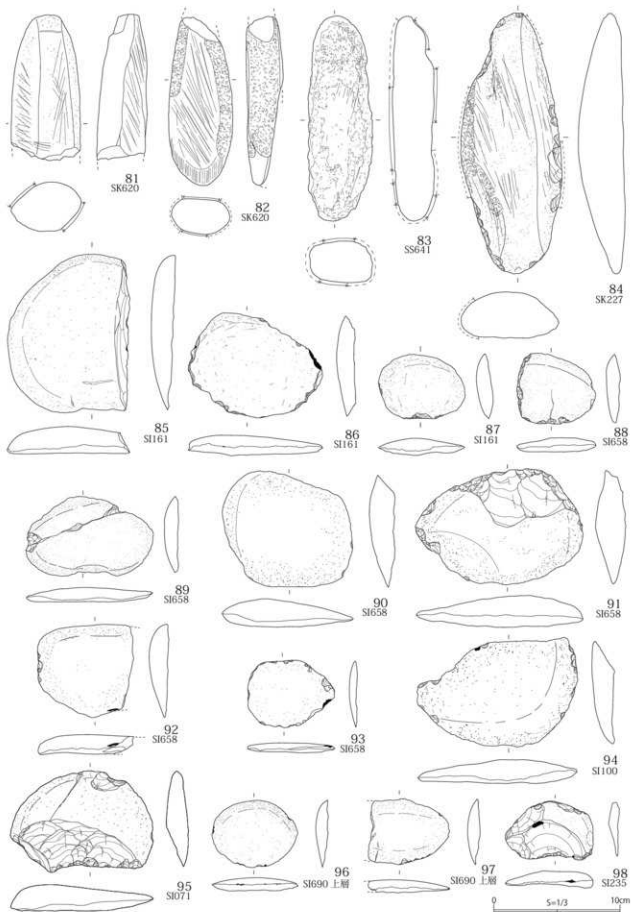


圖102 石器(7)

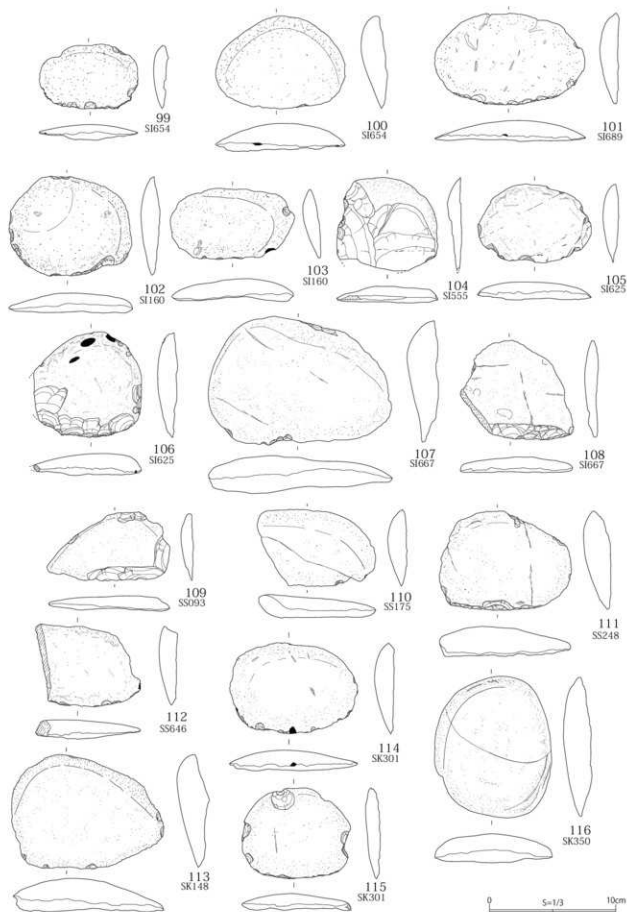


図103 石器(8)

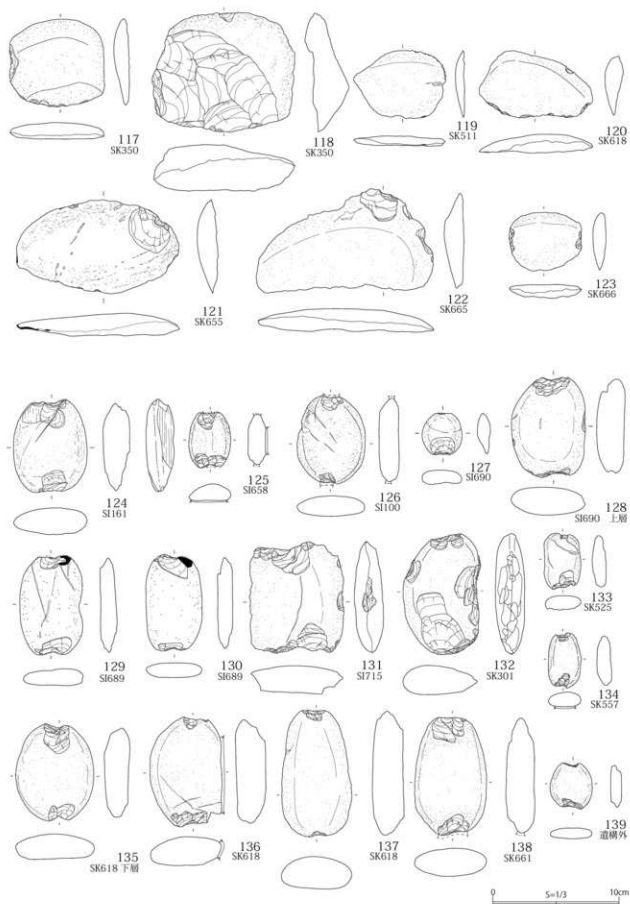


圖104 石器(9)

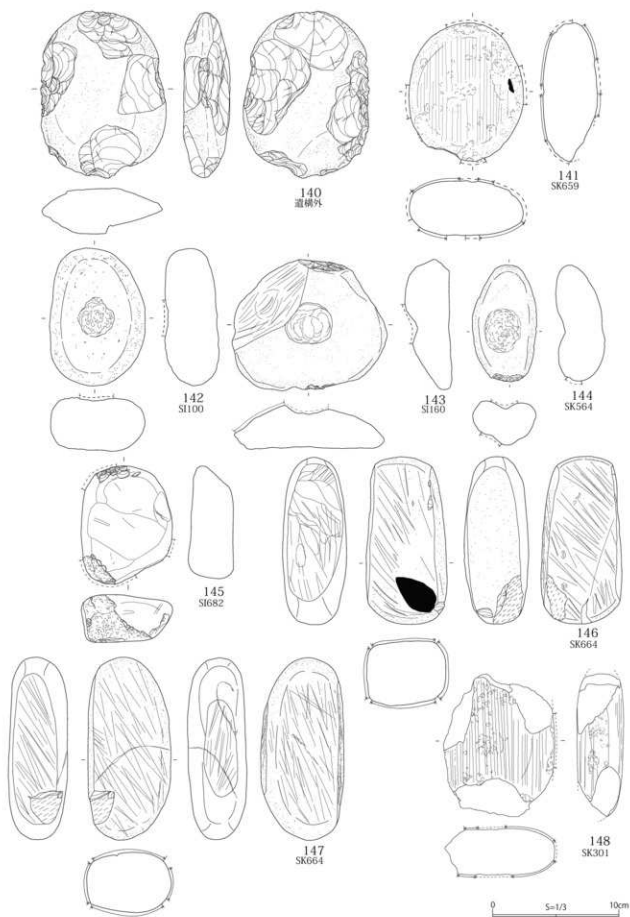


図 105 石器 (10)

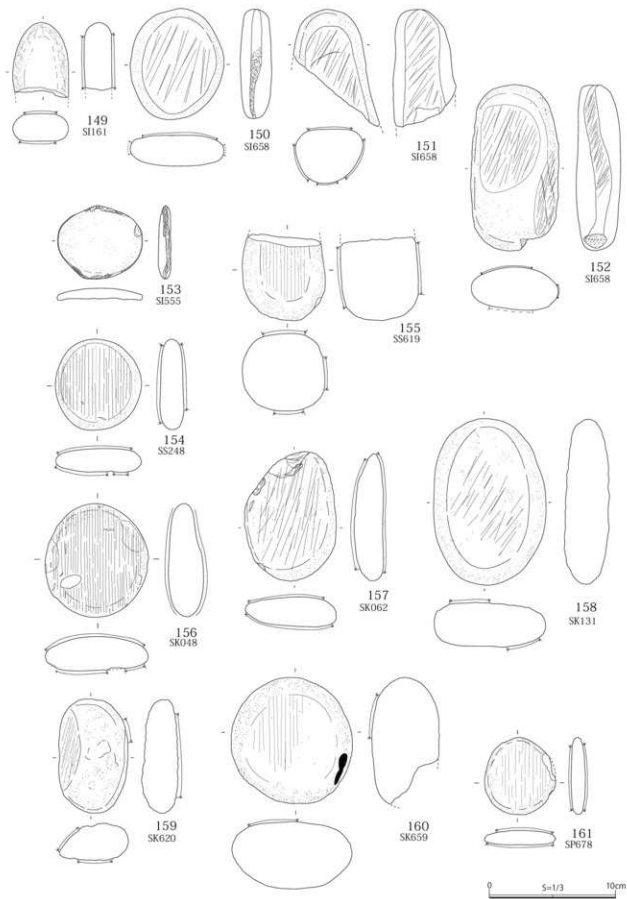


圖106 石器(11)

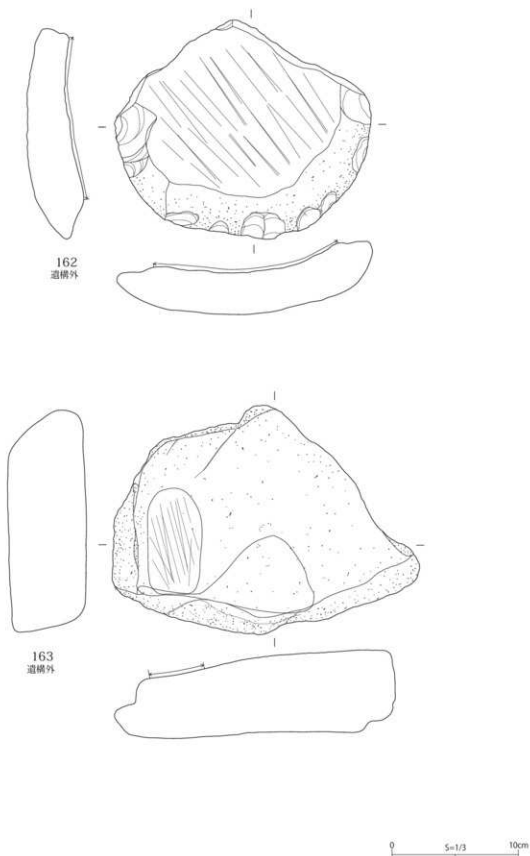


図107 石器(12)

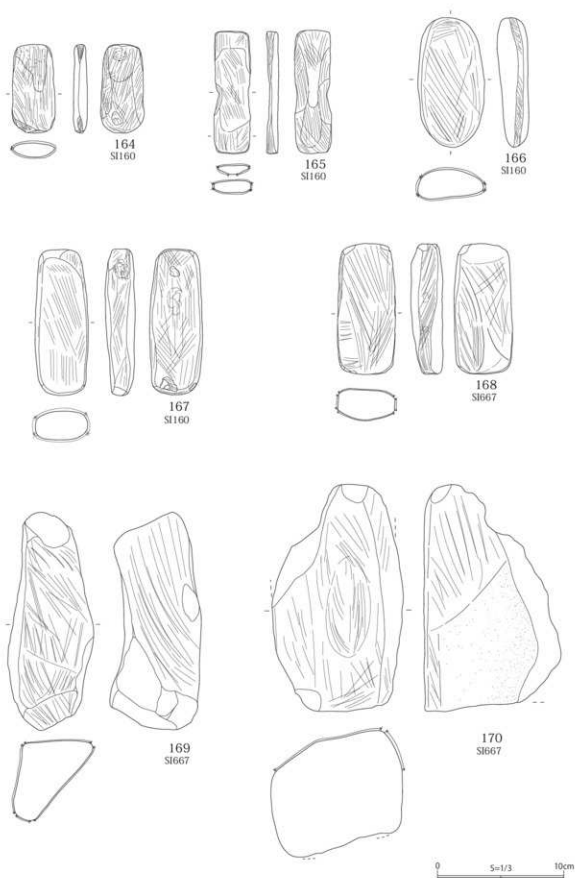


圖108 石器(13)

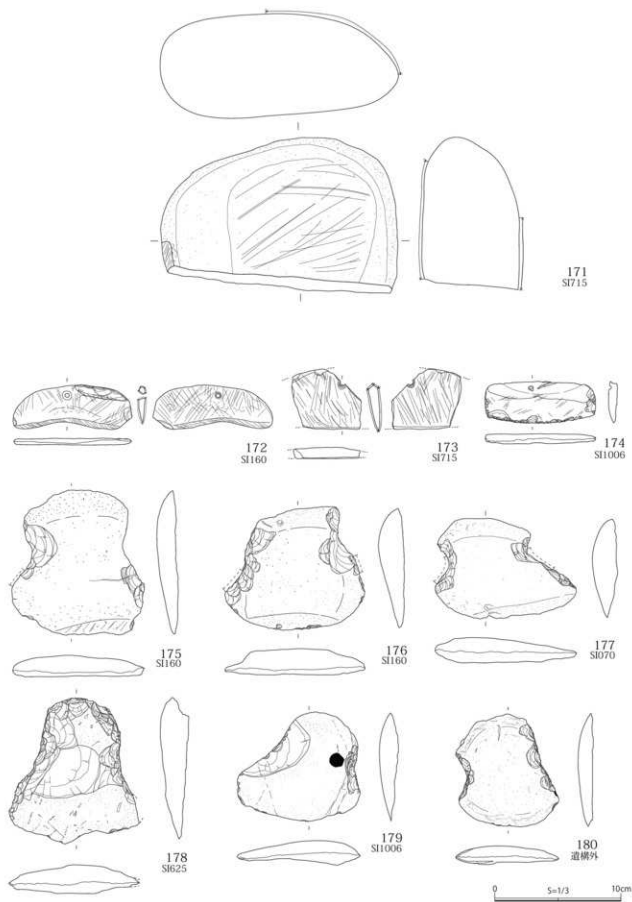


図109 石器(14)

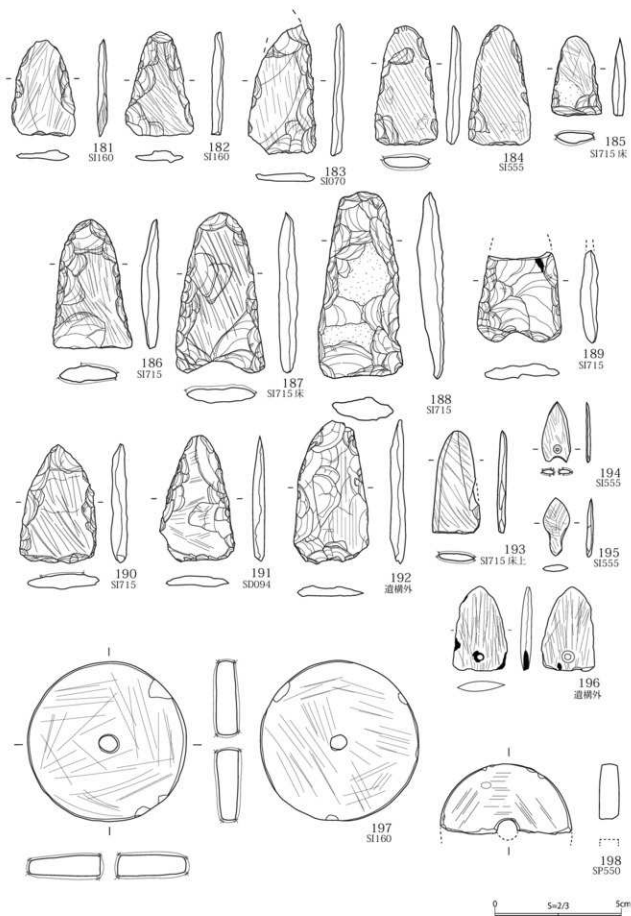


図110 石器(15)

第4章 総括

今次調査では約3,400mに及ぶ範囲を記録した。成果のうち特筆すべき事項を列挙し、若干の考察を加える。また、過去調査の成果と今次の成果を総合することで調査を総括したい。

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 立野式の押型文土器とその特徴

出土した押型文土器は胎土や器壁の厚さ、施文方法等に基づき、立野式とその他に分類した。このうち立野式の土器片について観察し、比較的多くの破片が出土した竪穴建物 SI200・SI658 と、その他の遺構・遺構外を含む遺跡全体の比率をそれぞれグラフにして図 111 に示した。まず、竪穴建物の文様の比率をみると、SI658 ではネガティブ文が、SI200 では楕円文が主体となり、それぞれの建物ごとに特色が認められる。一方で遺跡全体でみた場合は楕円文が最も多く、ネガティブ文と山形文がそれぞれ同程度の比率となり、その他は少数である。美女遺跡の報告では古相から新相にかけて格子目文の増加が指摘されているが（馬場 1998）、少なくとも、当遺跡は格子目文が主体とならないことは竪穴建物・遺跡全体に共通する特徴といえるだろう。

立野式については本型式を設定した神村透が一貫して中部地方最古の押型文土器と主張してきた（神村 1969 ほか）。近年では「立野式の復権」（池谷・守屋 2001）により、立野式を古相とみる認識が広まりつつあるが、同じ中部高地の押型文土器である樋沢・細久保式や飛騨地方の沢式、さらに関西や東海地方の押型文土器との並行や影響の関係は未だに大きな問題となっている。今回は層位的に良好な事例ではないものの、市内では美女遺跡や石子原遺跡に続く集落の確認がされ、長野県南部における立野式の分布を補強する事例となった。

年代について、SI200 から出土した土器（土 12）付着炭化物を試料として実施した放射性炭素年代測定の結果は $8610 \pm 35\text{yrBP}$ 、暦年較正後で 9680～9530 calBP であった。立野式の押型文土器は C14 の分析がされた例が少ないが、美女遺跡の土器付着炭化物の測定（遠部ほか 2008）では

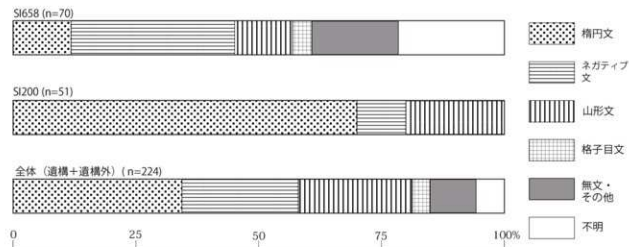


図 111 黒田大明神原 B 遺跡出土押型文土器の文様別組成

9285 ± 25yrBP、9310 ± 30yrBP、南相木村の大師遺跡（南相木村教育委員会 2016）で 9240 ± 40yrBP の結果が出ている。これらに対し、今回の値はむしろ早期中葉にかかるであろう細久保式の押型土器や、関西の黄鳥式に近い（小林 2017）。これまでの成果と比較すると明らかに新相を示しており、他土器型式との並行関係、あるいは立野式の新相・古相を評価するうえで参考となりうる。しかし、分析された事例自体が不足している現状においては、今回の結果のみで立野式の年代を特定するには至らない。層位的な検証も含め、他の事例の蓄積と分析に委ねたい。

（2）早期集落における集石・被熱土坑

今次調査では集石と被熱土坑が多数確認された。これらのうち集石 SS386 と SS458 及び被熱土坑 SK614 は炭化物の放射性炭素年代測定により縄文早期前葉の年代が得られた。しかし、SS175 では前期末～中期初頭、SS680 では中期後葉の年代も得られており、集石のすべてが早期に該当するわけではないことも重要な結果である。

当遺跡で確認された集石は平成 7 年度の 28 基と今次調査の 37 基を合わせて総数 65 基を数え、当地域でも屈指の数である。平成 7 年度の調査時に把握された集石は、掘り込みの有無、礫の数及び密集度合い、礫の赤化の有無等によって A～E の 5 種に分類され、それぞれが集石の使用→廃棄の過程を示すものと評価された（下平 1997）。今次調査においては、新たに把握された集石を構築方法と礫の密集の度合いによって 1 類・2 類・3 類の 3 種に分けた。1 類と 2 類は底部に礫を敷くもので、火を使用した痕跡を有するものが多い。対して 3 類は礫を底部に敷かないもので、火の使用が確実な例は稀であった。下平分類の E 類は今次調査の 1 類に、A～D 類は 3 類に相当する。これらは下平の指摘のとおり、礫を調理等のため用い、使用後に礫が廃棄された一連の段階を示すものであろう。今次調査の結果をふまえると、1 類は 2 類と同様に屋外炉として使用されたとみる。これに対し、3 類は使用した礫を投棄することを主な目的とした遺構と考える。

周辺の遺跡では美女遺跡、川路大明神原遺跡（長野県埋蔵文化財センター 2010）、石子原遺跡（長野県埋蔵文化財センター 2007）において集石が多数確認されている。それらは共通して被熱土坑をとまなうことから、早期の集落における集石と被熱土坑はセットで評価すべき遺構といえる。今後の課題として、これらが時間的・空間的にどのように展開するか、土器型式とともに評価することが必要となるだろう。

（3）縄文中期初頭～中葉の土器について

今次調査において出土した土器は時期・種類ともに豊富だが、中期初頭から中葉にかかる段階の土器が多くを占める。これらは頸部に平行沈線を施文することに特徴づけられる在地の土器、厚手の八ヶ岳山麓系、東海系に大別されるが、平行沈線の土器はいわゆる「平出第三類 A」（平出三 A、平出遺跡調査会編 1955）に類似する一群である。総じて頸部の沈線は比較的密で丁寧であり、文様帯の間隔はやや狭く、地文に縄文を用いるものが多い。また、頸部と胴部の間に押圧隆帯をもたないものがほとんどである。これらの特徴から、平出三 A の成立途上の段階とみられ、中期初頭の五領ヶ台式～貉沢式並行期と考えられる。このタイプの土器が出土した土坑 SK618 では、炭化物の放射性炭素年代測定により、暦年較正後で 5304～5050calBP の値が得られている。

八ヶ岳山麓系の土器の代表として、SK571 の浅鉢（土 236）がある。この浅鉢は諏訪郡原村大石遺跡（長野県教育委員会 1976）出土の浅鉢と器形、文様ともにほぼ一致する。胎土や焼成も在地の土器とは明らかに異なり、搬入されたものである。貉沢式段階に相当するもので、中期中葉の初頭

における中部高地の影響が当地へ及ぶことを示す。市内の近い時期の集落として川路大明神原遺跡（長野県埋蔵文化財センター 2010）や城陸遺跡（飯田市教育委員会 2003）などがあり、これらの遺跡においては、猪沢～新道式と並行する土器とともに平出三Aも出土しているが、黒田大明神原B遺跡で確認された平行沈線の土器群はそれより時期がやや遡る段階、つまり中期初頭から中葉への過渡期であり、当該期を考えるうえで参考となる資料群といえる。SK618におけるC14の成果も併せて今後活用が望まれる。

2 弥生時代の炭化穀類等について

弥生時代のピットから炭化した穀類等が検出された。これらはバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼して自然科学的な分析を実施した。詳細は付章「黒田大明神原B遺跡出土炭化物の自然科学分析」を参照されたが、ここで調査時の所見も含めてまとめておく。

今回の成果として特筆すべきピットはSP321、SP357、SP678、SP698である。SP357はイネ、クリ、マメ類が認められた。このうち分析の対象としたマメ類はアズキ亜属729個、ダイズ属は11個⁽¹⁾、を数え、その量・種類ともに最も多い。対してSP321ではイネとクリ2点、SP678はクリ1点のみであった。

弥生時代の穀類を埋納した遺構は当地域において類例がほとんど知られないものであり、極めて稀な事例である。これらの性格を特定することは困難であるが、共通する点をまとめてみたい。まず、イネやマメ、クリそれぞれが種実の状態を保っていたこと、さらにいずれも破砕された土器片を作ることが挙げられる。種実は生のままでは土中で腐食して残らないはずであるが、炭化したために形状が残ったと推察される。また、炭化種実に伴う土器片は壺や甕であり、これらは一連の行為のなかで用いられたとみるのが自然である。炭化物の中に穀類だけでなく樹木（ヒノキ・クリ）も混じることから、これらは種実を火にかけた際の燃料の可能性がある。炭化した穀類が行為のなかで具体的にどのように使用されたかは不明だが、最終的に穀類はピットの中に投棄され、さらに土器も破砕されて一緒に埋められている。

以上から、少なくとも食用に供するための調理はされておらず、単に遺棄されたものとも考えられない。推察の域を出ないが、貴重な栽培種であるイネやマメを用いていることから、農事に関係する儀礼・祭礼であろうか。いずれにしても、当地域において弥生時代のイネ、マメ等の一体的な栽培・利用が確認されたことは、当該期の生活文化の考究において大きな価値を有する。性格を明らかにするため、事例の蓄積とさらなる分析に期待することとしたい。

3 石器について

縄文時代の剥片石器の石材は黒曜岩が圧倒的に多い。そのほかではチャートや下呂市の湯ヶ峰で算出する下呂石などが少数見られる。しかしながら、さらに少数であるがメノウやホルンフェルス、珪質凝灰岩などの石材も含まれる。近辺のメノウの産地としては愛知県との県境に位置する茶臼山が知られるが、20のメノウとは色調は異なる。ホルンフェルスは牛佐中原遺跡の石器石材と同様に、阿知川のもと思われる。珪質凝灰岩のいくつかは愛知県の設楽を中心とする奥三河の珪質凝灰岩とされるものに近い。また異形石器の石材は当該遺跡では唯一のものであり、その産地は不明である。遠方からの搬入品の可能性も視野に入る。またネフライト製の石製品も出土している。一方で打製

石斧や横刃型石器などの、そのほかの石器に関しては天竜川で容易に採取可能な硬砂岩などの飯田下伊那地域で普遍的に見られる在地石材を利用している。当該遺跡で出土した石器石材のほとんどは飯田下伊那の特色ある石器石材環境の様子を表す一方で、ごく少数のみ出土した石器石材からは、広域にわたる石材流通の複雑な様子を示していると言える。

立野式期に比定される SI658 で出土した石鐮はいわゆる Y 字形石鐮とされるものであり、立野式期に見られる石鐮型式とされている（神村 1978）。また 5 のように近畿地方の神宮寺式期に伴うとされる概形が逆 V 字形の石鐮がある。立野式期に逆 V 字形の石鐮が出土することが指摘されており（小栗 2011）、本事例もそれと矛盾しない。なお当該地域では美女遺跡などごく少数出土しているのみである。また当該遺構からは石斧の未成品が出土している。当該期においては石斧の出土例は少ない（田部 2014）。今回の出土は貴重な一例と言える。同じく押型土石器期の遺構である SI100 からも Y 字形の範疇でとらえられる石鐮が出土している。また遺構外からは鍔形鐮が出土している。基部の挟りが U 字状のものは細久保式期に伴うとされている（町田 2003）。これは当該遺跡で立野式期とは異なるタイプの押型土石器が出土していることは矛盾しない。

SK141 からは複数の黒曜岩の石核・原石とチャート製の剥片がまとまって出土している。おそらく剥片石器の素材として獲得したものを一括に集めていた集積遺構である。

弥生時代後期の竪穴建物である SI715 からは磨製石鐮と粗割段階のものも含む未成品が出土している。このことは磨製石鐮製作における一連の工程が当該遺構で遂行されていたことを意味する。

当該遺跡出土遺跡で特出すべき石器として被熱痕跡のある石鐮と異形石器が挙げられる。11 のような被熱痕跡の残されている石鐮はこれまでほとんど報告されておらず今回の出土はその貴重な事例の一つである。概形が鎗型の異形石器の近隣の類例は伊久間原遺跡（喬木村）や溝林遺跡（宮田村）、木曾谷のマツバリ遺跡（木曾町）で確認されている。

4 黒田大明神原 B 遺跡における集落と変遷

これまでの調査成果を基に当該遺跡における集落の変遷について簡潔に述べ、調査を総括する。

縄文時代 調査地点付近で早期前葉の立野式の段階には数件単位の集落が営まれ、おそらく屋外炉として使用されたであろう被熱土坑や集石をともなう。早期末葉には東海系条痕土器が用いる人々が居住している。

前期前半には数棟の建物が集落を形成する。その中心は台地の先端から東側斜面に近い平成 7 年度調査地点である。前期末にも竪穴建物が存在し、中部高地や関東・北陸との繋がりが看取される。

中期初頭から中葉の過渡期にかけて土坑が多数確認された。その多くは土器を収めた埋納坑であり、性格は不明なものが多いが、土坑や遺物の量に反して竪穴建物は少ない。大明神原一帯では少数だが住居址が確認されており、集落域は当該遺跡とは別の地点に存在していた可能性もある。

中期中葉末～後葉初頭の段階は当該遺跡においてほとんど確認されていない。一方、現在の黒田大明神原 A 遺跡にあたる平成 8 年度調査地点においてはこの段階の住居址が多く検出されており、当該時期の中心は当該遺跡南方の A 遺跡の丘陵上にあつたとみられる。

中期後葉の前半（吉川 2008 の第 2 段階～第 3 段階中相、坂井 2017 のⅡ段階古相～Ⅲ段階古相）に当該遺跡において集落が営まれる。竪穴建物は段丘崖からやや離れた小河川に面した日当たりの良い地点を選んだとみられる。しかし、中期後葉の末には建物が 1 棟のみ確認されているにすぎない。また、後・晩期は少数の土坑や遺物が認められるのみである。

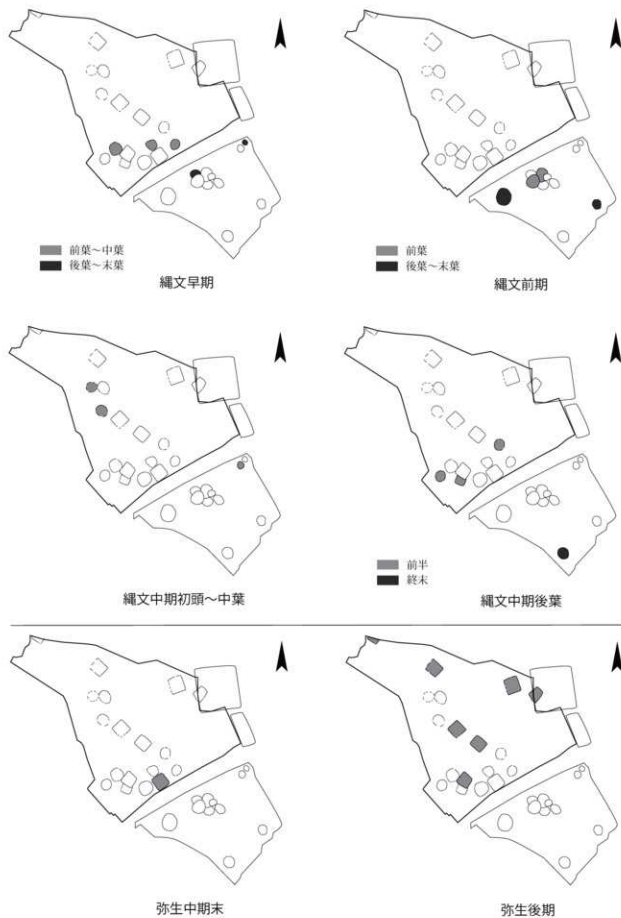


図 112 黒田大明神原 B 遺跡の時期別竪穴建物変遷

弥生時代 中期末から集落の形成が始まる。中期末の竪穴建物は1軒であり、非常に小さい単位での居住であったことは疑いない。山下誠一が指摘したように、低位段丘上の集落を拠点として土曾川を遡上するように高位段丘へ進出していった(山下 2000)とすると、土曾川下流の中心的集落として丹保遺跡や恒川遺跡群があり、これらが移住集団の母体となった可能性がある。竪穴建物 SI160 は大明神原一帯において最も古い段階の弥生竪穴建物に位置付けられ、以後に人々の居住域が高位の段丘上に広がっていく端緒であろう。

後期には伊那盆地全体の集落動向と軌を一にする形で大明神原一帯で竪穴建物の件数が増加し、黒田大明神原 A 遺跡と当遺跡のそれぞれにおいて集落が展開する。当遺跡の丘陵の頂部が居住域となり、その周囲の小河川や湿地が稲作や畑作などの生産域となったとみられる。後期末頃まで集落が営まれるが、古墳時代には継続しない。

以上、当遺跡における集落の動態を簡潔にまとめた。旧上郷町時代から始まった開発に伴う調査が大きな画期を迎えた現在までの成果を整理し、将来への布石となれば幸いである。

註

(1) マメについては委託業者へ試料を提出した後で SP357 出土炭化物を再精査したところ、新たに 11 個を確認した。したがって、本遺構出土マメ類はアズキ亜属 729 個、ダイズ属 11 個に分析試料から漏れた 11 個を加えた 751 個である。

引用・参考文献

- 小栗康寛 2011 「押型文土器に伴う刺突具の変遷—近畿から東海を中心に—」『押型文土器期の諸相』、関西縄文文化研究会、pp.3-19
- 池谷信之・守屋豊人 2001 「関東・中部・東海地方 早期(押型文系土器)」『縄文時代』10、pp.3-13
- 遠部慎・宮部佳樹・小林謙一 2008 「飯田市美女遺跡の土器付着炭化物の炭素 14 年代測定」『飯田市美術館研究紀要』18
- 神村透 1969 「立野式の扁年の位置について(七)—その 1 立野式土器の登場—」『信濃』21(9)、信濃史学会、pp.42-56
- 神村透 1978 「石鐮を見て一群と型式からの私考—」『信濃』30(11)、信濃史学会、pp.98-108
- 小林謙一 2017 「縄文時代の実年代—土器型式扁年と炭素 14 年代—」、同成社
- 坂井勇雄 2017 「下伊那地域における縄文時代中期土器の様相」『文化の十字路 信州 日本考古学協会 2017 年度長野大会 研究発表資料集』、日本考古学協会・長野県考古学会
- 桜井弘人 1986 「2 石器」『恒川遺跡群—遺物編—』、飯田市教育委員会
- 下平博行 1997 「3. 縄文時代の集石について」『黒田大明神原遺跡』、飯田市教育委員会
- 田部剛士 2014 「中部高地における押型文土器期の石器群についての覚書」『東海地方における縄文時代早期前葉の諸問題: 発表要旨集・研究論文集』東海縄文研究会、pp.177-186
- 馬場保之 1998 「第 1 章 美女遺跡の土器について」『美女遺跡 遺物編』、飯田市教育委員会
- 藤森英二 2019 「栃原岩陰遺跡発掘調査報告書」北相木村教育委員会
- 町田勝則 2003 「押型文文化の石器を考えるにあたり」『利根川』24・25、利根川同人、pp.17-34
- 御堂島正 2018 「黒曜岩の被熱痕跡」『旧石器研究』14、日本旧石器学会、pp.17-32
- 吉川金利 2008 「唐草文系土器」『総覧縄文土器』、アム・プロモーション

- 山下誠一 1999 「飯田・下伊那の弥生土器」『99 シンポジウム「長野県の弥生土器編年」発表要旨」、長野県考古学会弥生部会
- 山下誠一 2000 「飯田盆地における弥生集落の動向—発掘された竪穴住居址を基にして—」『飯田市美術博物館研究紀要』10

報告書他

- 阿南町教育委員会 1995 『根吹遺跡発掘調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1997 『黒田大明神原遺跡 平成7年度緊急地方道整備B工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1998 『美女遺跡 遺物編』
- 飯田市教育委員会 1999 『黒田大明神原遺跡Ⅱ 平成8年度緊急地方道整備B工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1999 『大門原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1999 『三尋石遺跡Ⅲ』
- 飯田市教育委員会 2000 『黒田大明神原遺跡Ⅲ』
- 飯田市教育委員会 2003 『城陸遺跡』
- 上郷町教育委員会 1985 『黒田大明神原 第一次発掘調査報告書』
- 上郷町教育委員会 1986 『黒田大明神原Ⅱ 第二次発掘調査報告書 付 正明庵跡発掘調査報告書』
- 上郷町教育委員会 1990 『大明神原遺跡Ⅲ 土地改良総合整備事業大明神原地区に伴う発掘調査報告書』
- 信濃町教育委員会 2001 『市道遺跡発掘調査報告書』
- 平出遺跡調査会 1955 『平出 長野県宗賀村古代集落遺跡の総合研究』
- 長野県教育委員会 1976 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 一茅野市・原村その1、富士見町その2— 昭和50年度』
- 長野県埋蔵文化財センター 2007 『石子原遺跡 山本西平遺跡 辻原遺跡 赤羽原遺跡』(長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書80)
- 長野県埋蔵文化財センター 2010 『川路大明神原遺跡』(長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書87)
- 能登町教育委員会 1985 『石川県能登町真脇遺跡』
- 南相木村教育委員会 2016 『大師遺跡 縄文時代編』(南相木村誌編纂調査報告第2集)

付章 黒田大明神原 B 遺跡出土炭化物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
田中義文・東澤翔・松元美由紀

はじめに

黒田大明神原 B 遺跡（長野県飯田市上郷黒田地内）は、天竜川の右岸に分布する河岸段丘上に立地する。当遺跡及び周辺では、これまでの発掘調査の結果、縄文時代早期～中期の竪穴住居跡、弥生時代後期の竪穴住居跡や方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居跡などが確認されている。今回の黒田大明神原 B 遺跡の発掘調査では、縄文時代早期～中期、弥生時代後期の遺構が確認されている。

本報告では、黒田大明神原 B 遺跡から出土した炭化物を対象として、植物利用や植生、遺構や遺物の年代に関わる資料の作成を目的として、炭化物同定（炭化材・炭化種実同定）および放射性炭素年代測定を実施した。

1. 試料

試料は、縄文時代の土坑や落し穴、集石、弥生時代の竪穴建物やピット等から出土した炭化物 21 試料と、縄文時代の竪穴建物から出土した炭化物が付着する土器片の計 22 試料である。各試料の出土位置・調査所見および種別等を表 1 に示す。

これらの試料のうち、炭化物 21 試料は全点を対象として炭化材・炭化種実同定を実施する。また、計 22 試料のうち、選択された 14 試料を対象に放射性炭素年代測定を実施する。なお、放射性炭素年代測定の対象とされた試料は、表 1 に並記したので参照されたい。

2. 分析方法

(1) 炭化物（炭化材・炭化種実）同定

炭化材は、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本およ

表1. 試料一覧および炭化物（炭化材・炭化種実）同定結果

No.	試料名 (出土遺構)	試料の性格等	調査所見	種別	種類 (分類)	14C ^δ
R1-1	S614		縄文時代の焼熱土坑	炭化材	クワ	○
R1-2	S618		縄文時代中期初頭の遺物を伴う土坑	炭化材	ハンノキ属	○
R1-3	S1625 P4(土柱穴)		弥生時代後期の竪穴建物	炭化材	サシギリ科?	○
R1-4	S600		縄文時代の集石	炭化材	クワ	○
R1-5	S6707		縄文時代の落し穴	炭化材	サシギリ科?	○
R5-S-1	S5175 No1		縄文時代の集石	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ類	○
R5-S-2	S5406		縄文時代の集石	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ類	○
R5-S-3	S9678		弥生土器片・炭化物を埋納するピット	炭化材	クワ	○
R5-S-4	S9678		弥生土器片・炭化物を埋納するピット	炭化種実	クワ・子葉	○
R5-S-5	S5206		縄文時代の集石	炭化材	クワ	○
R5-S-6	S1209 No12		縄文時代の竪穴建物。出土土器は立脚式土器主体	土器(内面付着炭化物)	—	○
R5-K-1	S9221		弥生土器片・炭化物を埋納するピット	炭化種実	イネ・稲葉	○
R5-K-2	S9221		弥生土器片・炭化物を埋納するピット	炭化材	ヒノキ	○
R5-K-3	S9352		弥生土器片・炭化物を埋納するピット	炭化種実	イネ・稲葉	○
R5-K-4	S9352		弥生土器片・炭化物を埋納するピット	炭化種実	ワケ型・種子	○
R5-K-5	S9352		弥生土器片・炭化物を埋納するピット	炭化種実	クワ・子葉	○
R5-K-6	S9352		弥生土器片・炭化物を埋納するピット	炭化材	ヒノキ	○
R5-K-7	S1555 P1(土柱穴)	柱材	弥生時代後期の竪穴建物	炭化材	クワ	○
R5-K-8	S1555 P2(土柱穴)	柱材	弥生時代後期の竪穴建物	炭化材	クワ	○
R5-K-9	S1555 No7	榿木?	弥生時代後期の竪穴建物	炭化材	クワ	○
R5-K-10	S1555 No10	榿材/屋椽材?	弥生時代後期の竪穴建物	炭化材	クワ	○
R5-K-11	S1555 No15	榿材/屋椽材?	弥生時代後期の竪穴建物	炭化材	クワ	○

1) R5-S: その他受託事業。R5-K: 受託事業

2) 放射性炭素年代測定対象試料

び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995、1996、1997、1998、1999）を参考にする。

炭化種実とは、双眼実体顕微鏡で観察し、その形態的特徴から種類を同定する。なお、SP357 より出土したマメ類の炭化した完形種子の計測はデジタルノギスを使用する。

(2) 放射性炭素年代測定

SP321 (R5-K-1) と SP357 (R5-K-3) は塊状をなすイネ・穎果の一部より 20mg 程度を採取し、測定試料とする。炭化材は表面に付着した泥などの不純物を削り落として 50mg に調整したものを測定試料とする。試料を塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1 mol/L である。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化 (鉄を触媒とし水素で還元する) は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、14C の計数、13C 濃度 (13C/12C)、14C 濃度 (14C/12C) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。δ 13C は試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma; 68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach, 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk, 2009)、較正曲線は IntCal20 (Reimer et al., 2020) である。

なお、暦年較正は、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (14C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。

3. 結果

(1) 炭化物同定

1) 炭化材

結果を表 1 に示す。炭化材は、針葉樹 1 種類 (ヒノキ)、広葉樹 4 種類 (ハンノキ属、コナラ属、コナラ亜属、クスノギ節、クリ、ナシ亜科?) に同定された。以下に確認された種類 (分類群) の解剖学的特徴等を記す。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は、仮道管の早材部から晩材部への移行がやや急である。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型〜トウヒ型で、1 分野に 2 個が多い。放射組織は単列、1〜10 細胞高。

・ハンノキ属 (*Alnus*) カバノキ科

散孔材で、道管は単独または 2〜4 個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、

壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと集合放射組織とがある。形状はハンノキ亜属 (*Alnus subgen. Alnus*) に近い。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus subgen. Quercus sect. Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ナシ亜科 (*Rosaceae subfam. Maloideae*) バラ科

散孔材で、道管は単独または2～5個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔で、壁孔は交互状。内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。形状はナナカマド属 (*Sorbus*) に近い。

2) 炭化種実

結果を表1に示す。以下に確認された分類群の形態的特徴等を記す。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

SP321 (R5-K-1)、SP357 (R5-K-3) はともに稲籾 (内外穎) の状態で炭化している。稲籾はほぼ完形だが、火熱により癒着している個体や、表面の籾が脱落して穎果のみみている個体もある。籾は長さ7mm、幅4mm、厚さ3mm程度の扁平な長楕円体。保存状態の良い個体には、果実序柄 (小穂軸) や護穎がついているのが確認できる。

なお、下記のSP357 (R5-K-4) 試料の概査の際、「土器下」試料より炭化したイネ穎果 (玄米) 2個 (完形1個、破片1個) が確認された。

・マメ類 (*Leguminosae*)

SP357 (R5-K-4) の3試料 (No 4、土器下、5層 (土器No 11の上) の) の概査の結果、アズキ亜属と考えられる炭化した種子729個 (完形256個、半分以下の破片473個)、ダイズ属と考えられる炭化した種子11個 (完形7個、破片4個) が確認された。

アズキ亜属と考えられる種子は、腹面正中線の子葉合わせ目上にある長楕円形の臍は「厚膜タイプ」(小畑, 2008) が多く、隣接する幼根は殆ど突出しない。臍を欠損する種子にも腹面正中線の子葉合わせ目上にある長楕円形の臍は「厚膜タイプ」(小畑, 2008) が多く、隣接する幼根は殆ど突出しない。また、臍下の断面V字の溝が底面まで延びる「アズキ型種子」(小畑, 2008) の特徴もみられる。子葉半割面には北大基準 (吉崎, 1992) の「アズキグループ (幼根が臍の終わり程から急に立ち上がり、胚珠中央に向けて伸びる)」に該当する初生葉と考えられる部分が確認される。本分析では、これらの特徴が確認される種子をアズキ亜属 (*Vigna subgen. Ceratotropicus*) としている。その他、やや扁平な形状で臍を欠損し、臍に隣接する幼根はやや突出するダイズ属 (*Glycine*) と考えられる保存状態が悪い種子も一部確認された。なお、本分析は概査に留めており詳細な同定は今後の課題である。

また、今回の分析では、アズキ亜属とした種子を含むマメ類の完形種子のうち、土器下の40個を対象に個別計測 (計測対象とした完形種子に個別番号を付して管理)、No 4の6個と土器下55個を対象に一括計測 (計測対象とした完形種子を一括として管理) を実施した。結果を表2に示す。

完形個体101個の計測の結果、大きさの平均は長さ7.38mm、幅4.96mm、厚さ5.07mmであった。長さを基準とした最大の個体は長さ8.98mm、幅5.53mm、厚さ5.62mm、最小の個体は長さ

表2. SP357出ナメズ類の計測結果

試料名	計測 No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	鱗易槽凹 体積(mm ³)	備考
R5-K-4 SP357 No4		8.12	5.06	4.84	104.07	
		8.35	4.99	5.32	116.01	
		8.39	5.04	5.28	116.84	
		5.85	5.72	5.07	88.78	
		6.36	4.32	5.15	74.05	
		6.20	4.80	4.66	72.58	
		7.62	4.81	5.44	104.35	
		7.33	4.82	4.75	87.83	
		7.56	5.18	5.45	111.69	
		6.60	4.11	4.26	60.47	
	6.87	5.11	4.50	82.67		
	7.20	5.27	5.20	103.26		
	7.59	5.01	5.35	106.47		
	8.36	5.52	5.53	133.55		
	8.77	5.14	5.32	125.50		
	7.90	5.43	6.44	144.57		
	6.99	4.92	5.11	91.97		
	8.53	5.47	6.05	147.73		
	7.08	5.52	4.66	95.31		
	6.98	5.29	4.43	85.60		
	6.49	4.54	5.29	81.57		
	7.30	5.28	5.24	105.70		
	7.45	4.92	4.74	90.92		
	7.58	4.72	4.84	90.62		
	8.55	5.36	4.84	116.08		
	8.42	5.46	4.78	115.00		
	8.39	5.35	5.74	134.84		
	8.98	5.53	5.62	146.05		
	7.16	4.77	4.53	80.97		
	8.26	5.28	5.37	122.57		
	7.75	4.65	4.29	80.91		
	8.04	5.97	5.35	134.39		
	7.96	4.94	4.88	100.42		
	8.27	4.68	5.22	105.73		
	8.28	5.32	5.12	118.03		
	7.39	4.79	4.82	89.29		
	8.04	5.94	5.19	129.71		
	7.55	4.98	4.87	95.83		
	7.13	5.04	5.22	98.17		
	6.72	5.14	5.77	104.30		
	6.45	4.48	4.64	70.17		
	7.01	4.79	4.98	87.51		
	7.70	5.44	5.26	115.31		
	7.47	4.77	4.66	86.90		
	7.62	5.25	5.01	104.89		
	6.82	4.11	4.57	67.04		
	7.49	4.63	4.86	88.20		
	6.42	4.24	4.93	70.23		
	7.65	4.96	4.99	99.09		
	6.83	5.04	5.06	91.15		
	7.09	5.10	4.68	88.56		
	7.71	5.22	4.75	100.05		
	7.99	5.16	4.77	102.92		
	6.07	4.25	4.33	58.46		
	6.92	4.94	4.61	82.47		
	7.21	5.48	4.81	99.46		
	7.55	5.25	5.13	106.41		
	7.20	5.37	4.69	94.90		
	6.86	5.91	4.59	97.39		
	7.23	5.20	5.07	99.75		
	7.33	5.11	4.86	95.27		

試料名	計測 No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	鱗易槽凹 体積(mm ³)	備考
R5-K-4 SP357 土器下	1	8.15	4.81	5.31	108.94	図版3-1
	2	6.24	5.32	5.34	92.77	図版3-2
	3	7.26	4.94	5.22	97.97	図版3-3
	4	7.28	4.79	4.98	90.88	図版3-4
	5	7.46	4.34	4.83	81.84	図版3-5
	6	7.22	4.97	5.10	95.77	図版3-6
	7	6.71	4.58	4.97	79.93	図版3-7
	8	8.10	4.83	4.36	89.27	図版3-8
	9	7.02	4.62	5.21	88.43	図版3-9
	10	7.92	4.81	4.79	95.50	図版3-10
	11	7.49	4.82	5.53	104.48	
	12	7.37	4.99	5.59	107.59	
	13	6.88	5.26	5.30	100.38	
	14	7.11	4.45	4.64	76.83	
	15	7.36	5.04	5.34	103.66	
	16	6.99	4.97	5.73	104.18	
	17	6.35	4.61	5.21	79.82	
	18	7.52	4.61	4.82	87.45	
	19	7.58	4.93	5.83	114.02	
	20	6.69	4.34	4.34	65.95	
	21	7.89	4.80	5.20	103.06	
	22	7.34	4.95	5.67	107.81	
	23	7.18	4.28	4.53	72.85	
	24	7.21	4.83	5.31	96.77	
	25	7.25	4.47	5.16	87.51	
	26	7.49	5.20	5.82	118.63	
	27	8.38	5.44	5.60	133.60	
	28	7.23	4.82	5.39	98.30	
	29	6.39	5.02	5.23	87.80	
	30	7.39	4.59	5.18	91.95	
	31	6.80	4.23	4.40	66.23	
	32	6.67	5.17	4.99	90.05	
	33	7.33	4.48	5.03	86.44	
	34	7.17	4.03	5.53	83.62	
	35	7.36	5.16	5.70	113.29	
	36	7.30	4.93	5.37	101.14	
	37	7.16	5.36	5.67	113.88	
	38	7.68	4.71	4.92	93.14	
	39	6.87	4.90	4.79	84.39	
	40	7.40	4.51	4.19	73.18	

5.85mm、幅 5.72mm、厚さ 5.07mm である。分散は長さ 0.39、幅 0.16、厚さ 0.18 であり、長さに対して幅や厚さはほぼ一定（5mm 程度）である。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

SP678 (R5-S-4) と SP357 (R5-K-5) は、クリの子葉である。子葉は炭化しており、一側面は偏平で反対面は丸みがある。子葉は硬く緻密で、表面には種皮（渋皮）の圧痕の縦筋が粗く波打つ。子葉の大きさは、SP678 (R5-S-4) が高さ 12mm、幅 15mm 程度、SP357 (R5-K-5) が高さ 17mm、幅 25mm 程度である。

(2) 放射性炭素年代測定

結果を表 3 に示す。同位体補正を行った放射性炭素年代測定結果は、SK614 (R4-1) が $9485 \pm 35BP$ 、SK618 (R4-2) が $4515 \pm 25BP$ 、SI625 P4 (R4-3) が $1955 \pm 20BP$ 、SS680 (R4-4) が $4150 \pm 25BP$ 、SK707 (R4-5) が $4600 \pm 25BP$ 、SS175 № 1 (R5-S-1) が $4680 \pm 30BP$ 、SS458 (R5-S-2) が $9015 \pm 35BP$ 、SP678 (R5-S-3) が $2035 \pm 20BP$ 、SS386 (R5-S-5) が $9555 \pm 35BP$ 、SI200 № 12 (R5-S-6) が $8610 \pm 35BP$ 、SP321 (R5-K-1) が $1970 \pm 20BP$ 、SK357 (R5-K-3) が $1935 \pm 20BP$ 、SK357 (R5-K-6) が $2075 \pm 20BP$ 、SI555 P4 (R5-K-7) が $2015 \pm 20BP$ である。

また、暦年較正結果 (2 σ) は、SK614 (R4-1) が 11068 ~ 10585calBP、SK618 (R4-2) が 5304 ~ 5050calBP、SI625 P4 (R4-3) が 1972 ~ 1826calBP、SS680 (R4-4) が 4823 ~ 4578calBP、SK707 (R4-5) が 5446 ~ 5145calBP、SS175 № 1 (R5-S-1) が 5473 ~ 5320calBP、SS458 (R5-S-2) が 10244 ~ 9968calBP、SP678 (R5-S-3) が 2048 ~ 1891calBP (calBC 99 ~ calAD 59)、SS386 (R5-S-5) が 11090 ~ 10711calBP、SI200 № 12 (R5-S-6) が 9680 ~ 9530calBP、SP321 (R5-K-1) が 1984 ~ 1830calBP (calBC 35 ~ calAD 120)、SK357 (R5-K-3) が 1929 ~ 1747calBP (calAD 21 ~ calAD 203)、SK357 (R5-K-6) が 2114 ~ 1949calBP (calBC 165 ~ calAD 2)、SI555 P4 (R5-K-7) が 2000 ~ 1885calBP (calBC 51 ~ calAD 66) である。

4. 考察

(1) 植物利用

1) 炭化材

炭化材同定の結果、針葉樹のヒノキ、広葉樹のハンノキ属、コナラ属コナラ亜属クヌギ節、クリ、ナシ亜科? の 5 種類が確認された。温帯性の常緑針葉樹であるヒノキは、やや多湿で温暖な場所を好む種類であるが、土壌流出が起きやすい痩せた土地や、寒暖の差が激しい内陸部でも生育可能である。長野県内では木曽谷や伊那谷など内陸性気候の地域で自生する。ハンノキ属は多湿を好み谷沿いや河川沿い、沼沢地の周りなどに生育する。クヌギ節やクリは、コナラ節とともに林縁や河川沿いなど明るい林地を好む種類であり、とくにクヌギ節は多湿を好む傾向にある。これらは成長が早く、萌芽による更新が容易とされ、伐採や粗朶の収奪などの人為的干渉に強いことから、人里近くに里山林を構成する。ナシ亜科は明るいところを好む陽樹である。これらの樹種は、本遺跡の立地を踏まえると、周辺より容易に入手できたと考えられる。

縄文時代の土坑や集石から出土した炭化材からは、ハンノキ属、クヌギ節、クリの 3 種類が確認された。クリの木材は火持ちが良く、火力も強いことから、薪炭材として有用とされる。クヌギ節は近縁種（ともにブナ科）であり、木材の性質も似ており、薪炭材などにも利用される。これらの炭化材は、調査所見等を参考とすると、燃料材等に利用された木材と推定される。落し穴とされる

表3. 放射性廃棄物年代測定結果および暦年校正結果

No.	試料名	性状	処理方法	暦正年代 BP (暦年校正用)	Δ°C (%)	暦年校正年代				Code No.									
						年代値					標準差								
						1σ	2σ	3σ	4σ										
R4-1	SR614	炭化材 (タリ)	AAA (IM)	9485±35 (9487±33)	-27.96 ±0.11	11057	11050	11050	2.1	FD-49519	pal-14676								
						10996	10974	10974	9.1										
						10775	10680	10680	55.2										
						10670	10664	10664	2.0										
						11068	11026	11026	8.4										
						11009	10961	10961	12.9										
						10868	10852	10852	1.2										
						10802	10647	10647	66.2										
						10628	10585	10585	6.7										
						10322	10295	10271	11.7										
R4-2	SR618	炭化材 (ハンノキ葉)	AAA (IM)	4515±25 (4514±25)	-30.44 ±0.12	5185	5126	5126	29.3	FD-49520	pal-14677								
						5109	5055	5055	27.3										
						5204	5213	5213	28.4										
						5128	5059	5059	66.0										
						4911	4924	1902	20.1										
						4895	1866	1866	28.4										
						1855	1834	1834	19.7										
						1972	1969	1969	0.4										
						1743	1826	1826	95.0										
						4836	4789	4789	13.5										
R4-3	S1625 P4	炭化材 (ナンネ科?)	AAA (IM)	1955±20 (1956±21)	-27.58 ±0.12	2802	2802	2802	4.3	FD-49521	pal-14678								
						2774	2676	2676	6.5										
						2874	2795	2795	30.9										
						2786	2629	2629	64.5										
						3487	3471	3436	27.6										
						3373	3356	3356	40.0										
						3497	3436	3436	53.9										
						3380	3338	3338	43.0										
						3207	3196	3196	1.5										
						3515	3493	3493	16.6										
R4-4	SR680	炭化材 (タリ)	AAA (IM)	4130±25 (4149±24)	-29.19 ±0.11	4764	4751	4751	6.3	FD-49522	pal-14679								
						4723	4619	4619	48.5										
						4823	4744	4744	30.9										
						4735	4578	4578	64.5										
						5436	5420	5420	27.6										
						5322	5305	5305	40.0										
						5446	5385	5385	53.9										
						5329	5287	5287	43.0										
						5156	5145	5145	1.5										
						5464	5442	5442	16.6										
R5-1	SS175 No.1	炭化材 (クス木節)	AAA (IM)	4680±30 (4681±28)	-30.82 ±0.17	5411	5371	5371	29.6	FD-51929	pal-15046								
						5363	5341	5341	15.1										
						5335	5325	5325	6.9										
						5473	5329	5329	95.4										
						8280	8237	8237	68.3										
						8295	8202	8202	92.8										
						8106	8101	10055	29590										
						8034	8019	9983	19017										
						49	AD 9	1998	1941			68.3							
						99	AD 70	2048	2019			7.9							
R5-2	SS458	炭化材 (クス木節)	AAA (IM)	9015±35 (9014±35)	-28.19 ±0.15	10244	10131	10131	82.3	FD-51930	pal-15017								
						10055	10050	10050	6.5										
						9983	9968	9968	2.2										
						1998	1941	1941	68.3										
						2048	2019	2019	7.9										
						2097	1921	1921	84.8										
						1968	1881	1881	2.8										
						9121	8992	8992	40.1										
						8923	8893	10871	10844			19.6							
						8846	8806	10815	10755			8.6							
9141	8959	11090	10908	48.1															
8932	8782	10901	10711	46.4															
R5-3	SP678	炭化材 (タリ)	AAA (IM)	2035±20 (2033±22)	-30.02 ±0.17	9601	9572	9572	20.1	FD-51931	pal-15018								
						9559	9532	9532	48.2										
						9600	9530	9530	3.3										
						1900	1870	1870	66.8										
						1851	1842	1842	7.5										
						1984	1964	1964	6.4										
						1945	1830	1830	88.0										
						1889	1825	1825	68.3										
						1929	1782	1782	92.4										
						1765	1747	1747	3.1										
R5-4	S1200 No.12	土器片着炭化物	BC1	8610±35 (8611±34)	-27.46 ±0.12	9600	9530	9530	66.8	FD-51933	pal-15020								
						1900	1870	1870	66.8										
						1851	1842	1842	7.5										
						1984	1964	1964	6.4										
						1945	1830	1830	88.0										
						1889	1825	1825	68.3										
						1929	1782	1782	92.4										
						1765	1747	1747	3.1										
						2006	2009	2009	4.4										
						2057	1995	1995	63.8										
R5-5	SP321	炭化燐葉 (イネ根葉)	AAA (IM)	1970±20 (1969±22)	-28.48 ±0.15	2114	1989	1989	9.2	FD-51927	pal-15014								
						1965	1949	1949	3.2										
						42	AD 2	1959	1949			3.2							
						84	AD 8	1991	1937			42.8							
						1902	1930	1930	25.5										
						2000	1885	1885	95.4										
						R5-6	SP357	炭化燐葉 (イネ根葉)	AAA (IM)			1935±20 (1934±22)	-31.78 ±0.14	1989	1825	1825	68.3	FD-51928	pal-15013
														1929	1782	1782	92.4		
														1765	1747	1747	3.1		
														2006	2009	2009	4.4		
2057	1995	1995	63.8																
2114	1989	1989	9.2																
1959	1949	1949	3.2																
1991	1937	1937	42.8																
1902	1930	1930	25.5																
2000	1885	1885	95.4																
R5-7	S1555 P4	炭化材 (タリ)	AAA (IM)	2015±20 (2014±22)	-28.05 ±0.17	1989	1825	1825	68.3	FD-51929	pal-15013								
						1929	1782	1782	92.4										
						1765	1747	1747	3.1										
						2006	2009	2009	4.4										
						2057	1995	1995	63.8										
						2114	1989	1989	9.2										
						1959	1949	1949	3.2										
						1991	1937	1937	42.8										
						1902	1930	1930	25.5										
						2000	1885	1885	95.4										

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5688年を使用。

2) 暦年年代は、1950年を基準として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差(=測定値の0.8%)が入る範囲)を年代値に換算した値。

4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。BC1は酸処理のみを示す。

5) 暦年の計算には、Oxcal v4.4、校正データベースは1stCal20を使用。

6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。

7) 校正曲線や校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率は、σ=68.3%、2σ=95.4%である。

SK707の炭化材は、ナシ亜科であった。調査所見によれば、炭化材は底部直上より棒状を呈する状態で出土しており、逆茂木の可能性が指摘されている。樹種からは逆茂木と断定することは難しいが、木材の材質から強度を要する用途が推定される。

弥生時代の竪穴建物から出土した炭化材は、SI625 P4から出土した炭化材がナシ亜科？、SI555から出土した炭化材5点がすべてクリに同定された。SI555の炭化材は、主柱(P2,P4)、垂木？(No 7)、壁材あるいは屋根材(No 10,15)と推定されている。いずれもクリに同定されたことから、部材の違いに関わらず、クリ材の利用が窺える。クリの木材は重堅で水湿にも強く、加工しやすいことから建築材として適材と考えられる。ナシ亜科も比較的重硬で強度が高いが、SI625は焼失家屋ではないため出土炭化材が柱材に由来するものであるかの検討を含めた評価が必要と考える。

なお、長野県内における出土事例(伊東・山田編,2012)では、弥生時代後期の住居構築材はクリの利用が確認できるものの、コナラ節を主体とする樹種構成となっている。クリ材を主体として利用する事例は、後述する北一本柳遺跡においても確認されており(佐久市教育委員会,2010)、当該期の木材利用の特徴として把握される。

次に弥生土器片や炭化物を埋納する特殊ピットとされるSP321とSP357から出土した炭化材はいずれもヒノキであった。ヒノキの木材は、軽軟で加工しやすく、水湿にも強い。さらに太く真っ直ぐな木材が得やすい有用材とされる。炭化材試料は、いずれも破片であったため本来形状や用途等についての言及は難しいが、SI555の住居構築材はクリを主体とする点を踏まえると、住居構築材とは異なる用途の木材利用が推定される。

2) 炭化種実

弥生土器片や炭化物を埋納したピット(SP678、SP321、SP357)から出土した炭化種実は、クリの子葉(SP678、SP357)、イネの穎果(SP321、SP357)およびアズキ亜属を主体とするマメ類(SP357)に同定された。これらの植物質食料を主体とする炭化種実群の出土から、クリなどは周辺の山野等から植物質食料として収穫され、遺跡内に持ち込まれたと考えられる。また、イネやマメ類等は当該期における栽培や利用が推定される。

SP321やSP357から出土した塊状を呈するイネの穎果は、調査所見から稲穂の状態で埋納・炭化を受けた可能性が指摘されていたが、観察の結果、稲穂は一定方向を向いていないことから、穂先を揃えた状態で置かれていたものが炭化した可能性は低いと判断される。ただし、稲穂の状態のイネが無秩序に重ねて置かれて炭化した場合、稲穂の向きが一定にならない可能性もあり、詳細な言及には至らない。

また、ダイズ類やアズキ類などのマメ類については、近年の研究によって、縄文時代前期～後期頃にドメスティケーション(栽培化・順化)が起きており、中部高地を中心とした地域では縄文時代中期後半頃に種子の大型化があったとされ、さらに、縄文時代後期後葉～晩期中葉には中部高地等では大型の種子が見られなくなるとされている(那須,2019)。

SP357から出土したアズキ亜属としたマメ類を含む完形種子101個は、那須ほか(2015)の簡易楕円体積(mm^3)(長さ/2×幅/2×厚さ/2×4/3× π)によって求めた結果の平均値は97.72 mm^3 である。また、那須ほか(2015)のアズキ亜属のサイズ分布の基準を参考にすると、中間型(30～60 mm^3)が1点、この他のすべてが栽培型(60～70 mm^3 以上)に相当する。

長野県内では、弥生時代のマメ類のまとまった出土事例として、東大門先遺跡Ⅱ(佐久市)の弥生時代前期の土坑から出土したアズキ類(佐久市教育委員会,2010)(那須,2019付録S2)や、北一本柳遺跡Ⅲ(佐久市)の弥生時代後期の住居跡から出土したマメ類(佐久市教育委員会,2010)な

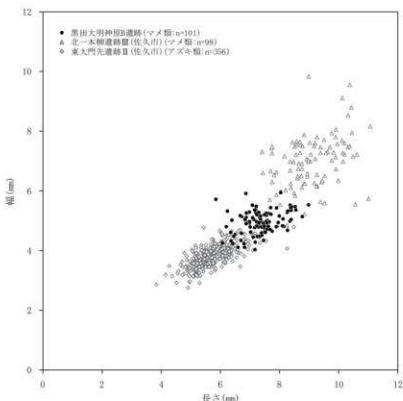


図1. 出土マメ類の大きさ

どが挙げられる。ここでは、参考として、上記した出土炭化マメ類の種子の大きさやまとまりを検討するため、上記した2遺跡より出土したマメ類の長さと同幅に基づく散布図(図1)を作成した。図1をみると、SP357出土マメ類は東大門先Ⅱ遺跡のアズキ類の分布範囲と一部で重複するが概して大型であることや、北一本柳遺跡(佐久市)のマメ類に比べて小型であることが窺える。このような傾向から種や系統が異なる可能性や時期差による違いなども想定される。これらの点の検証については、計測対象および未計測の完形種子の詳細調査や出土種子の年代の確認などによる検討、さらに同様の資料の蓄積による評価が必要である。

(2) 遺構・遺物の年代観

放射性炭素年代測定を行った試料14点の暦年較正結果(2σ)は、およそ11000～9500calBP、5500～4500calBP、2100～1750calBP(calBC2世紀～calAD2世紀)という暦年代範囲のまとまりを示した。ここでは、暦年較正結果として各暦年代範囲のまとまりを図2に示す。また、各暦年代範囲について、各試料が出土した遺構の調査所見等も踏まえて、得られた結果について考察する。およそ11000～9500calBP頃の暦年代範囲を示した試料は、SK614(R4-1)、SS386(R5-S-5)、SS458(R5-S-2)、SI200 No.12(R5-S-6)の4点である。小林(2017)を参考とすると、4試料のうち古い暦年代範囲を示すSK614とSS368は縄文時代早期前葉頃、SS458や押型土器の付着炭化物(SI200 No.12)は縄文時代早期中葉頃の暦年代範囲に相当する。調査所見によれば、SI200の出土土器は立野式を主体とするとされている。当型式の年代については小林(2017)では10585～10415calBPという値が示されており、今回の結果はこれよりも新しい暦年代範囲と言える。

およそ5500～4500calBP頃の暦年代範囲を示した試料は、SK618(R4-2)、SS680(R4-4)、SK707(R4-5)、SS175 No.1(R5-S-1)の4点である。4試料のうち古い暦年代範囲を示すSK707とSS175 No.1が縄文時代前期末から縄文時代中期初頭頃、SK618が縄文時代中期初頭から中葉頃、

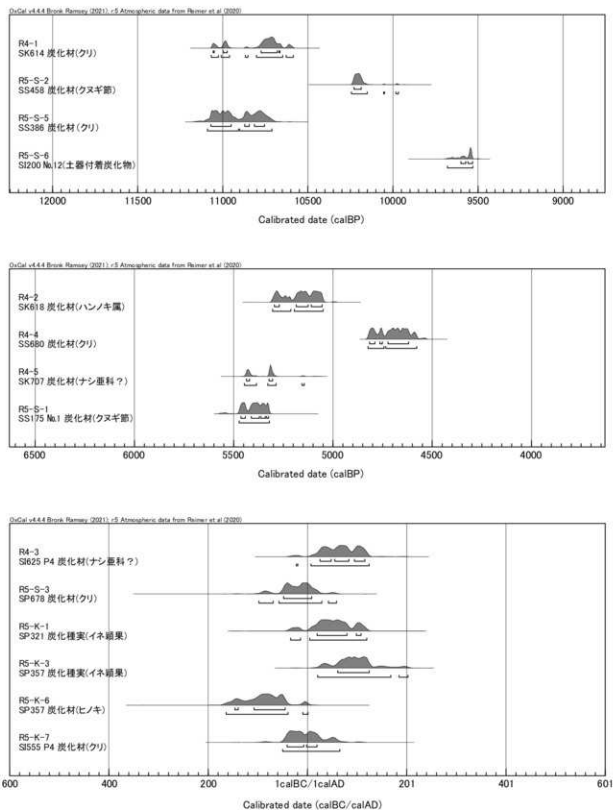


図2. 暦年校正結果

SS680 が縄文時代中期後半頃の暦年代範囲に相当する。調査所見によれば、SK618 は覆土中より縄文時代中期初頭の遺物が確認されている。得られた結果は出土遺物の年代よりも新しく、履歴の異なる炭化材の混入などの可能性も考えられる。

およそ 2100 ~ 1750calBP (calBC 2 世紀 ~ calAD 2 世紀) 頃の暦年代範囲を示した試料は、SI625 P4 (R4-3)、SP678 (R5-S-3)、SP321 (R5-K-1)、SP357 (R5-K-3.6)、SI555 P4 (R5-K-7) の 6 点である。これらの試料のうち、SP357 (R5-K-6) の炭化材 (ヒノキ) がほぼ紀元前 1 ~ 2 世紀頃と古く、SI555 と SP678 が紀元前後 1 世紀頃、SI625、SP321 および SP357 (R5-K-3) の炭化種実試料がおおよそ紀元前後から 2 ~ 3 世紀までの暦年代範囲に相当する。

調査所見によれば、SI555 と SI625 は弥生時代後期の竪穴建物とされており、SK678、SP321、SP357 は弥生時代の土器片や炭化物が埋納された特殊な遺構とされている。今回の結果は、弥生時代とする調査所見と調和的であるが、炭化材を測定対象とした試料については古木効果の影響も考慮する必要がある。この点は、同一の遺構において炭化種実 (イネ類果) と炭化材 (ヒノキ) を測定した SP357 では、炭化材が古い暦年代範囲を示したことからも指摘される。そのため、炭化材を測定試料とした場合の測定結果の評価にあたっては、出土状況 (位置) や木取りの観察所見 (測定対象とした年輪の部位等) による検討も望まれる。

また、現在使用されている IntCal20 の校正曲線は、1 ~ 3 世紀頃の値がそれ以前の校正曲線 (IntCal04 以前) よりも 100 年程度古くなっているため、暦年代を比較する場合は注意が必要である。古くなった原因は日本の弥生時代の年輪年代の結果を IntCal20 に反映させたからである。これが地域的なものであれば今後日本のデータが校正曲線を作成する元データから外される可能性も指摘されており、その扱いは注意が必要である (Reimer et al.,2020)。

<引用文献>

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久 (編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- 那須浩郎・会田 進・佐々木由香・中沢道彦・山田武文・興石 甫, 2015, 炭化種実資料からみた長野県諏訪地域における縄文時代中期のマメの利用. 資源環境と人類, 5, 37-52.
- 那須浩郎, 2019, 植物利用の変遷. 一般社団法人日本考古学協会 2019 年度岡山大会 研究発表試料集, 日本考古学協会 2019 年度岡山大会実行委員会, 41-46.

小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子,2007,土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培.植生史研究,15,97-114.

小畑弘己,2008,マメ科種子同定法.「極東先史古代の雑穀3」,日本学術振興会平成16~19年度科学研究費補助金(基盤B-2)(課題番号16320110)「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書,小畑弘己編,熊本大学埋蔵文化財調査室,225-252.

Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk R. C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon J., Turney C., Wacker L., Adolphi F., Büntgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Köhler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A. and Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal BP). Radiocarbon, 62(4), 725-757.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E., 2004, IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .

佐久市教育委員会,2010,岩村田遺跡群 西一本柳遺跡XIV.まちづくり交付金事業都市計画道路3.3.3号原東1号線 埋蔵文化財発掘調査報告書一長野県佐久市岩村田弥生時代環濠集落・古墳・奈良集落の調査一,佐久市埋蔵文化財報告書 第175集,251p.

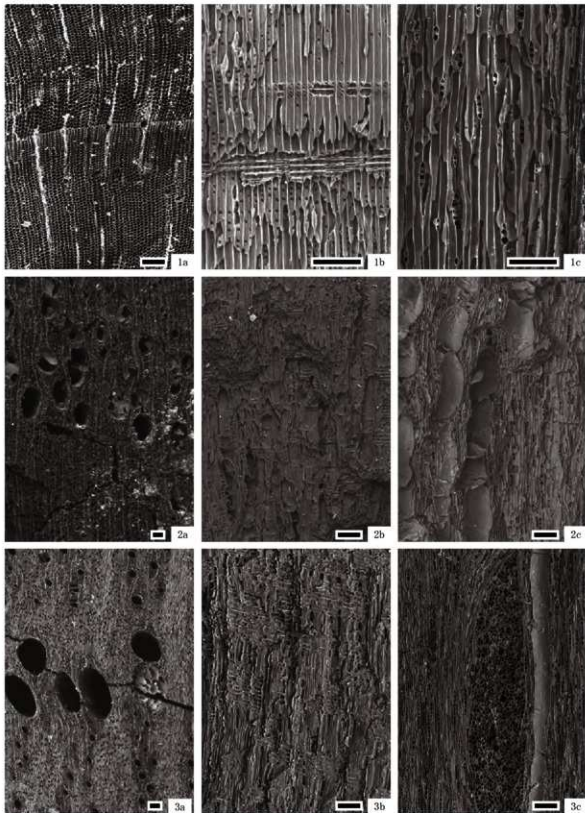
島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

吉崎昌一,1992,古代雑穀の検出.月刊考古学ジャーナル, No.355,2-14.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E., 1989, IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

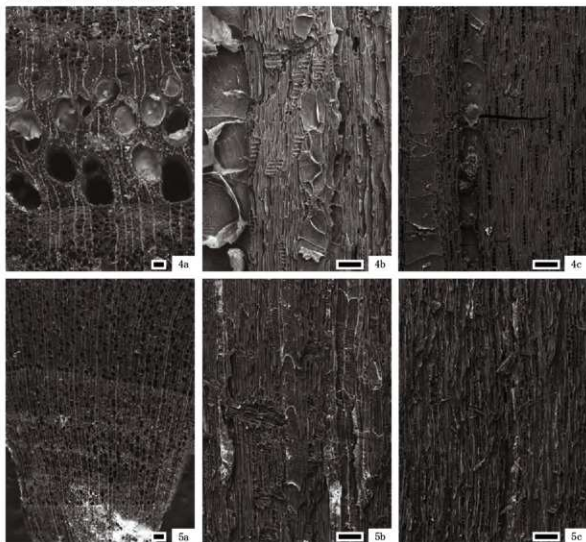
図版1 炭化材(1)



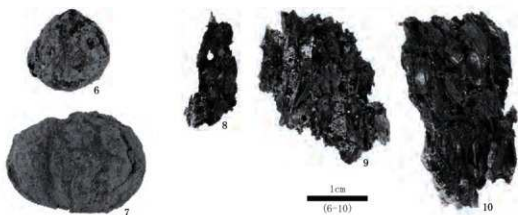
1. ヒノキ (SP321:R5-K-2)
2. ハノキ属 (SK618:R4-2)
3. コナラ属コナラ亜属クスギ節 (SS175 No.1:R5-S-1)

a:木口 b:径目 c:板目
スケールは100 μm

図版2 炭化材(2)・炭化種実(1)



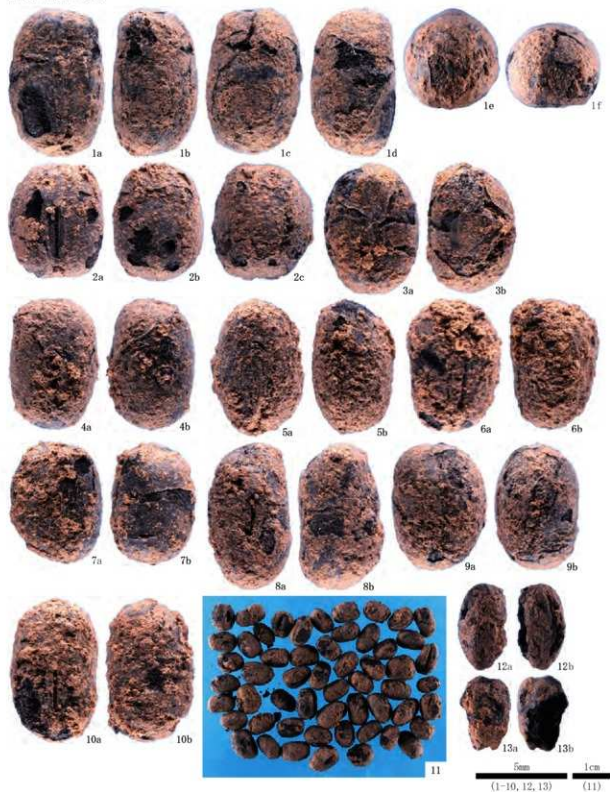
a:木口 b:経目 c:板目
スケールは100 μ m



4. クリ (SP678;R5-S-3)
6. クリ 子葉 (SP678;R5-S-4)
8. イネ・穎果 (SP321;R5-K-1)
10. イネ・穎実 (SK357;R5-K-3)

5. ナシ亜科?(SI625 P4;R4-3)
7. クリ・子葉 (SK357;R5-K-5)
9. イネ・穎果 (SK357;R5-K-3)

図版3 炭化種実(2)



1. アズキ亜属 種子 (SP357・R5-K-4 土器下; 計測No.1)
 3. アズキ亜属 種子 (SP357・R5-K-4 土器下; 計測No.3)
 5. アズキ亜属 種子 (SP357・R5-K-4 土器下; 計測No.5)
 7. アズキ亜属 種子 (SP357・R5-K-4 土器下; 計測No.7)
 9. アズキ亜属 種子 (SP357・R5-K-4 土器下; 計測No.9)
 11. アズキ亜属 種子 (SP357・R5-K-4 土器下)

2. アズキ亜属 種子 (SP357・R5-K-4 土器下; 計測No.2)
 4. アズキ亜属 種子 (SP357・R5-K-4 土器下; 計測No.4)
 6. アズキ亜属 種子 (SP357・R5-K-4 土器下; 計測No.6)
 8. アズキ亜属 種子 (SP357・R5-K-4 土器下; 計測No.8)
 10. アズキ亜属 種子 (SP357・R5-K-4 土器下; 計測No.10)
 *1~10. a: 腹面(側), b-d: 側面, c: 背面
 13. イネ 穎果(玄米) (SP357・R5-K-4; 土器下)

写真図版



調査地遠景（東から）



調査地遠景（西から）



調査着手前（南から）



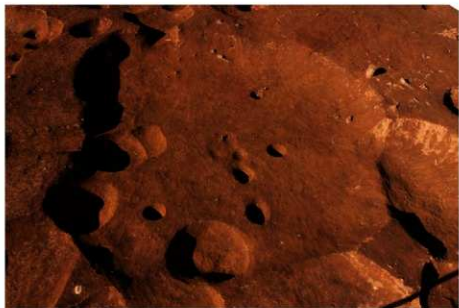
調査着手前（西から）



調査区全景



同上



S1161



S1200



S1200 土器出土状況

SI658



SI658 P15(被熱)・P13

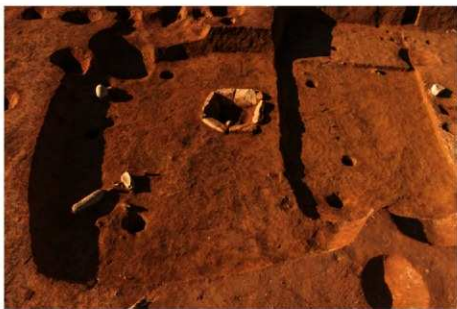


SI100





S1690



S1071



S1071 炉

S1682



S1689



S1235





S1235 床上検出状況



S1235 埋藏



S1654



SI654 炉



SI160



SI070



S1555 東隅炭化材等検出状況



S1555



S1625



S1625 炉内土器



S1667



SI715



SI1006



SI001(SB19)



SS130 検出時



SS130 礫中部



SS130 礫下部



SS076



SS093



SS171



SS175 検出時



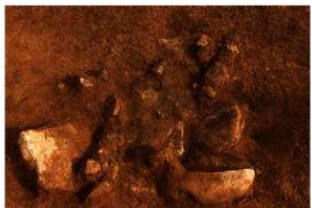
SS175 礫下段



SS186



SS201・SS202



SS220 検出時・灰の分布



SS220 礫下部



SS276 検出時



SS276 礫下部



SS305 礫下部



SS345 検出時



SS345 礫下部



SS386 検出時



SS386 断面



SS386 礫最下部



SS458 検出時



SS458 断面・灰層



SS460



SS461



SS581



SS585



SS586



SS680 断面



SS680



SK614 焼土層断面



SK614 完掘



SK141 石核検出状況



SK141 完掘



SK245・SK302 土層断面



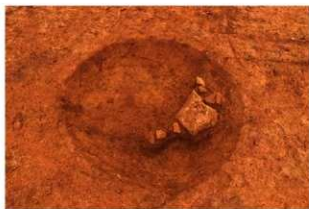
SK226 土器上段



SK226 土器中段



SK226 土器下段



SK205 出土状況



SK228 出土状況



SK341 検出状況



SK341 完掘



SK511 出土状況



SK511 完掘



SK571 出土状況



SK571 完掘

SK618 出土状況 (上部)



SK618 (下部)



SK618 完掘





SK620 出土状況



SK620 断面



SK663 出土状況



SK648 出土状況



SK660 出土状況



SK643 出土状況



SK664 出土状況



SK659 出土状況 (上部)



SK659 出土状況 (下部)



SK665 出土状況



SK666 上段出土状況



SK666 出土状況（下部）



SK688 出土状況（上部）



SK688 出土状況（下部）



SK301



SK350



SK584 土层断面



SK584 完掘



SK087



SK564



SK565



SK588



SK292



SK438



SK707



SK676



SK148 立石



SK148 立石断ち割り



SP357 土器・炭化物等



SP357 上部断面



SP357 完掘



SP678 検出状況



SP678 炭化物(木)



SP693 上部断面



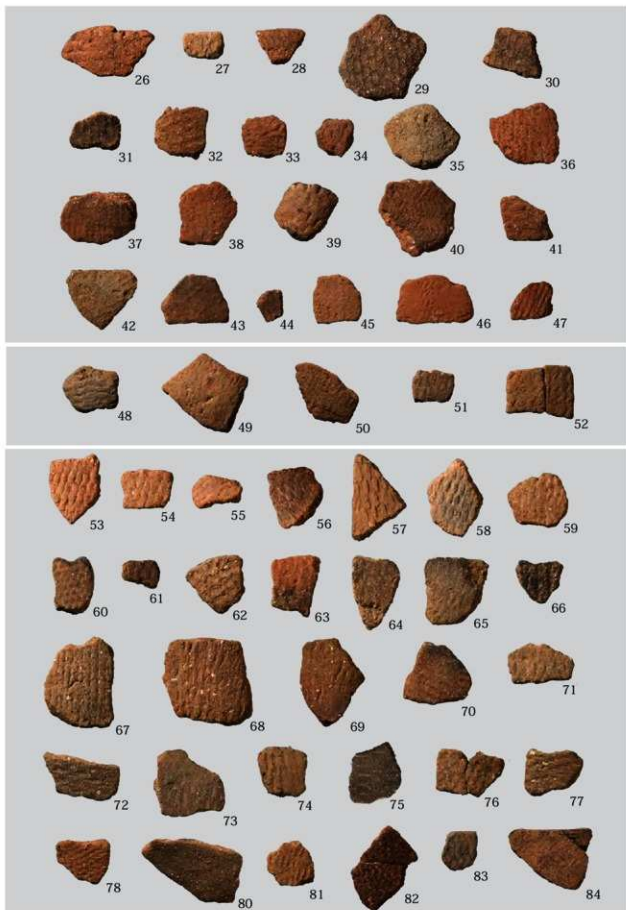
SP321 炭化物(イネ)



SP321 底部土器片



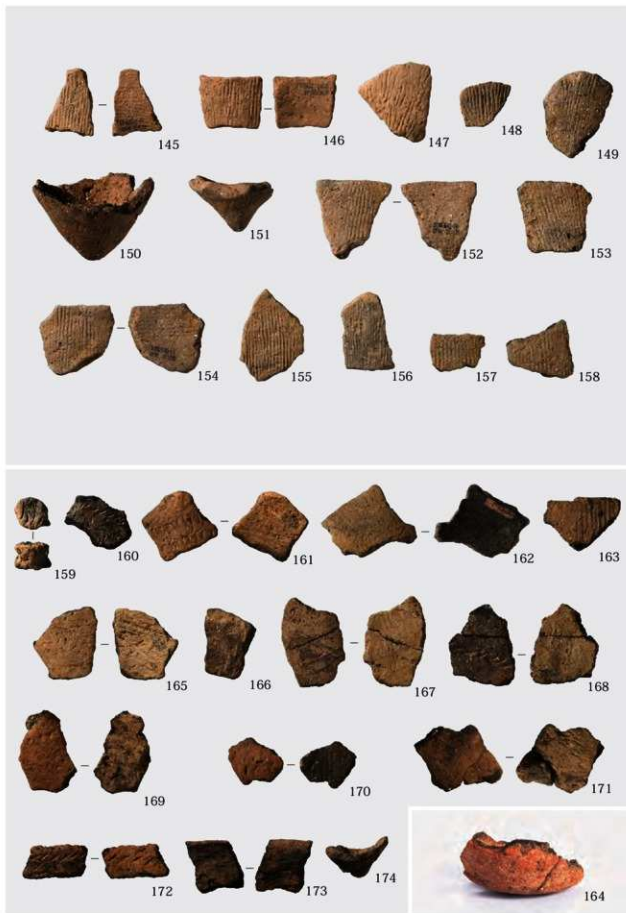
土器 (1)



土器 (2)



土器 (3)



土器 (4)



土器 (5)



土器 (6)



土器 (7)









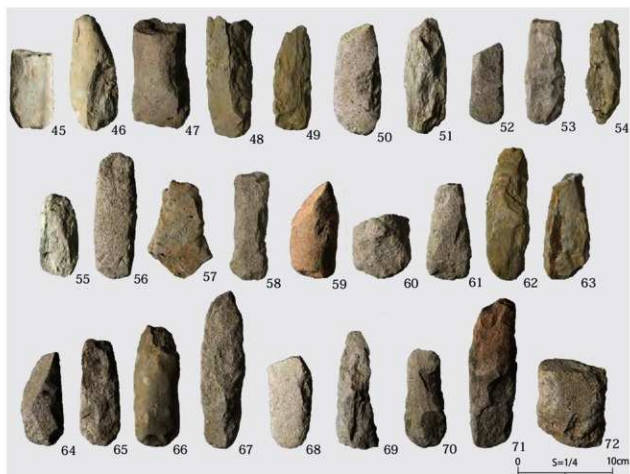
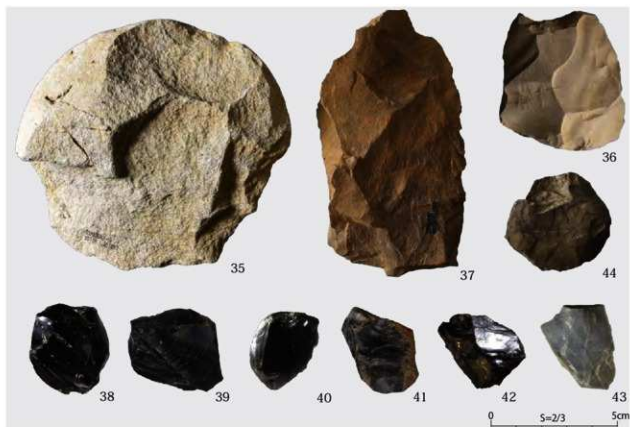
土器 (11)



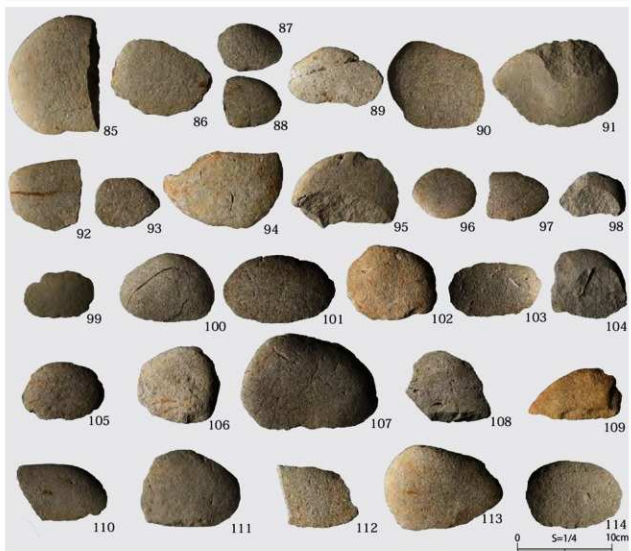
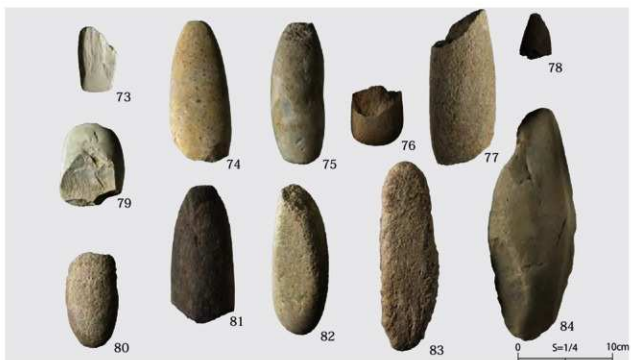


土製品

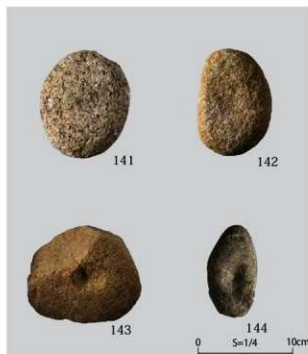
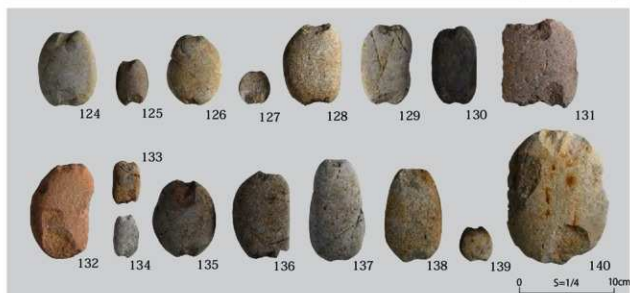
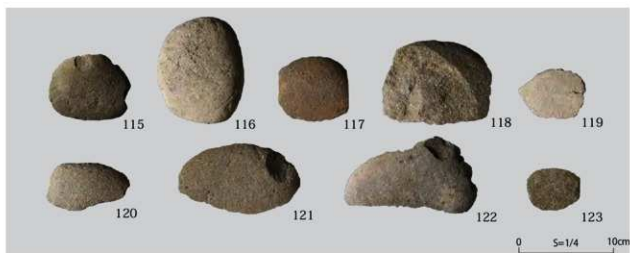




石器 (2)

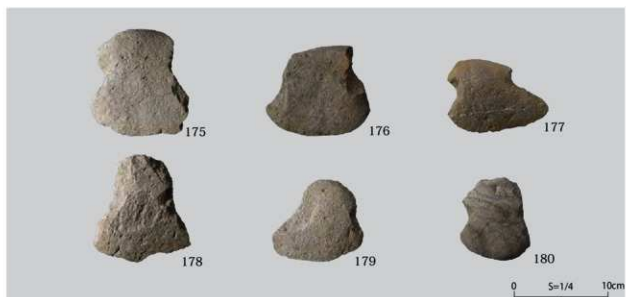


石器 (3)



石器 (4)





石器 (6)



作業風景



同上

報告書抄録

ふりがな	くろだだいみょうじんぼらびーいせき					
書名	黒田大明神原B遺跡					
副書名	座光寺上郷道路及び中部公衆医学研究所社屋等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
編著者名	春日 宇光 ・ 加藤 大智					
編集機関	長野県飯田市教育委員会					
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地					
発行年月	2024年3月					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村番号 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 調査原因
くろだだいみょうじんぼらびー 黒田大明神原 B いせき 遺跡	いだしかみさとくろだ 飯田市上郷黒田 2542-19 他	20205 68	35° 32' 01"	137° 50' 31"	2021/9/3 ～ 2022/10/25	3420.6㎡ 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
黒田大明神原B 遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代	竪穴建物17 竪穴状遺構 1 集石37 土坑471 落し穴 4 立石 1 溝 1 ビット124		縄文土器 弥生土器 土製品 石器 石核 剥片 垂飾 炭化物	弥生時代の炭化物 (穀類他) C14測定
要 約	<ul style="list-style-type: none"> ・新設道路「座光寺上郷道路」及び民間開発（社屋等新築）に伴う緊急発掘調査 ・縄文早期前半の集落を確認したほか、縄文前期～中期にかけての各時期の遺構・遺物を記録した。 ・縄文早期前半の立野式の押型文土器及び石器群、前期末及び中期初頭～中葉の土器群など、当地域でも類例が少ない時期の遺物が出土した。 ・弥生後期の複数のピットからイネ、クリ、マメの種実が出土した。このほか土器付着炭化物や竪穴建物、集石、土坑に由来する炭化物について自然科学分析を実施し、樹種等の同定や放射性炭素年代測定の分析結果が得られた。 					

黒田大明神原 B 遺跡

座光寺上郷道路及び中部公衆医学研究所社屋等
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024(令和6)年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
長野県飯田市教育委員会

印刷・製本 有限会社飯田写真印刷